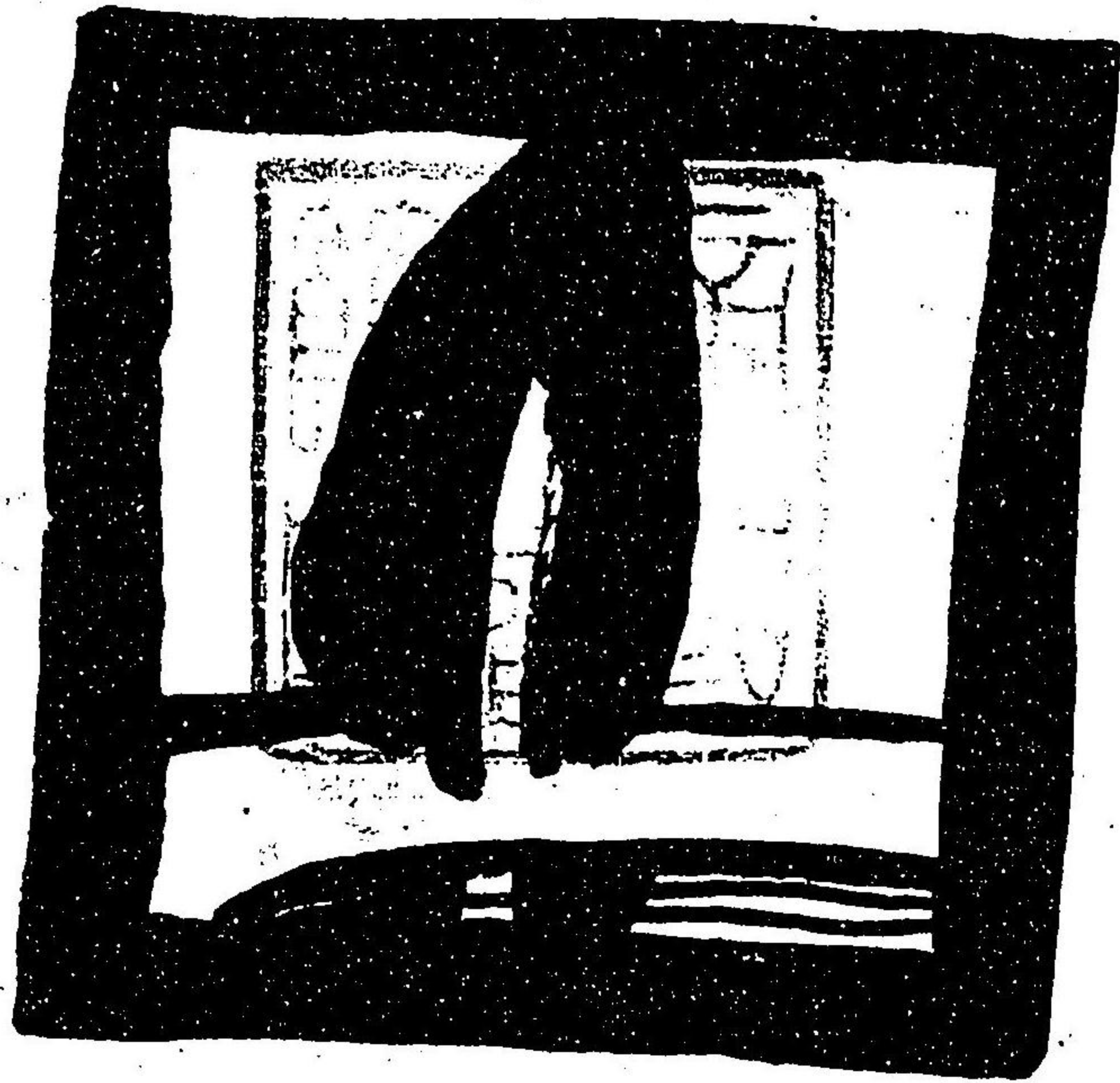


138

335-89



ヨハニイ画集

明治
11.6
内交

✓

序

三四年前からの、雑誌ホトトギスと國民新聞とに出した遊稿を合せて今度遊集を出す事になつた。

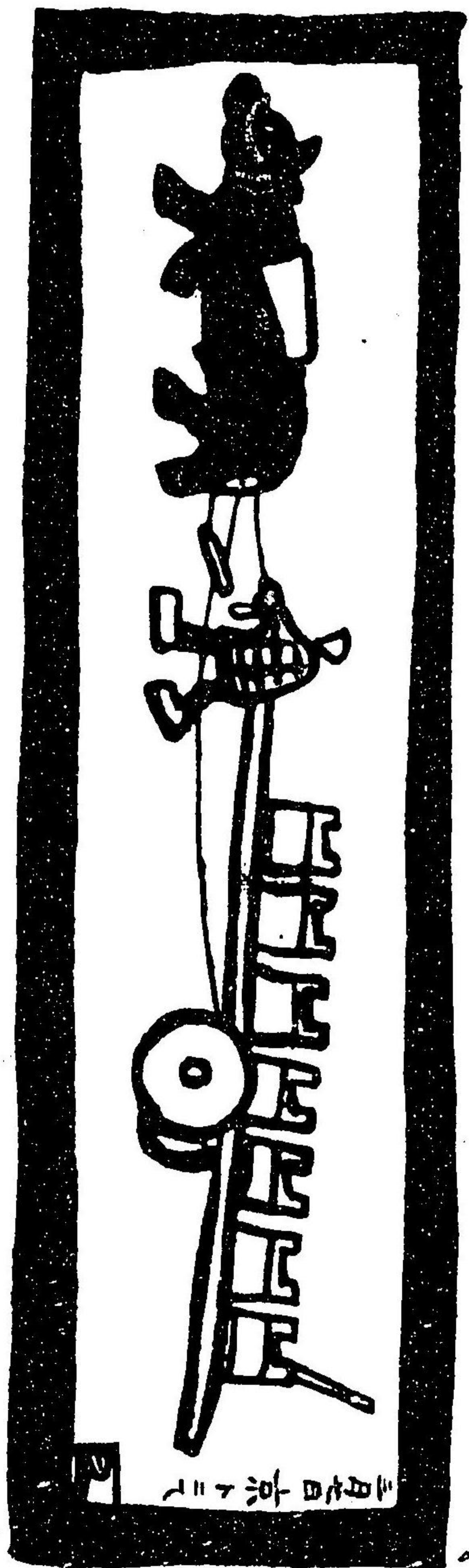
今見ると、中には随分、拙いと思ふのもあればイヤ味なもの、又書き直したいと思ふものもある。けれども大概其ままにしておいた。

私だけには——この拙い絵やイヤ味な絵を通して、これを描いた時分のころもちをまみくと味ふことが出来る。

若し此の遊集の中で、一枚でも、私が描いた時と同じ様なころもちで、之を見る人があつたら、私にとつては大いなる幸である。

四十三年十二月

ヨヘイ







鳥が木の枝でカリーと鳴いた。

其下のベンチに立ん坊のやうな

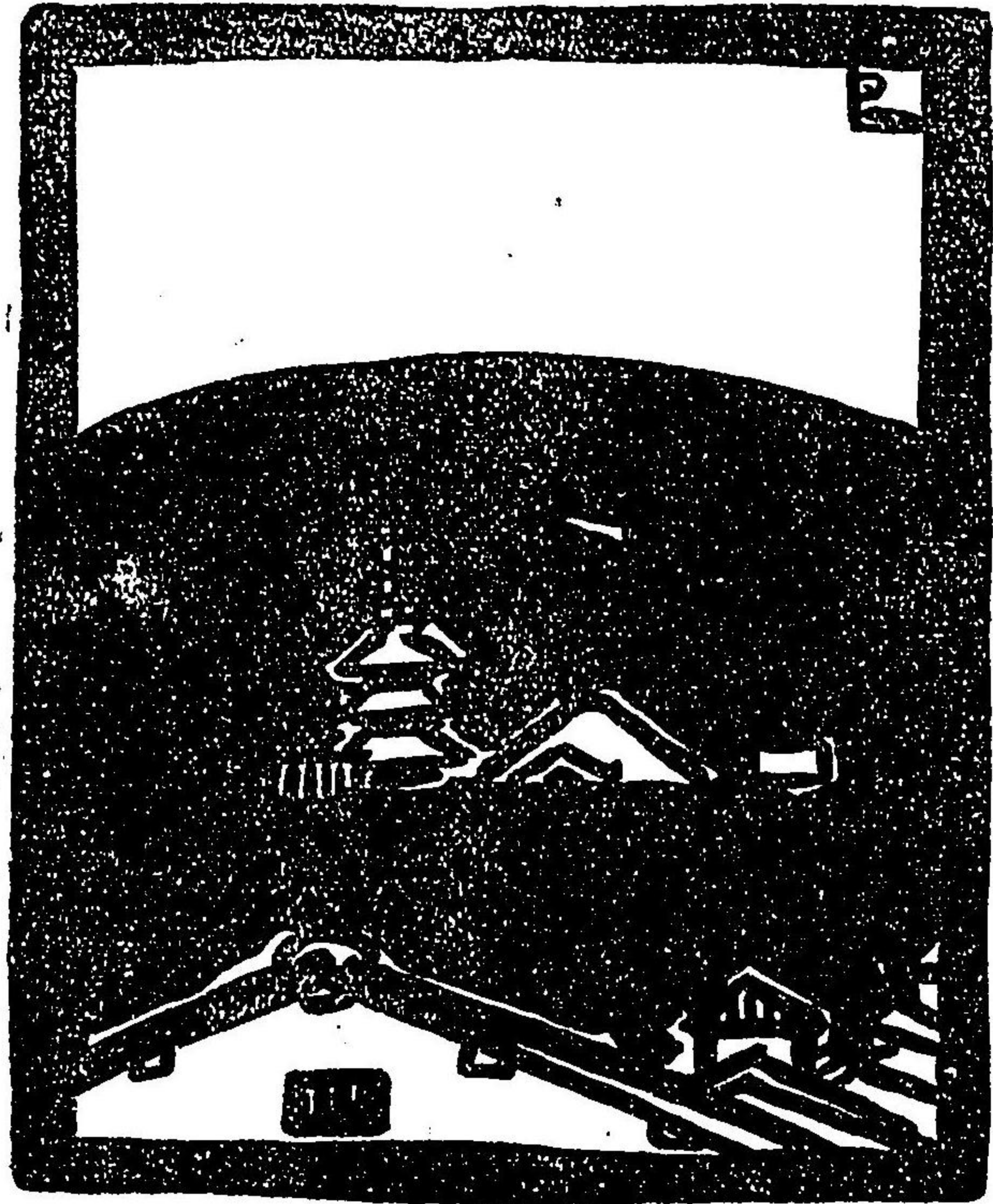
男が寝てゐる。

いびきが明かに響き取れる。

又鳥がカリーと鳴いて次の枝にも

つづた。

何でもない、只これだけである。



(明治四十三年三月京都に行き
し時のスケッチアツタより)



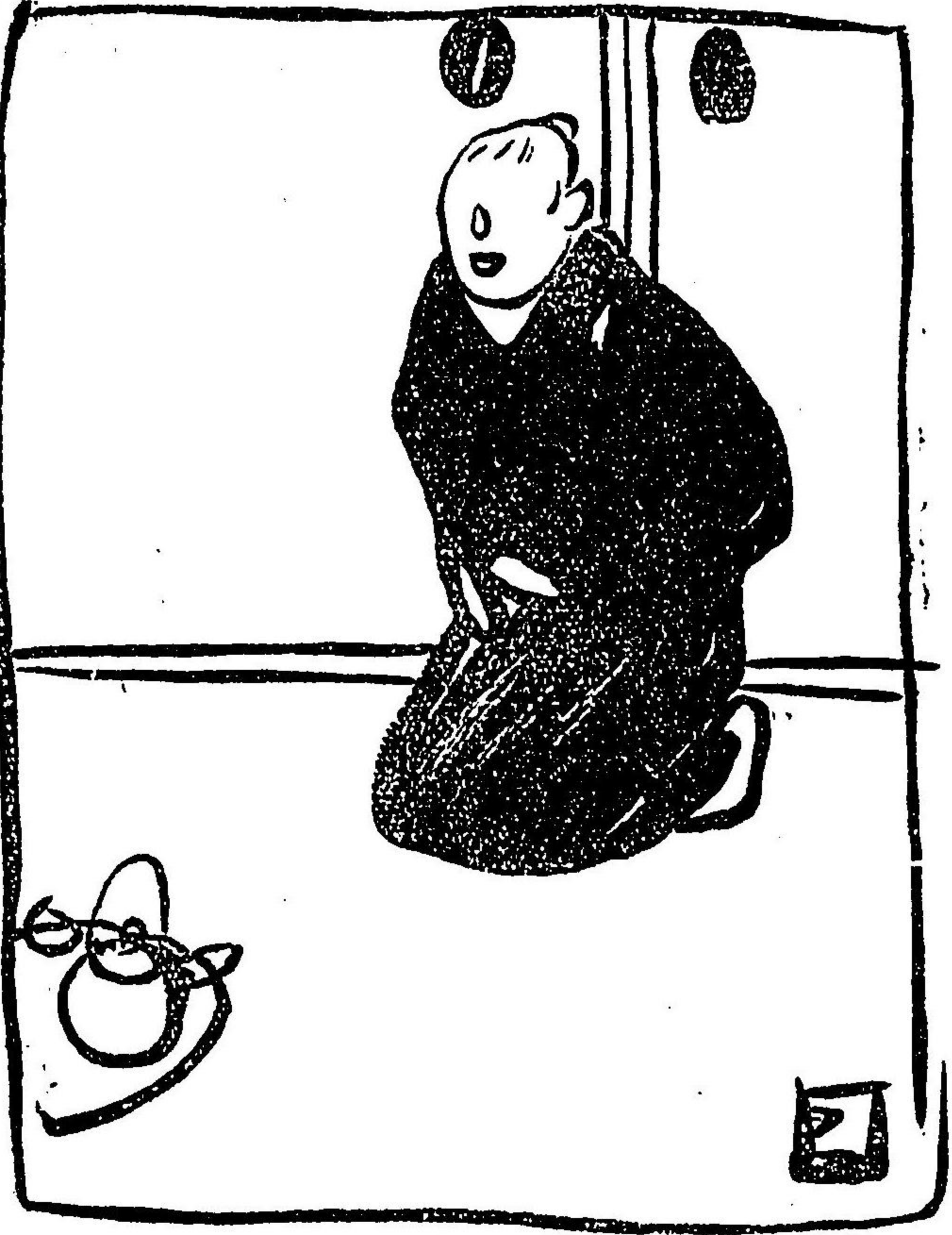
(三月六日品川停車場にて)

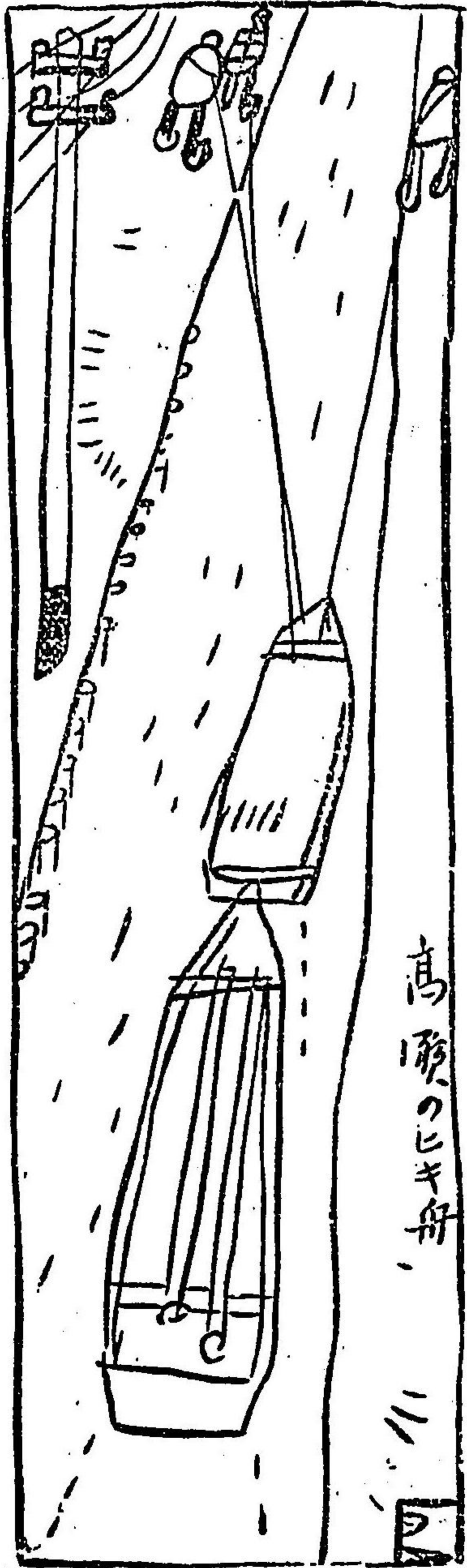
プラットホームに子供を抱いた女があつち向いて居た。山の手電車を待つてゐるらしかった。汽笛が鳴つた。自分の乗つてゐる汽車は動き出した。女はやつぱりあつち向いてゐた。段々小さくなつた。やつぱりあつち向いてゐた。ステッチアツクの女は永劫あつち向いてゐる。

(三月七日)

本館寺の中の源妙院といふに、舊友
樫野南陽君を訪ふ——不在——室に通つ
て待つ。婆さんがお茶を持って出て
来た。

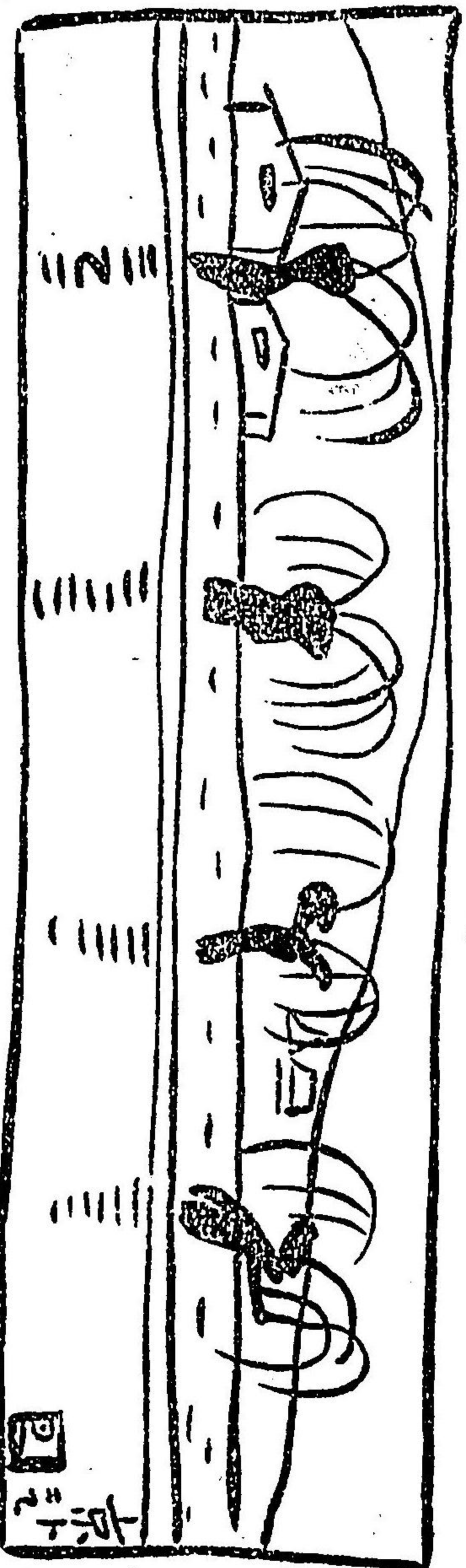
「京都は馬鹿に寒いね」と云つたら「さう
ぢすな、此二三日ホム冷えますでな
あし」と答へた。江州者らしい。
婆さんの鼻が赤かつた。



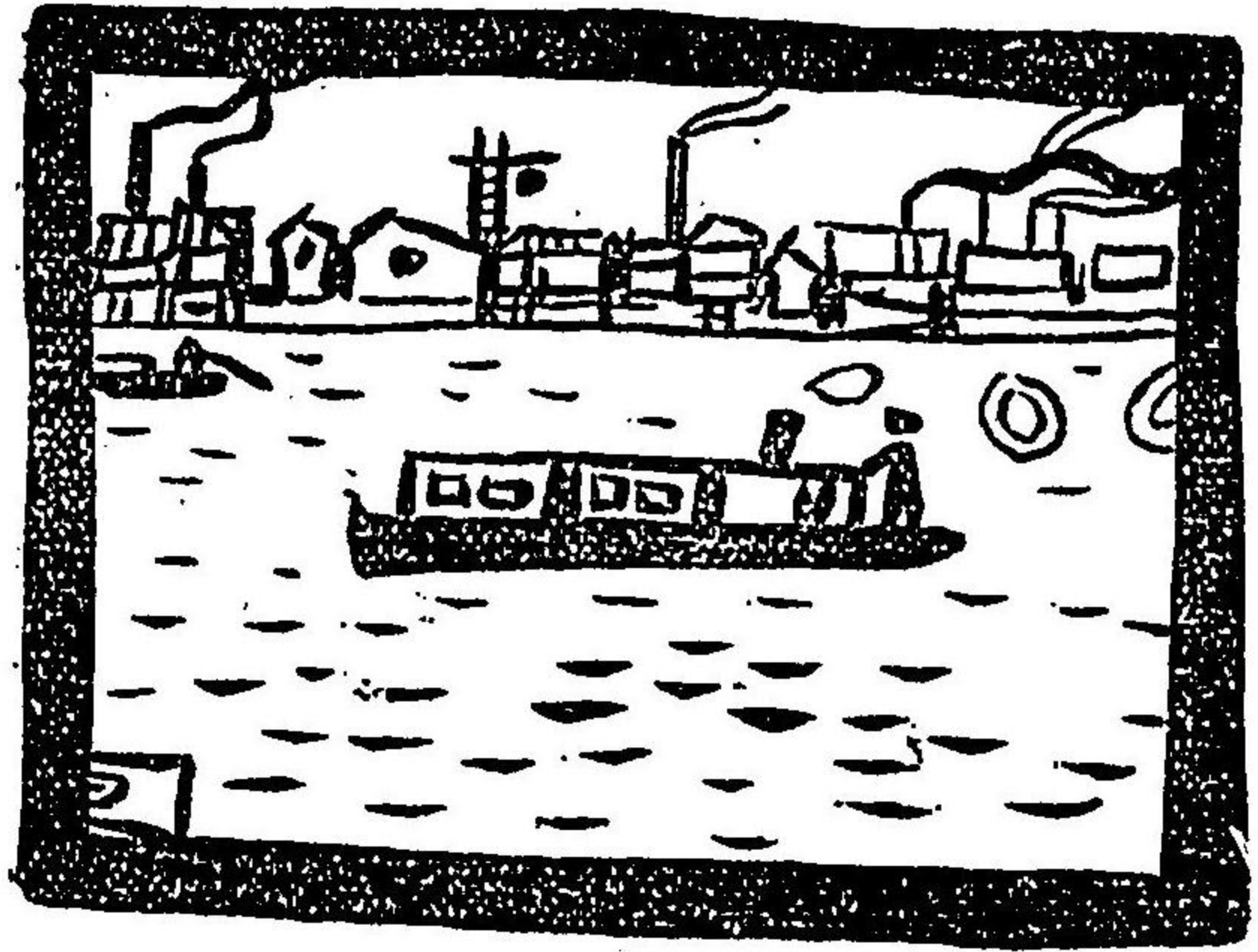


高瀬のヒギ舟

高瀬の柳を穿さうと思つて宿を出た。
来て見ると、柳はみんな切られてあつた。そしてそこには電車の線路が二本増して居つた。
繪の具箱が重かつた——皮相の文明は自然を破壊す——と云つた様な痛切な感じは別に起らなかつた。(三月八日京都にて)



自願車が砂ほこ
 りを立てて向う
 の土手を走った。
 あの柳が背く煙
 つて、向うの山
 が紫に霞む時、
 京都は京都らし
 い京都となる。
 三月八日
 京都にて



三月二十日

大阪にて

大阪の巡航船はうる

さかつた。

文樂はよかつた。

牡蠣めしはうまかつ

た。

煙草にマッチを添へ

てくれなかつた。



(新橋を夜汽車にて)

けたたましい目ざまし時計の音が
響いた。

前の椅子にびてゐた男は驚いて外
表の間によろさがつてゐる時計の
音をとめた——筑前驛りの男だった。



三月廿三日

京都にて夜十二時迄

△「三等が満員ですって」

○「此次は？」

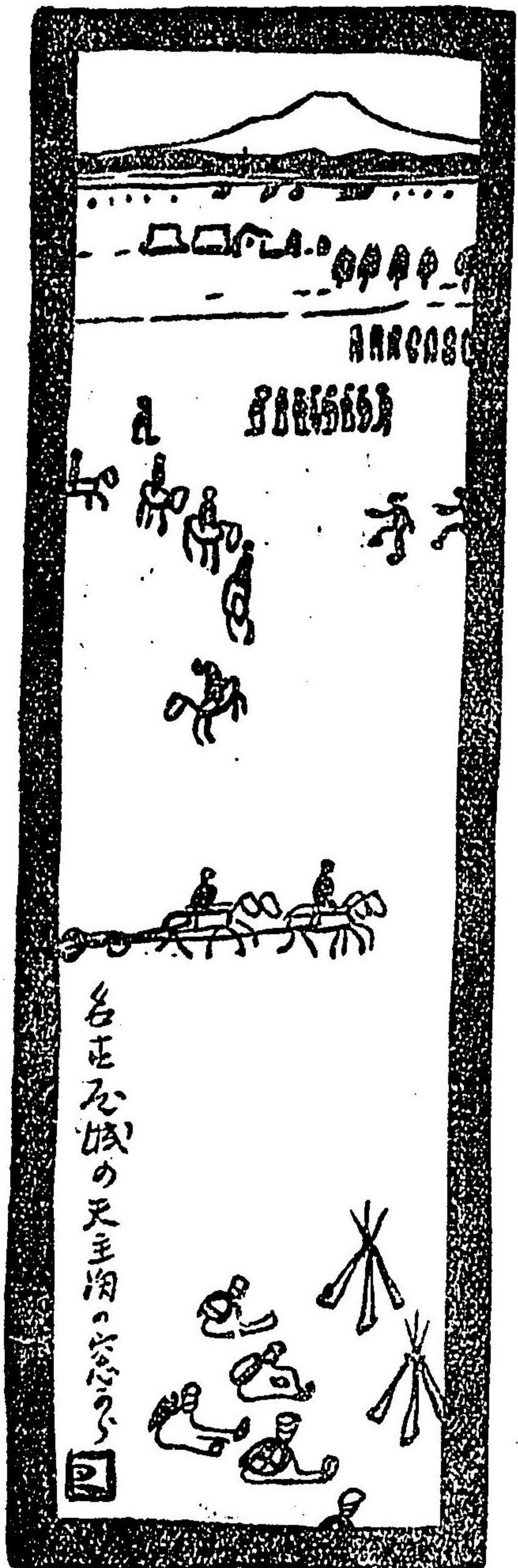
△「あすの五時シツシヤヨ」

○「ちうじきは」

△「シラシマは」

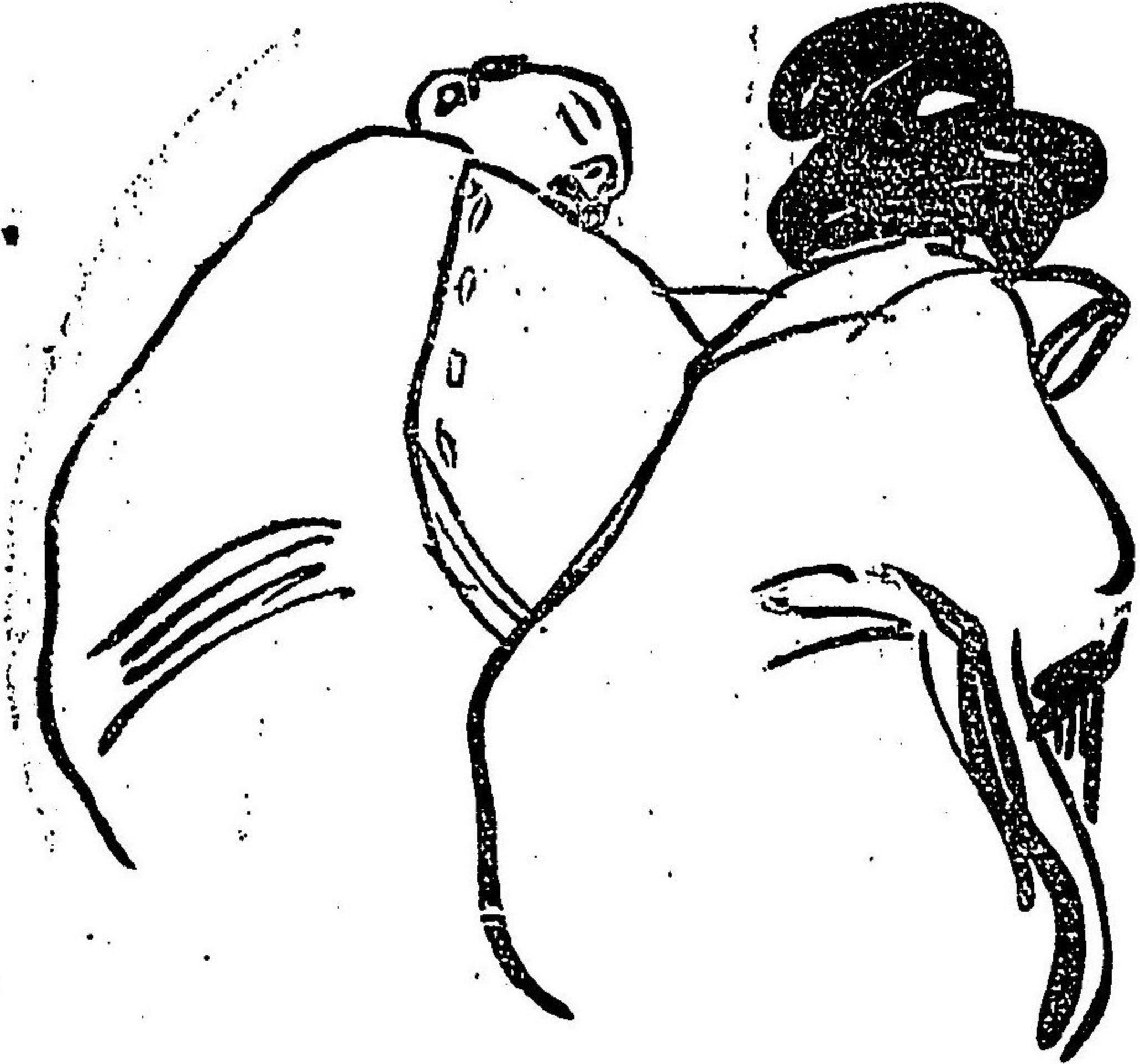
二人の肩に入の字がよつた。

一人は窓をすかして、暗い空を見た。

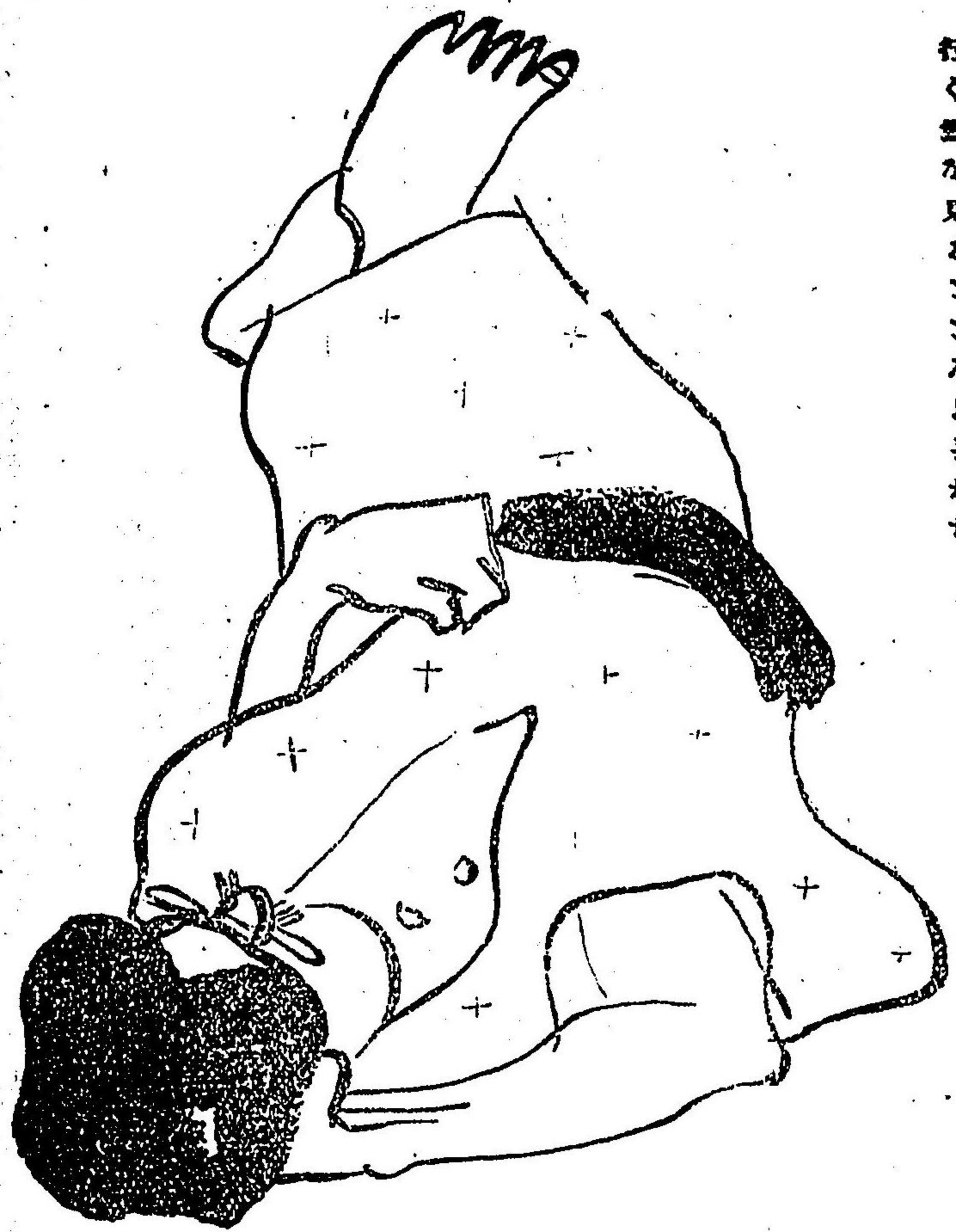


名正を城の天主閣の窓から

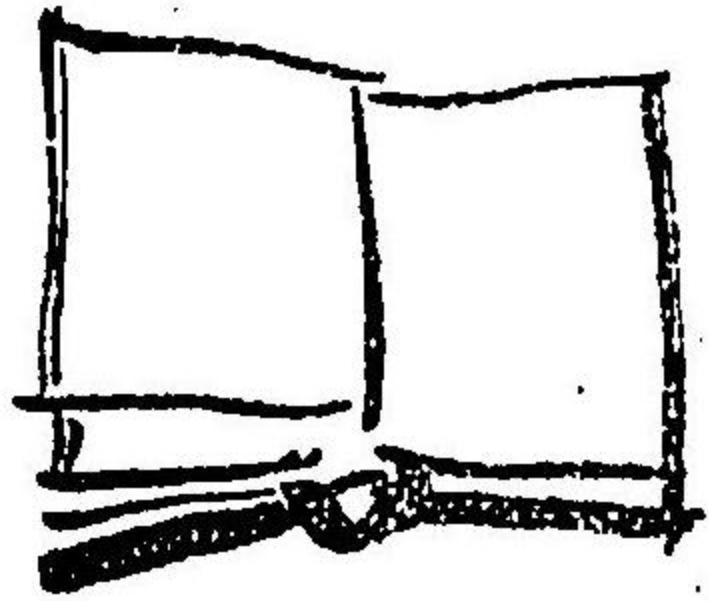
(三月廿四日、名古屋にて)
 名古屋城の天主閣の窓から練兵城を見下した。
 兵隊さんが銃砲をかついで小隊左をやつて居つた。
 目も遙かなる濠野のはてには、銀色の富士が光つて見えた。
 ラツバの壁がながく尾を引いて閉えた。兵隊さんの泣き聲の機だつた。



夫婦にしては、細君が
あまりに若かった。
お父さんにしては、男
があまりに若かった。
兄さんにしては、顔が
あまりに似てゐなかつ
た。(夜汽車にて)

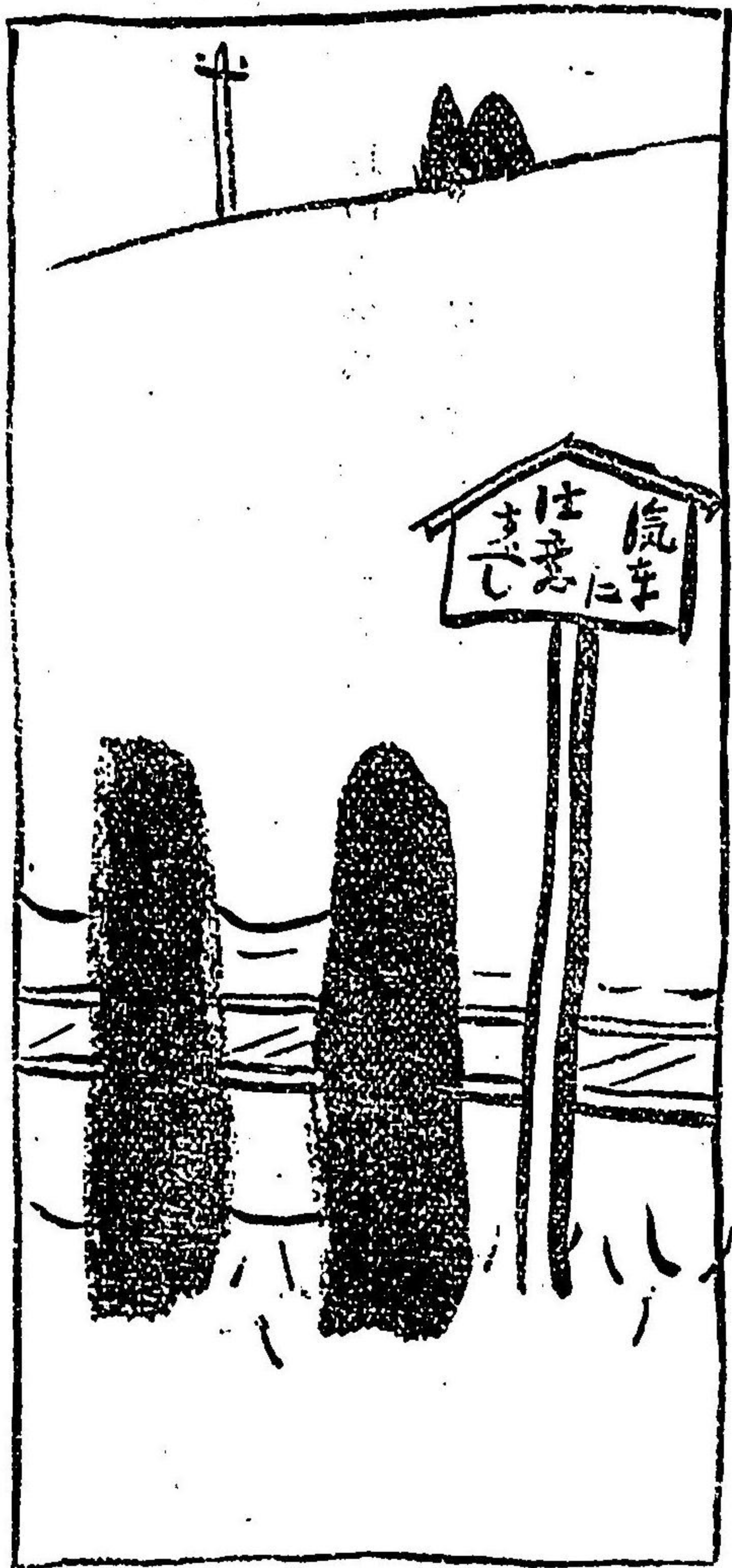


行く姿を見るころよきかな



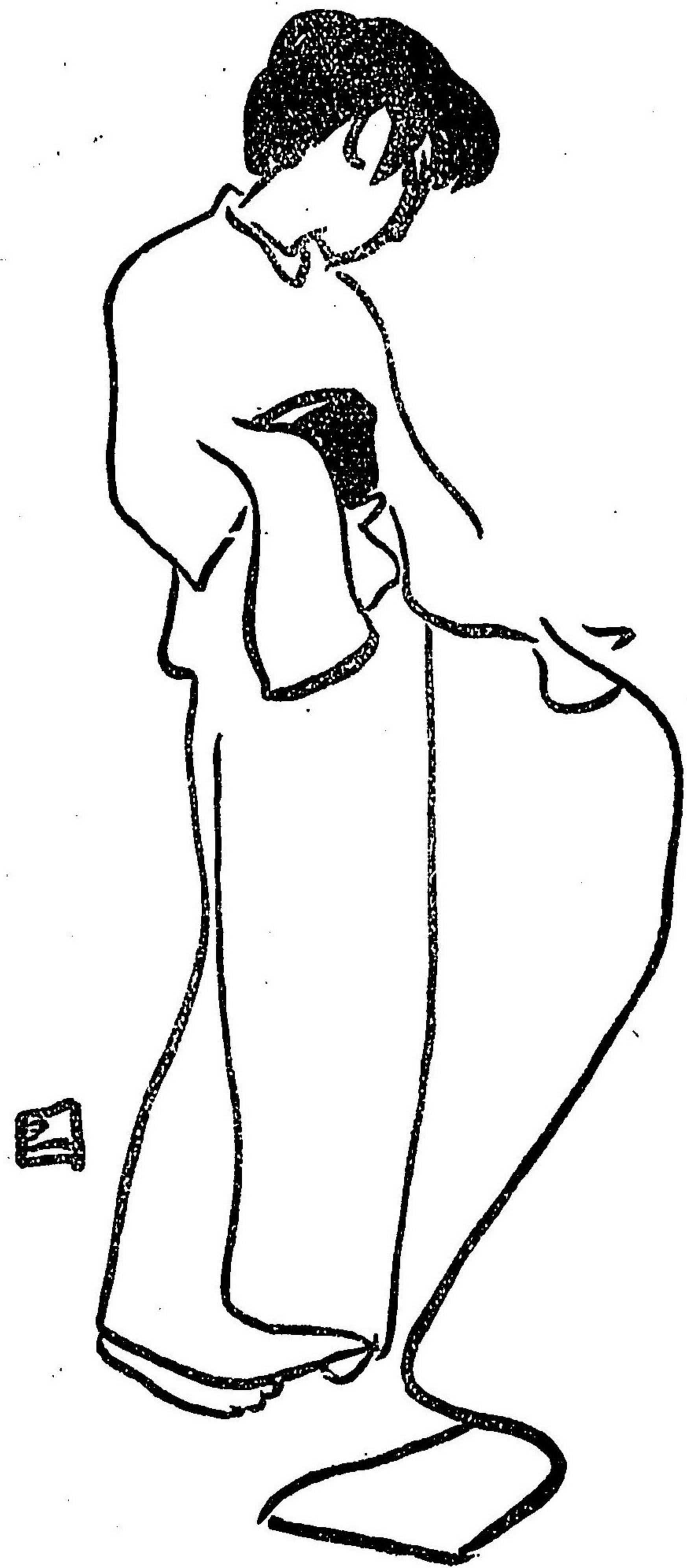
ひるね



君はいま





夏の帯はなごのうへにながながと

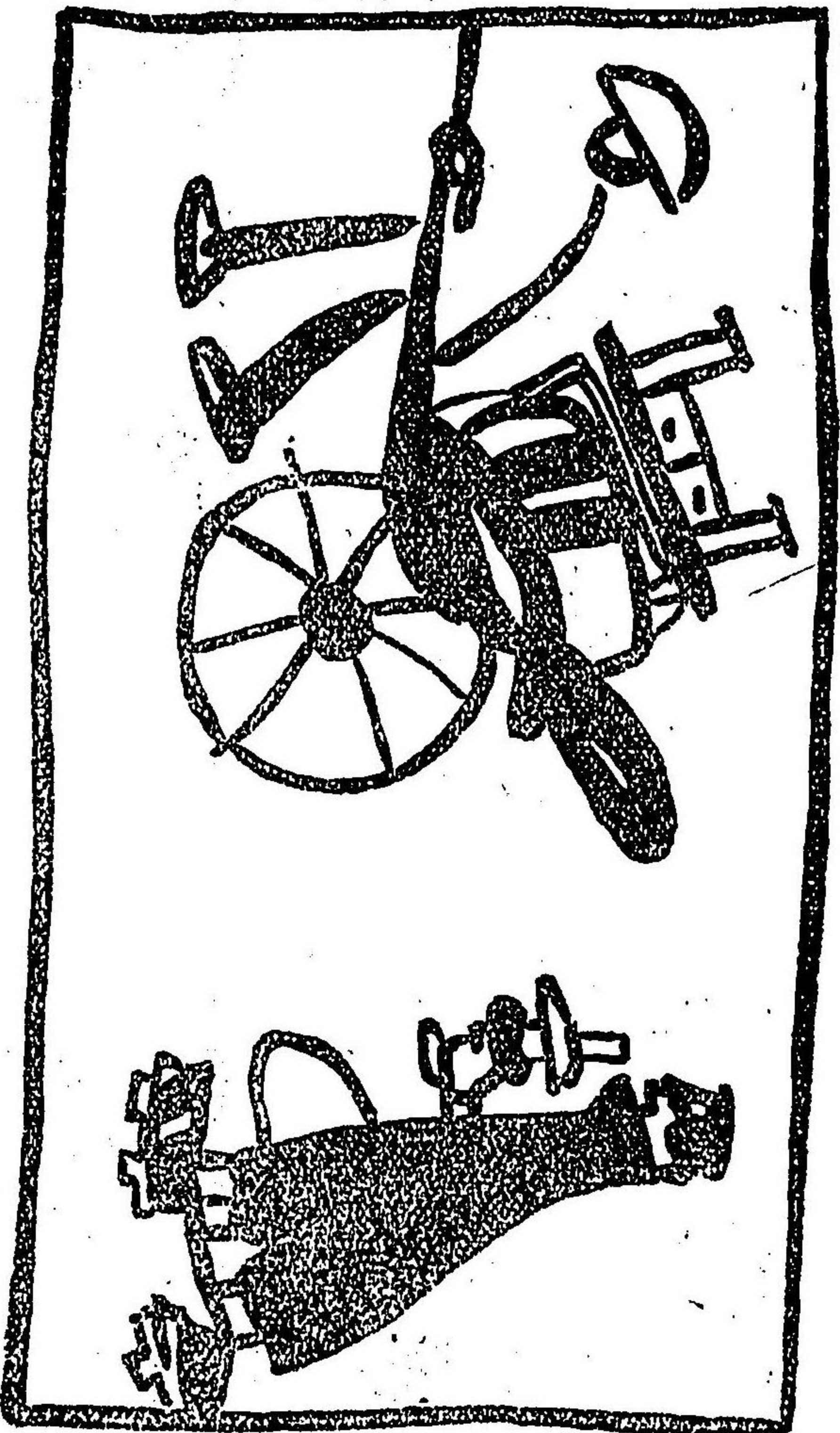
とまでかこつに身をへほると

(吉井 愚)

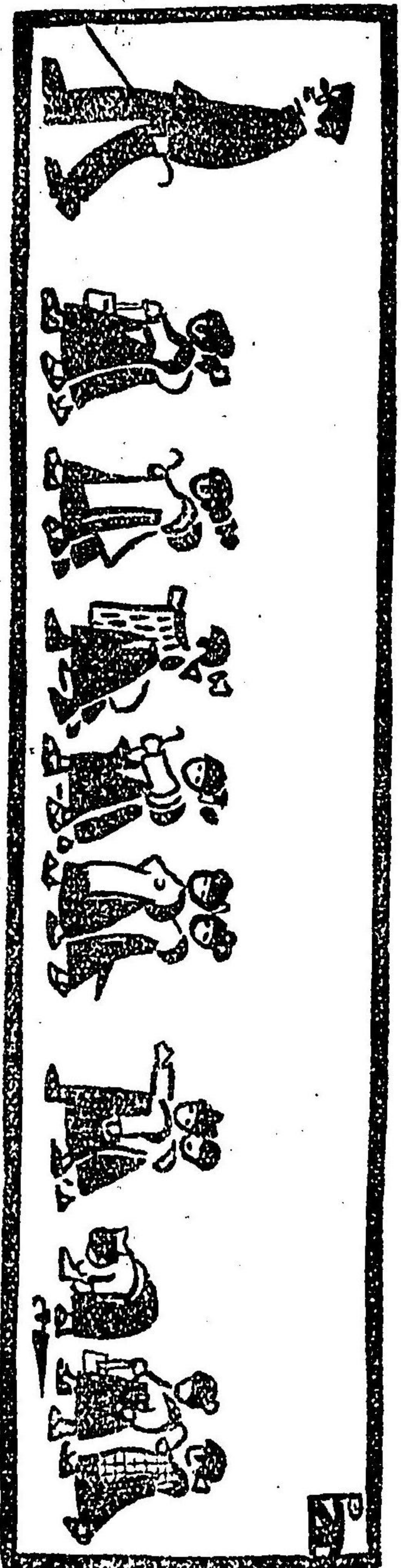


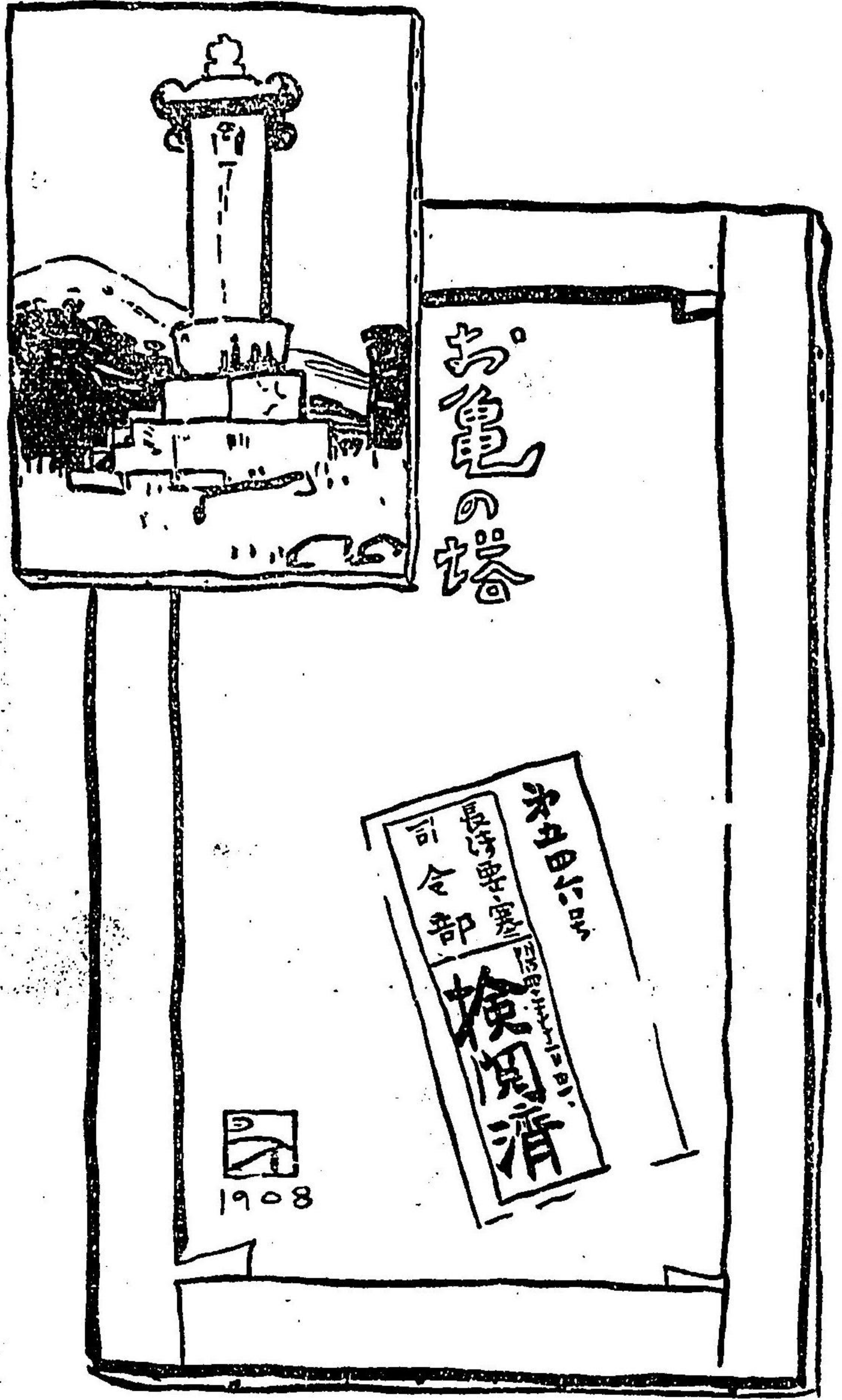
園に居る今年六ツの善坊は太鼓の天才
 である。樂隊の太鼓、相掬の太鼓、祭
 の太鼓は就中お得意のものである。
 いつか活動寫眞を見に行つた時、儼に負
 されて居て、頼りに樂隊の拍子をとつて
 居る。歸つたら早速「大なみなみ」の
 樂隊を始め出した。よく覚えて居たと云
 つてお母さんに御褒美をもちつた。そし
 て寫眞は一つも覚えて居なかつた。

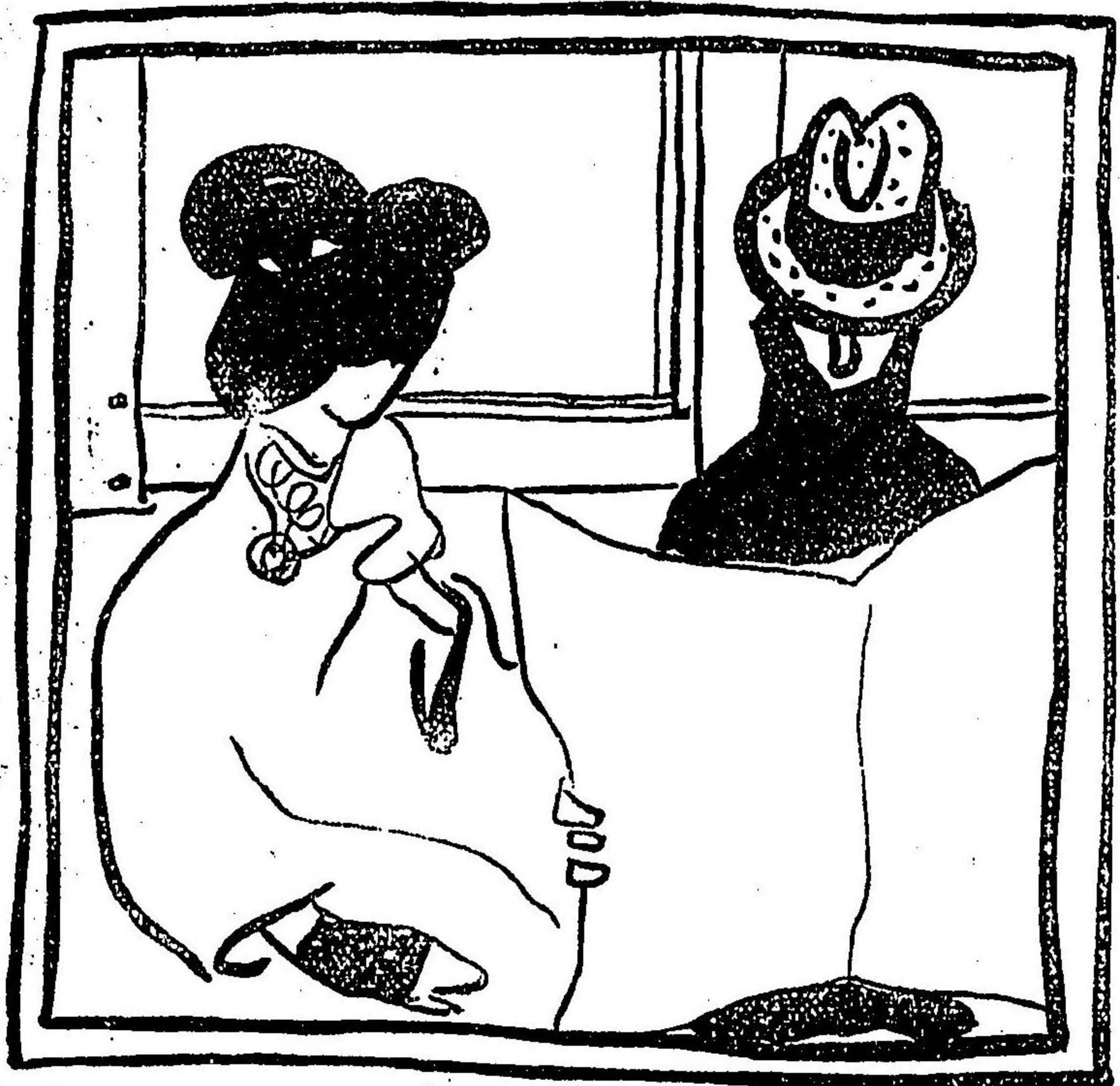




全數產



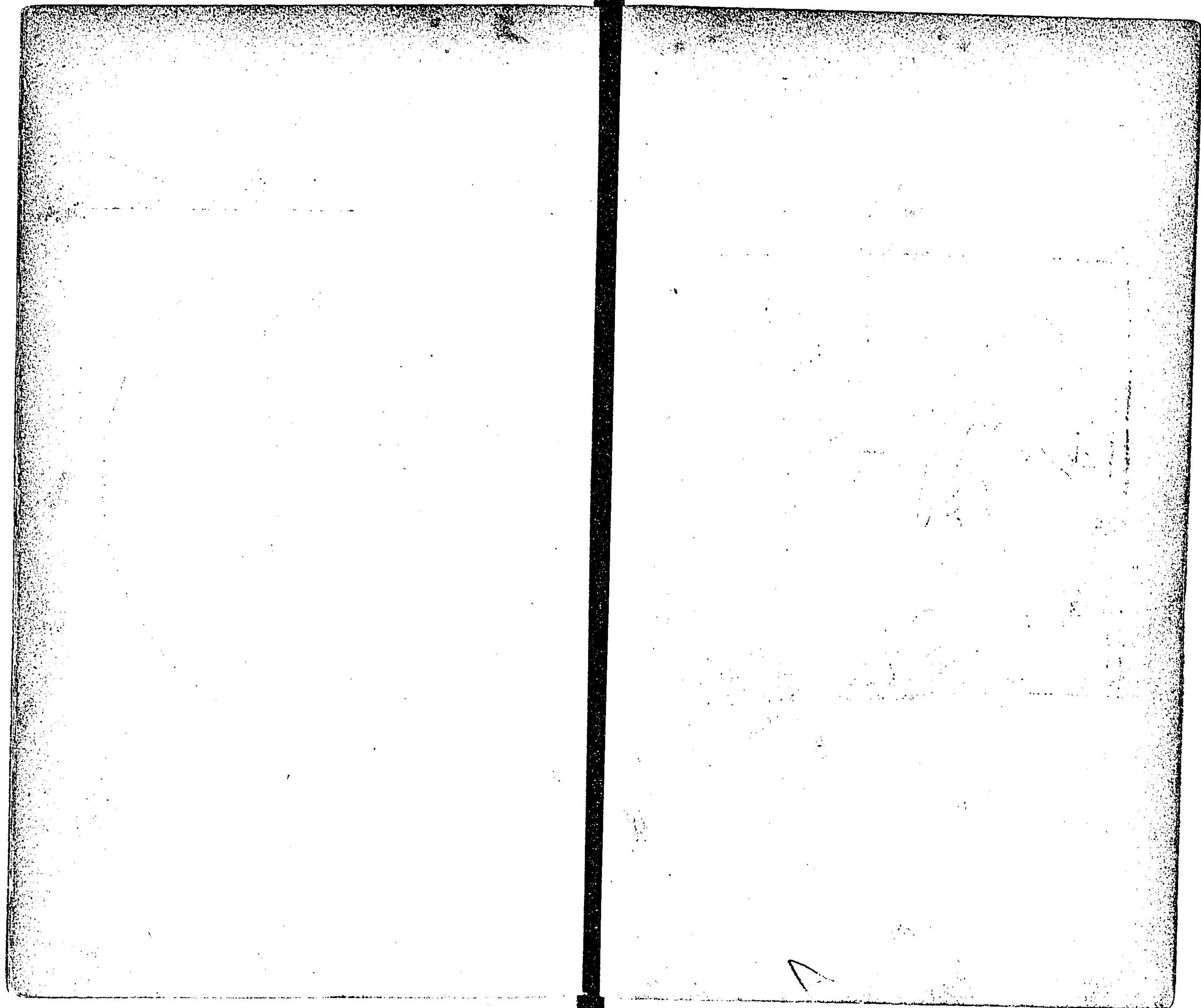




山光心



三巻の運命

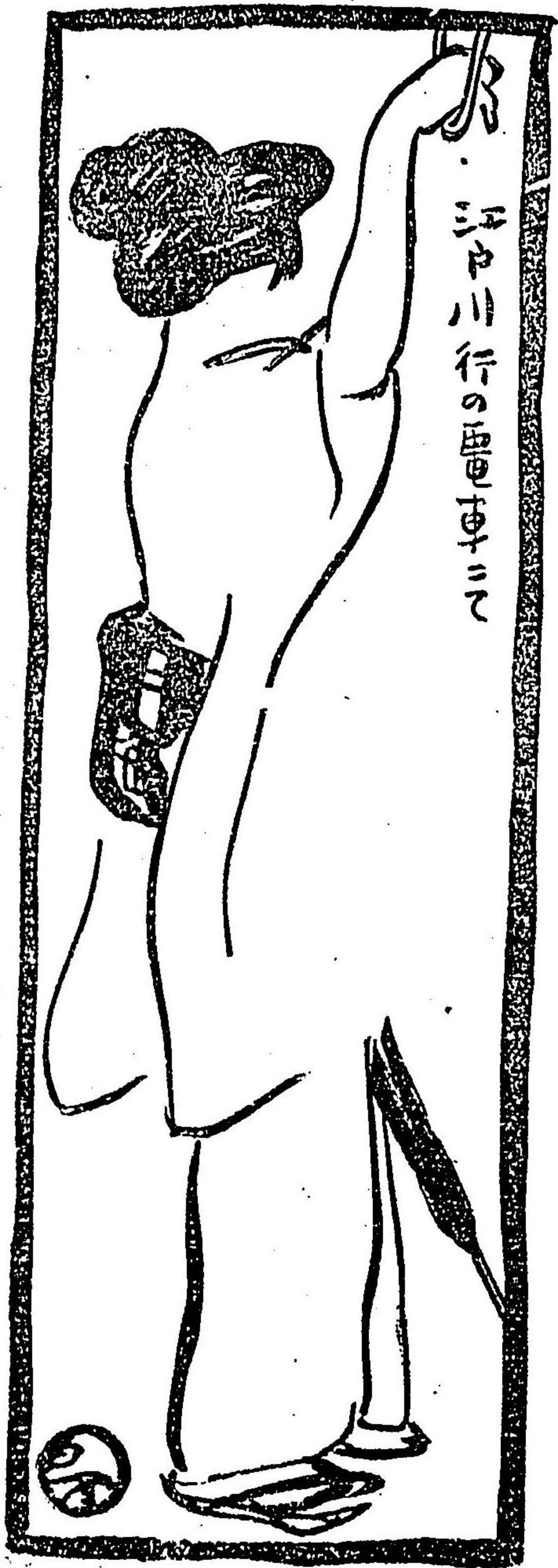




天下泰平なり
國土安穩なり



十二月一日夜、萬世橋で乗換へて外灘電車に乗る。前に「色の褪めた女」と云ふ機な感じがある、交換手らしいのがゐる。時々ものうい眼を上げて車内を見廻す。松住町で被布を着たハイカラ女が入つて来た。乗客の視線は一時に其方に集まる。廣く席が空いて居るのに、無理に窮風に、褪めた女の隣に膝を下す。而して両手を膝の風呂敷色の上にそるへてちんとすます。指には光るものがはまつて居る。被布の紫色は電氣の光りに極めて華かに見える。——褪めた女は明かに憔悴された。うつむいて膝を見つめて居る。



須田町で乗換へて、江戸川行きのお車に乗る。飯田橋で十五六の女が乗つた。眉毛が濃い。白く出した腕の線は肘の所で柔かく曲つて、袖の奥へ走る。風の吹くにつれて、女の袖がふわりふわりと動く。ちらと膝の下が見えた。——十五六と思つたのが、急に十七八に見えた。



はなみ



九月三十日

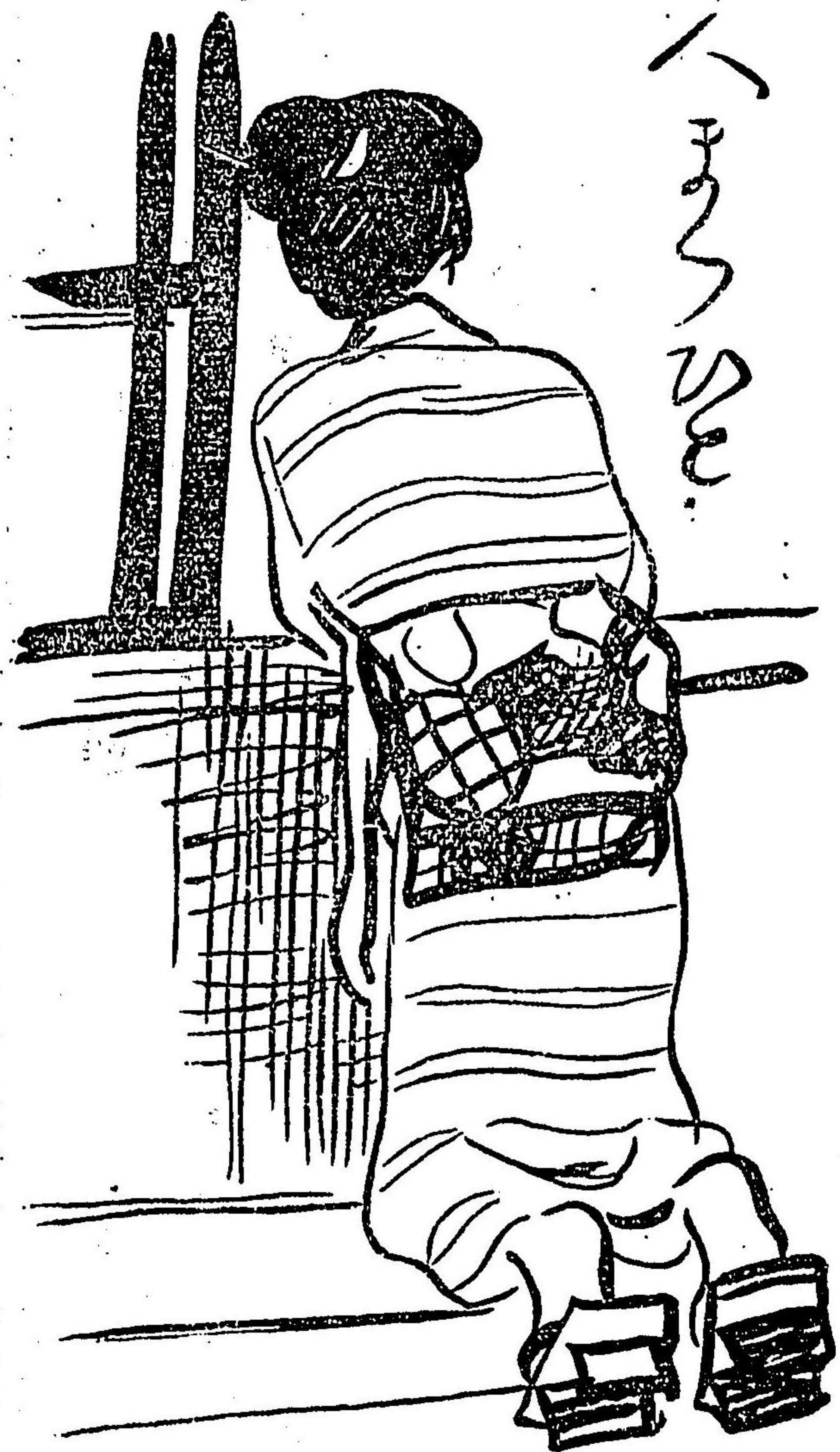
日暮里ステーションで上野行の汽車を待つ。まだ二十分まがある。休憩所をブツと見舞う。座の方に五十餘りの爺さんが居る。極めて平凡な顔だ。まきりにはなをひねって居る。F1見ても人生に悩んでる顔ぢやない。それが妙に僕の感興をひいた。アツクに寫して置く。(但し此場合人生とは近頃流行の映画の人生を意味す。)



黄色い顔



九月の涼暑い日、上野から電車で新橋へ行く。萬世橋の停留所に電車がとまった時、前に腰かけて居た男が帽子をとって膝しく窓の外に覗をした。外を見ると弾式が通つてゐる。此の男の顔は黄ろかつた。

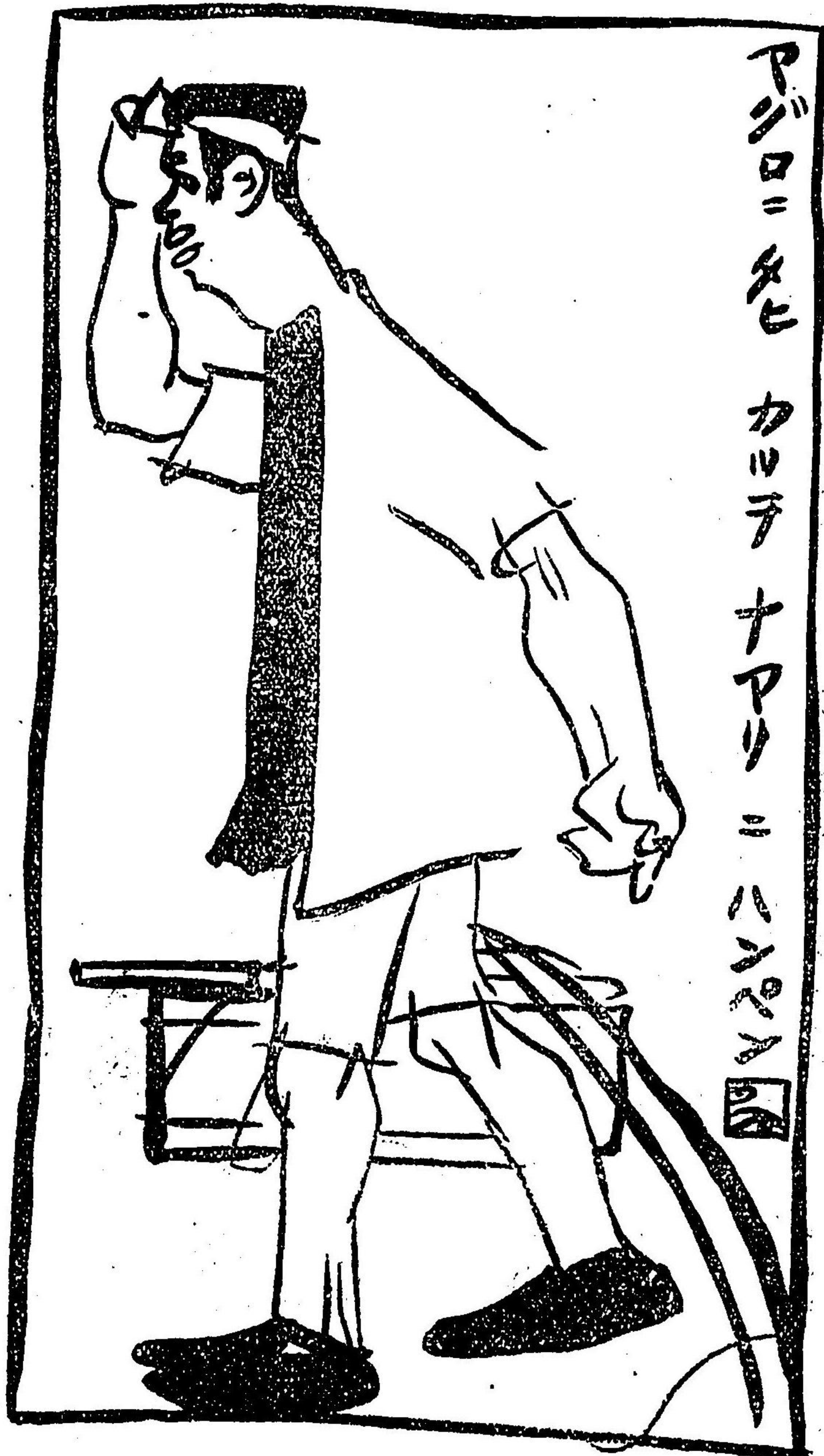


いままさ



あの児の母とは
余りさ若いと思つた





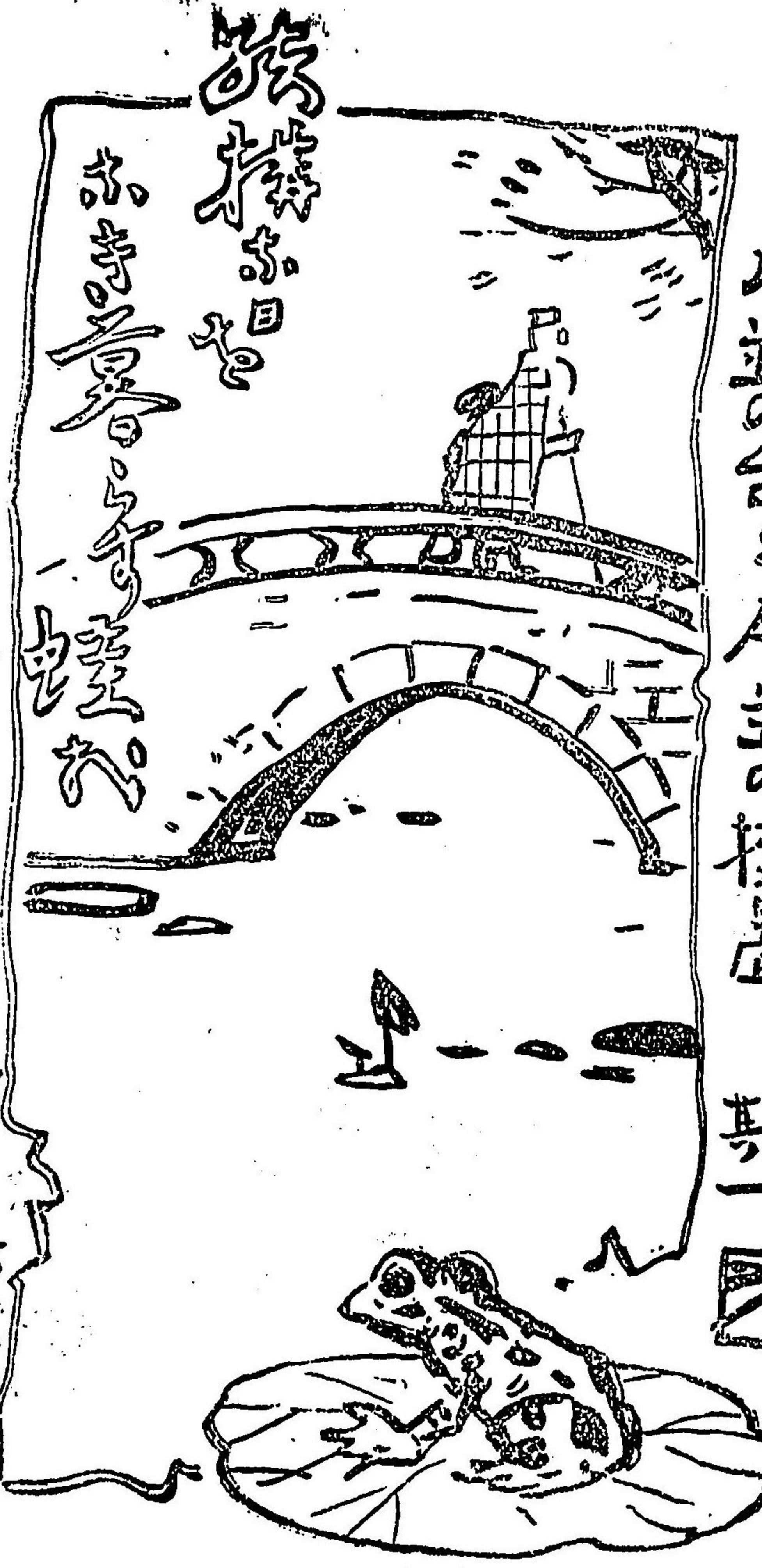
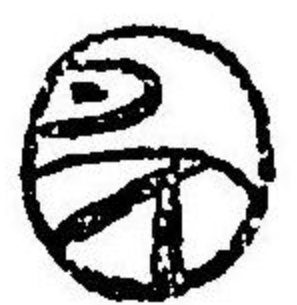
月並五題 其二
 月並の看板
 此不用品何品に代限
 一切安直に買

月並の看板

月並五題 其二

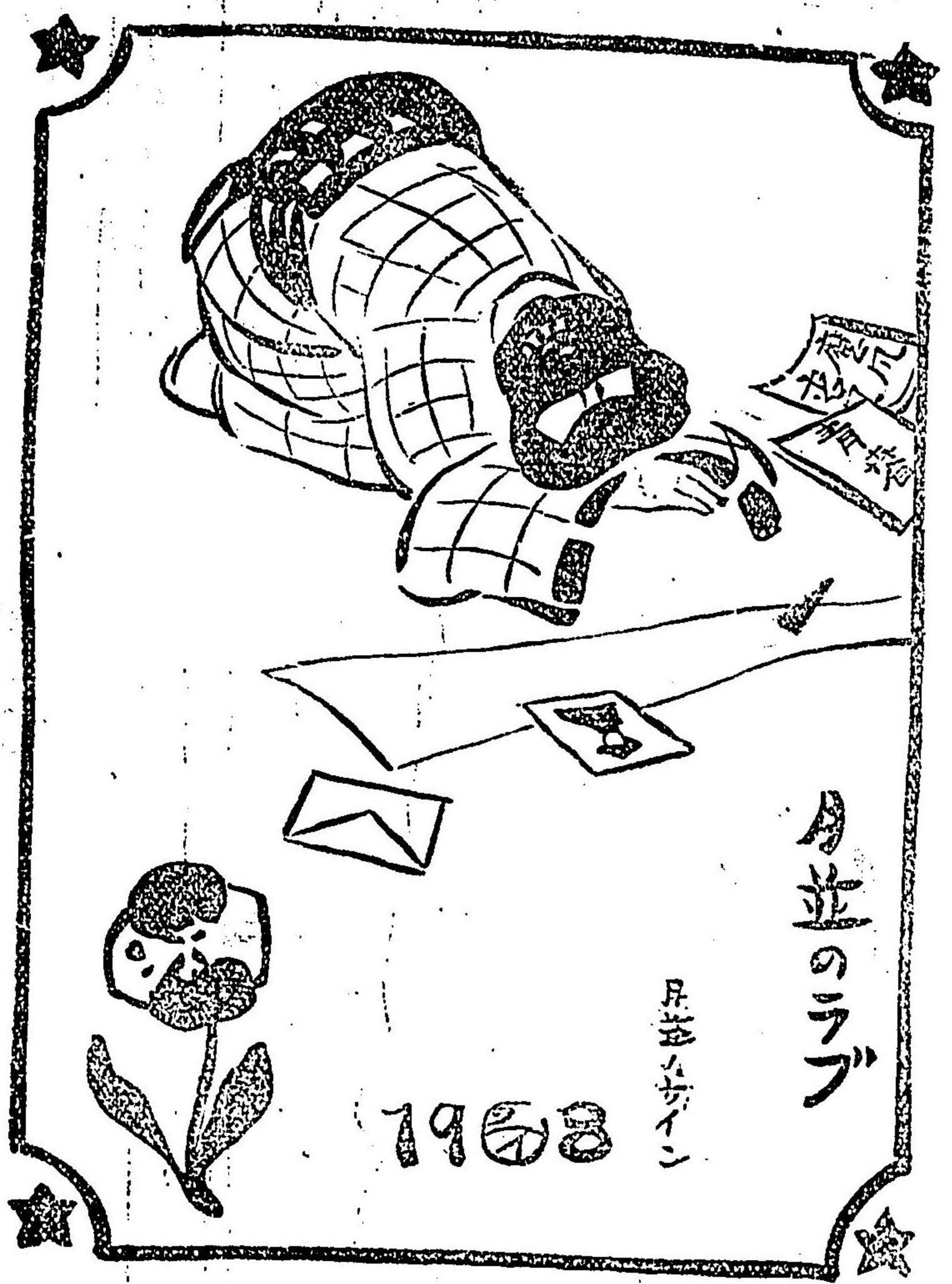
九里四里
 十三里
 馬

名物
 養魚
 魚



月並の句と月並の構圖
 月並五題 其一

破れた處が振ッて



月並のシラフ

月並のサイン

1968

月並五題其四

月並、俗曲

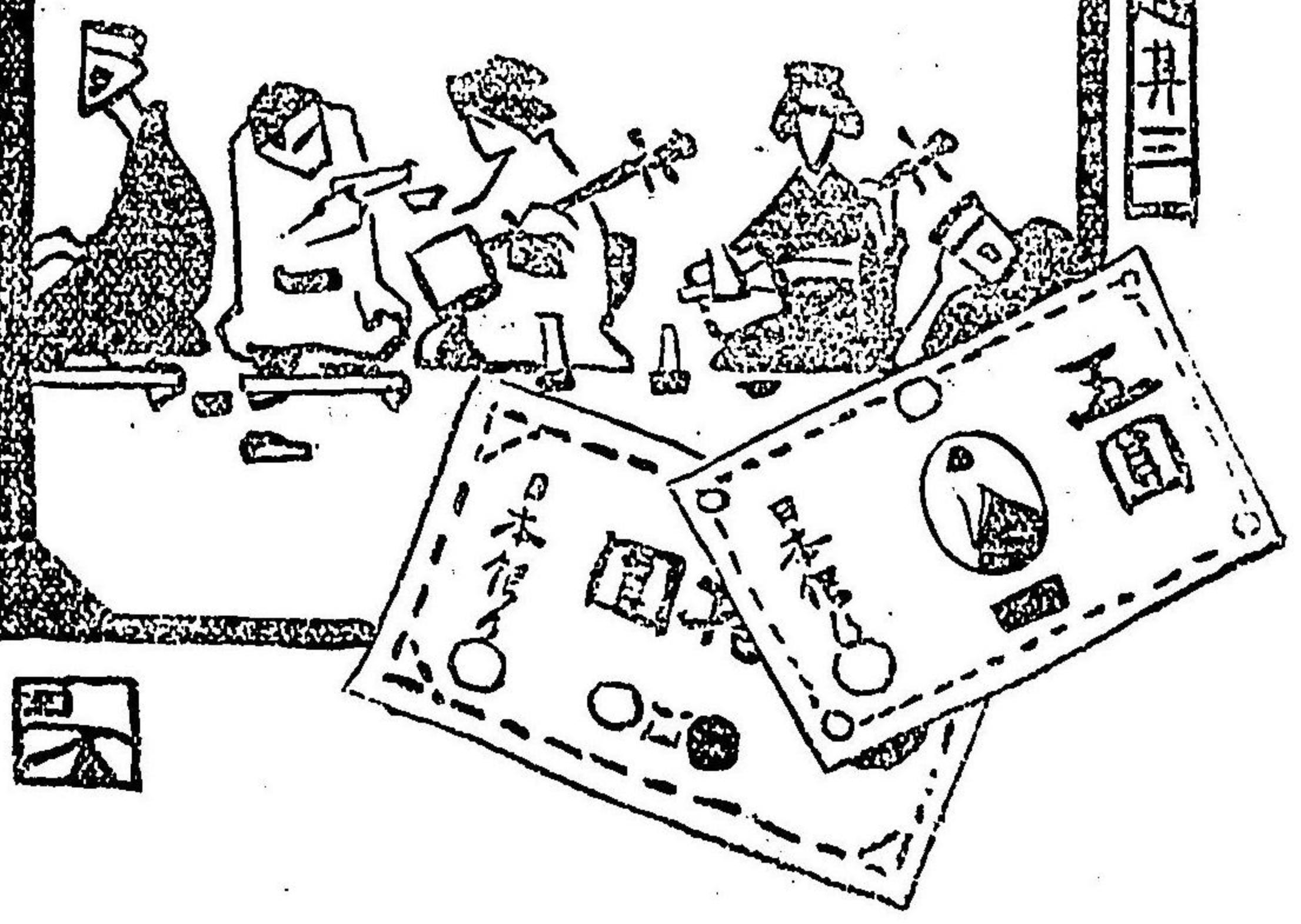
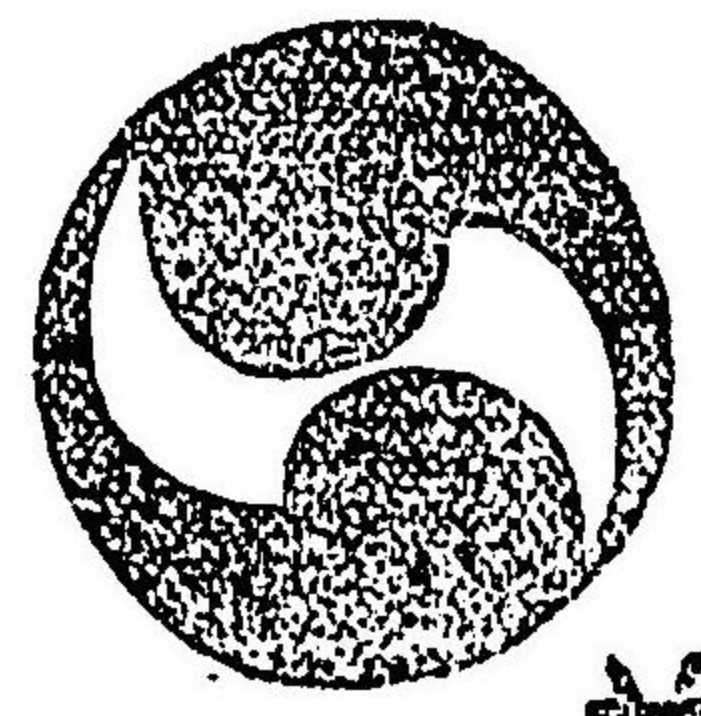
月並五題其三

忠臣蔵の

義士の紋

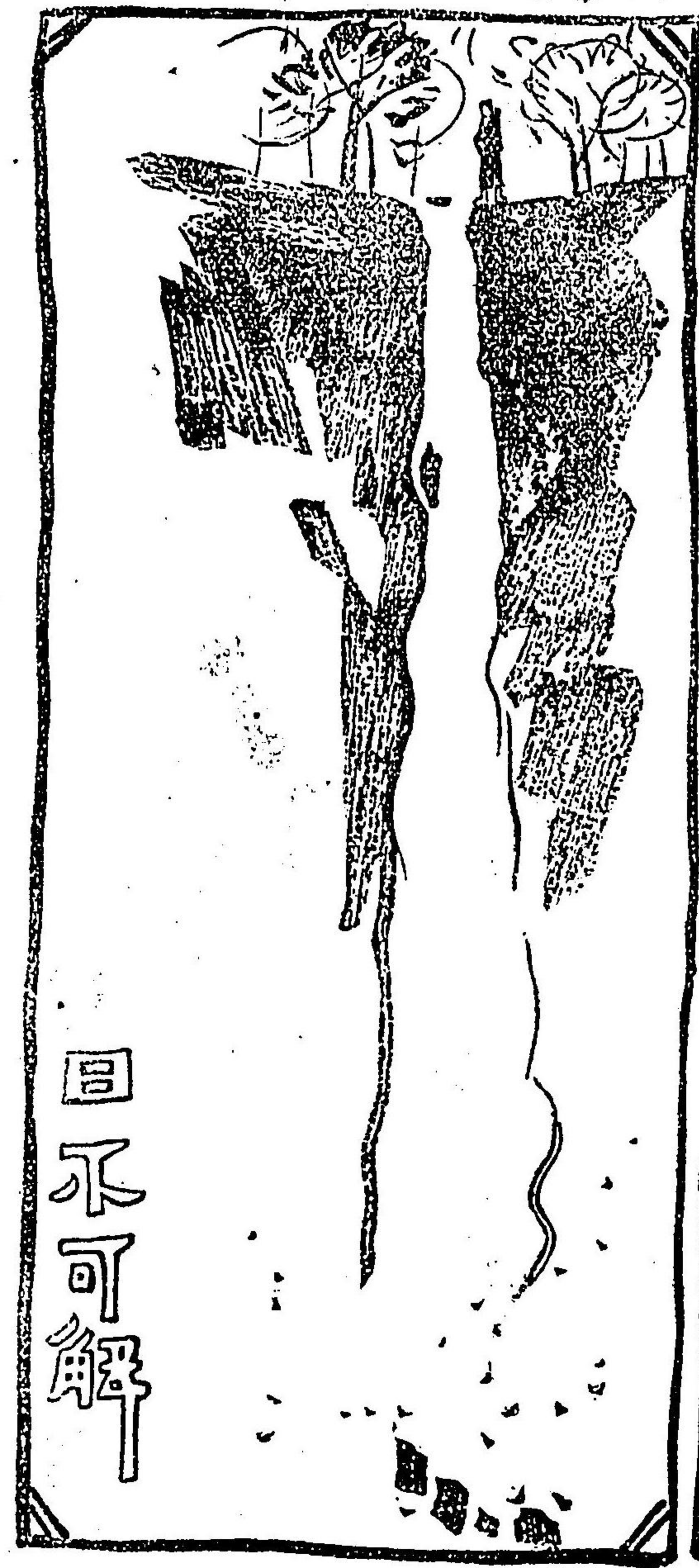
さや

おにぎり





宗主が見た
 怒るだろー
 僕はオマエだ
 小供ハ藝者宗主



月並の自殺

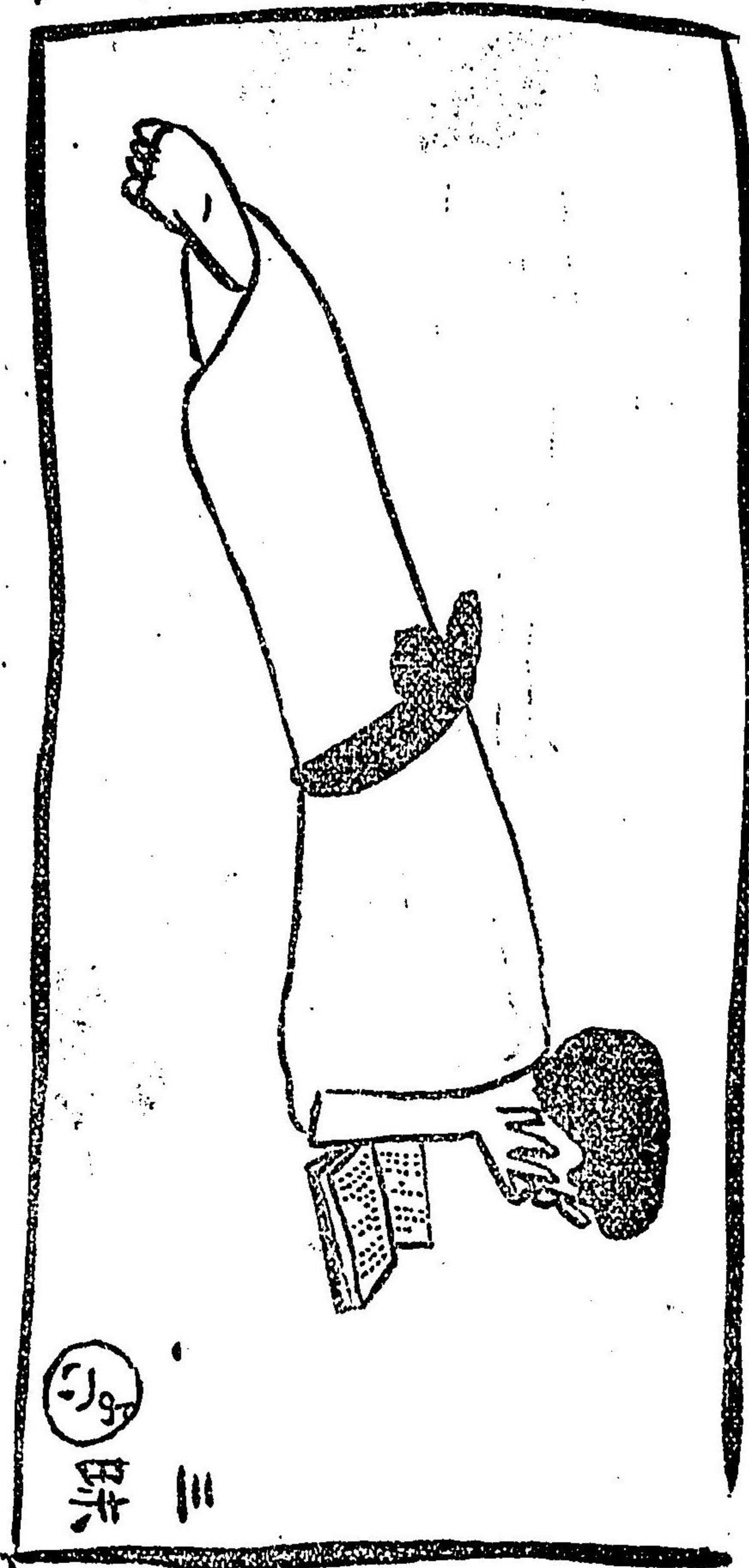
目

月並題其五

目不可解



赤い
あし

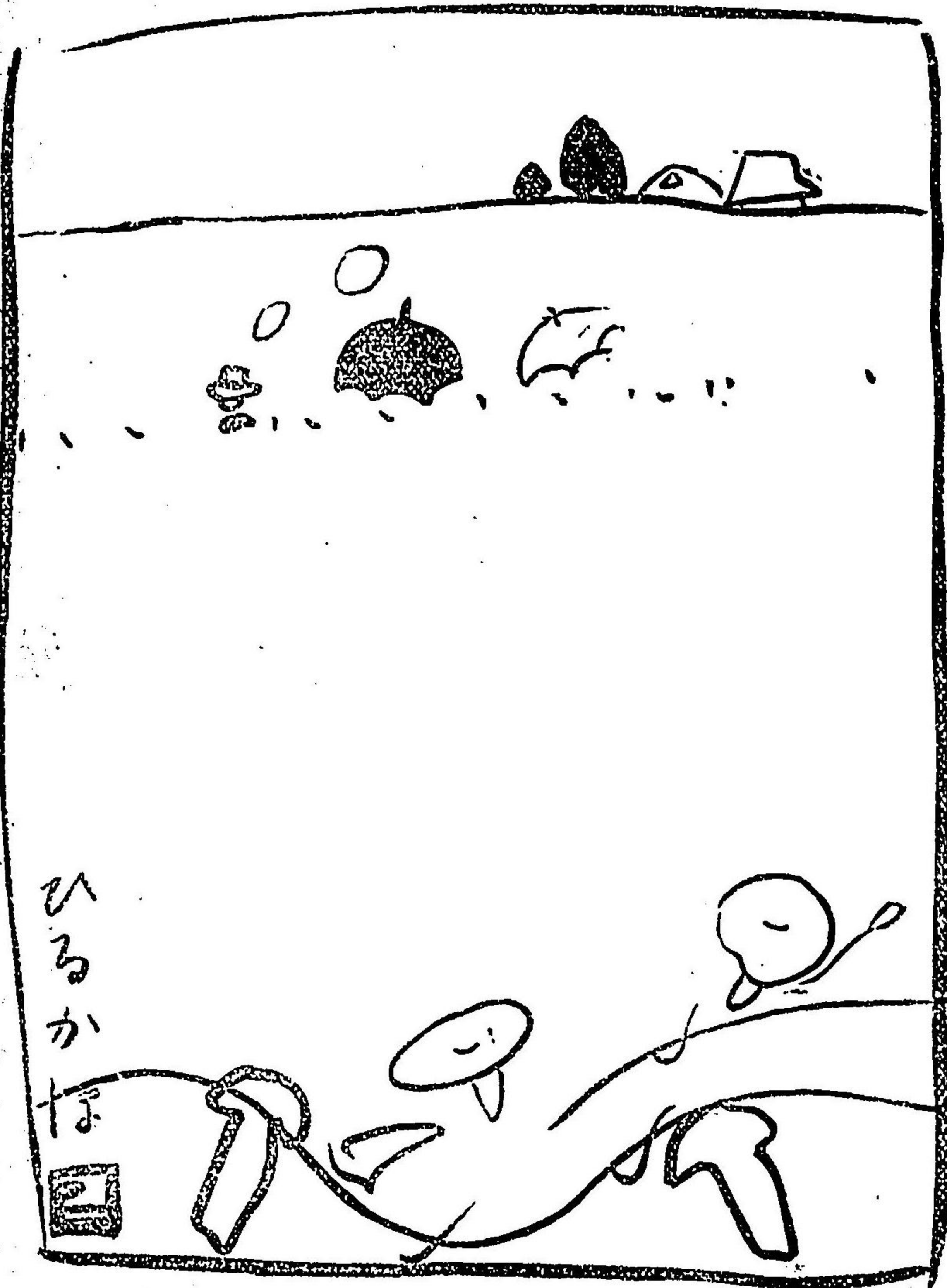


三
味
酒



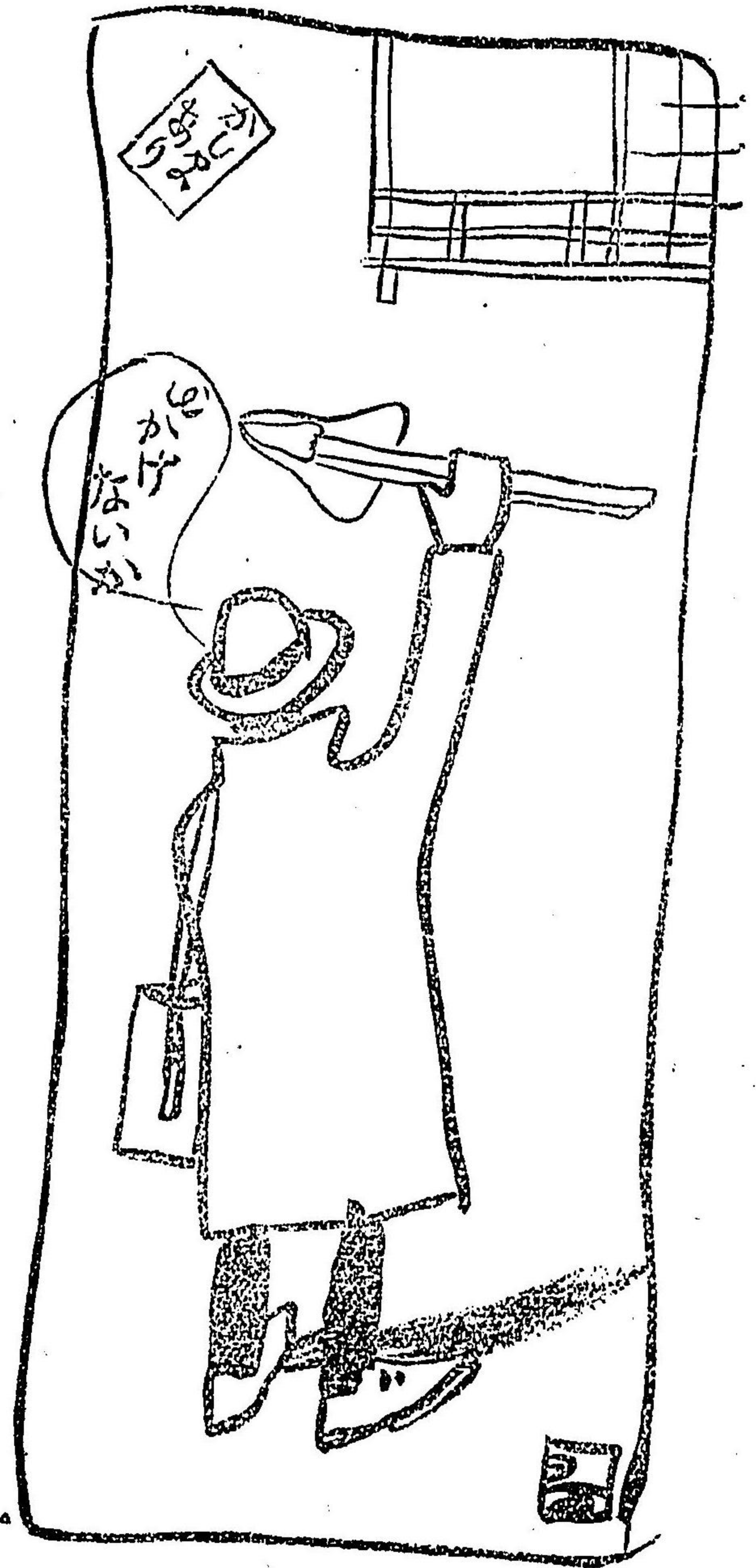
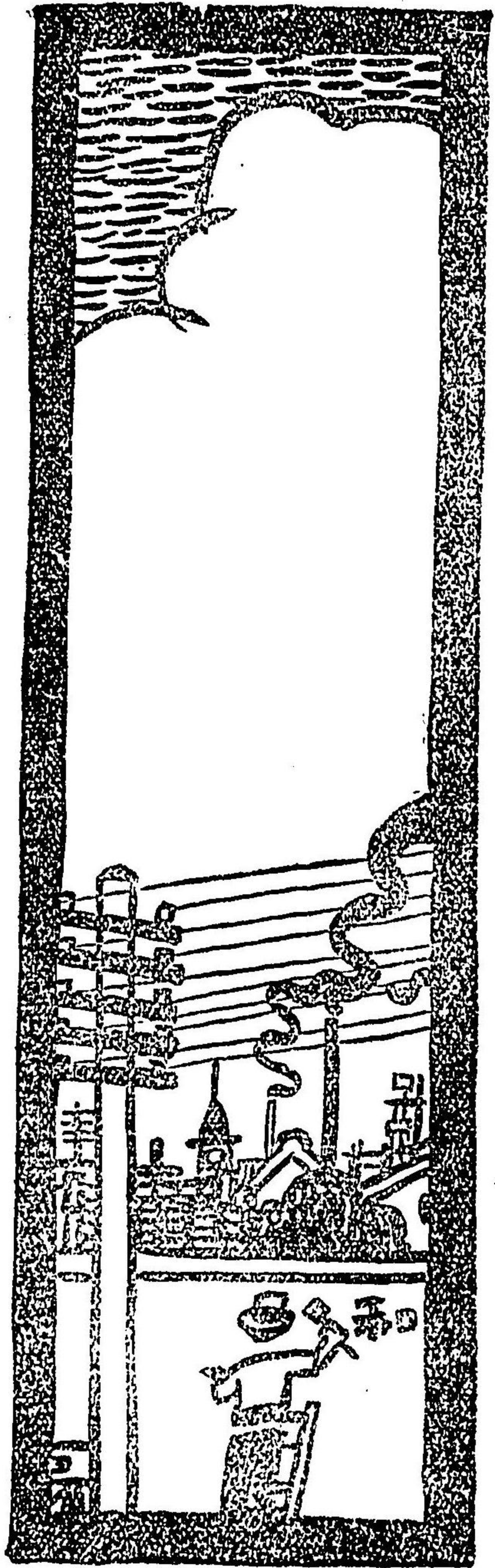
日和
印





ひる顔やこの道唐の三十里

燕村





ただ一句君のころをみたすべき
ことばたづねて今日も日暮れぬ



島原通



長崎名物はた揚げ

はたは田角ぶ紙た紙の車ぶり



長崎三日



Handwritten text and a small icon, possibly a signature or a logo, located to the right of the main figure.



茂木の
おちかさん

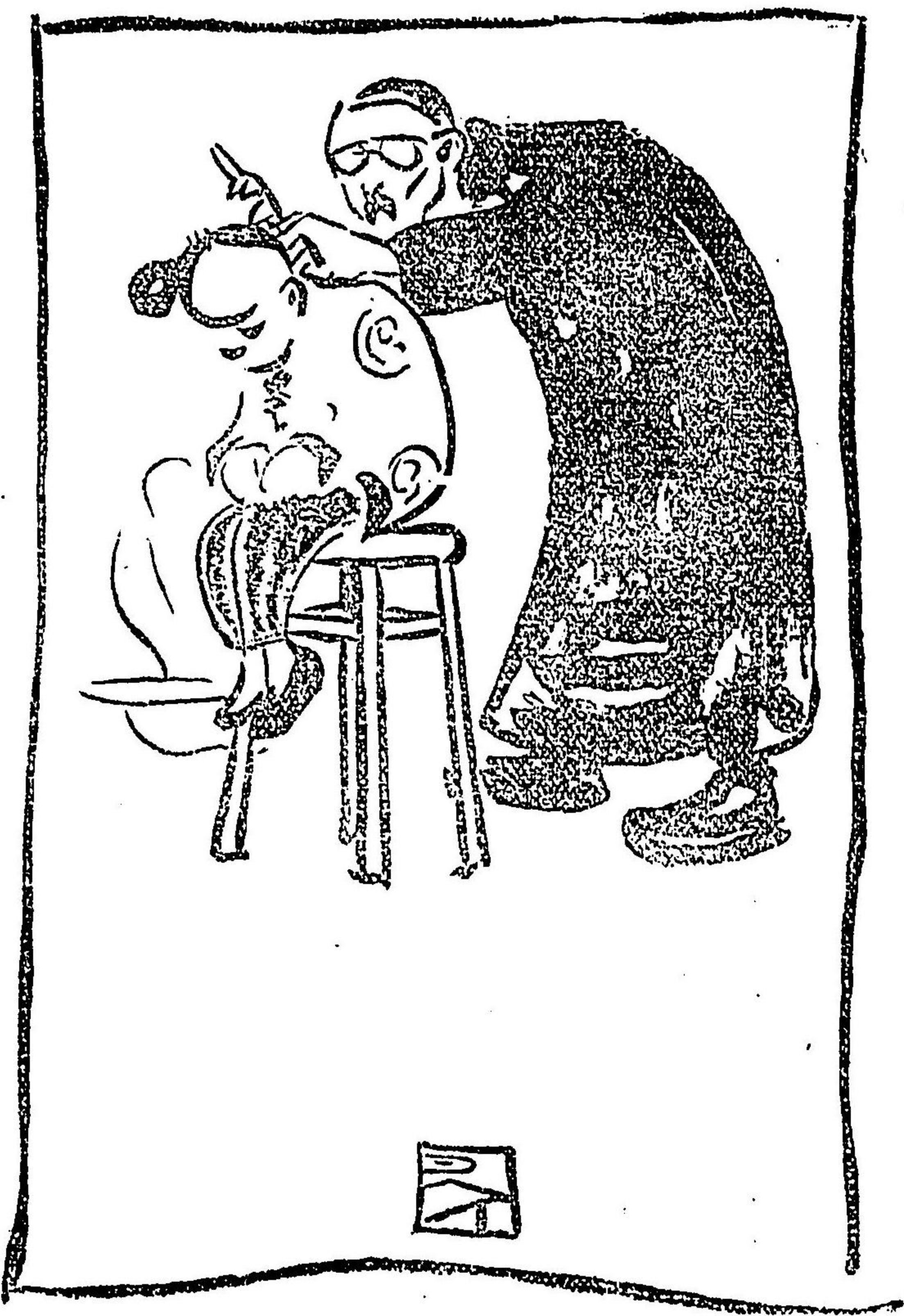
茂木のおちかさんと云へば、長崎で誰知らぬ者は無い。おちかさんは六十餘りだらう、昔は藝者だとか、紅い鹿の子やか
んざしをやると、喜んでホッソ〜の三味線を引く、流行物は知らぬが、昔のならなんでもやる、茂木は長崎を二里はな
れた漁村、そこから毎日のやうにやつて来る。いつか其の歸り途で狐にだまされて、翌朝まで三味線を弾いて居たそうだ、
それから以來は長崎の町はづれに三味線をあづけといて、夕暮の淋しい夜道をとほくと歸つて行く。



貿易不欺三尺子

子財
尺方
三取
欺聚
不取
易平
貿公

子 尺 三 欺 不 易 貿
財 方 四 取 聚 平 公



子財
尺方
三取
欺聚
不取
易平
貿公



落花深處說南朝

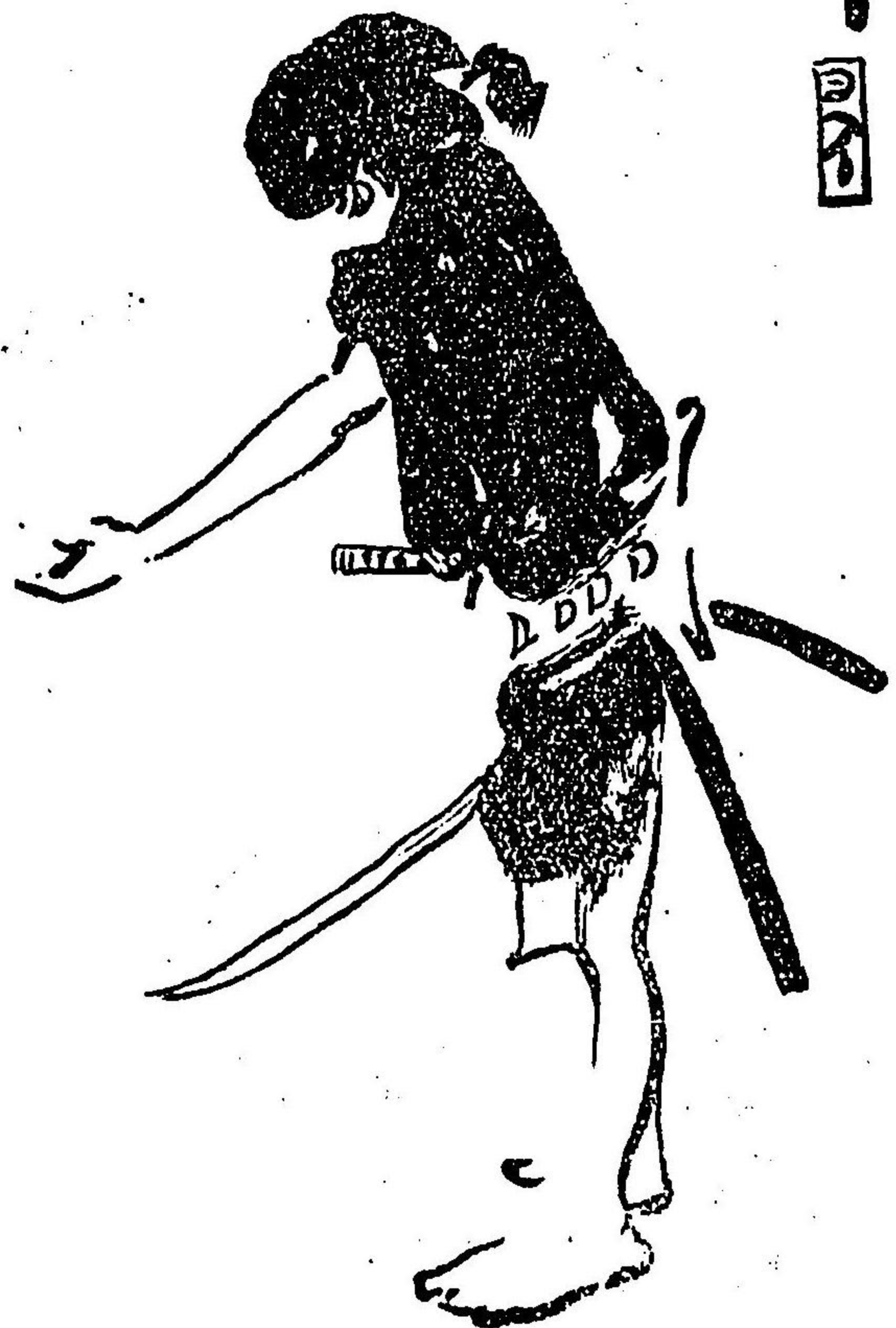
古松老柏吼天颺
山寺尋春春寂寥
眉雪老僧時掃帚
落花深處說南朝

竹外

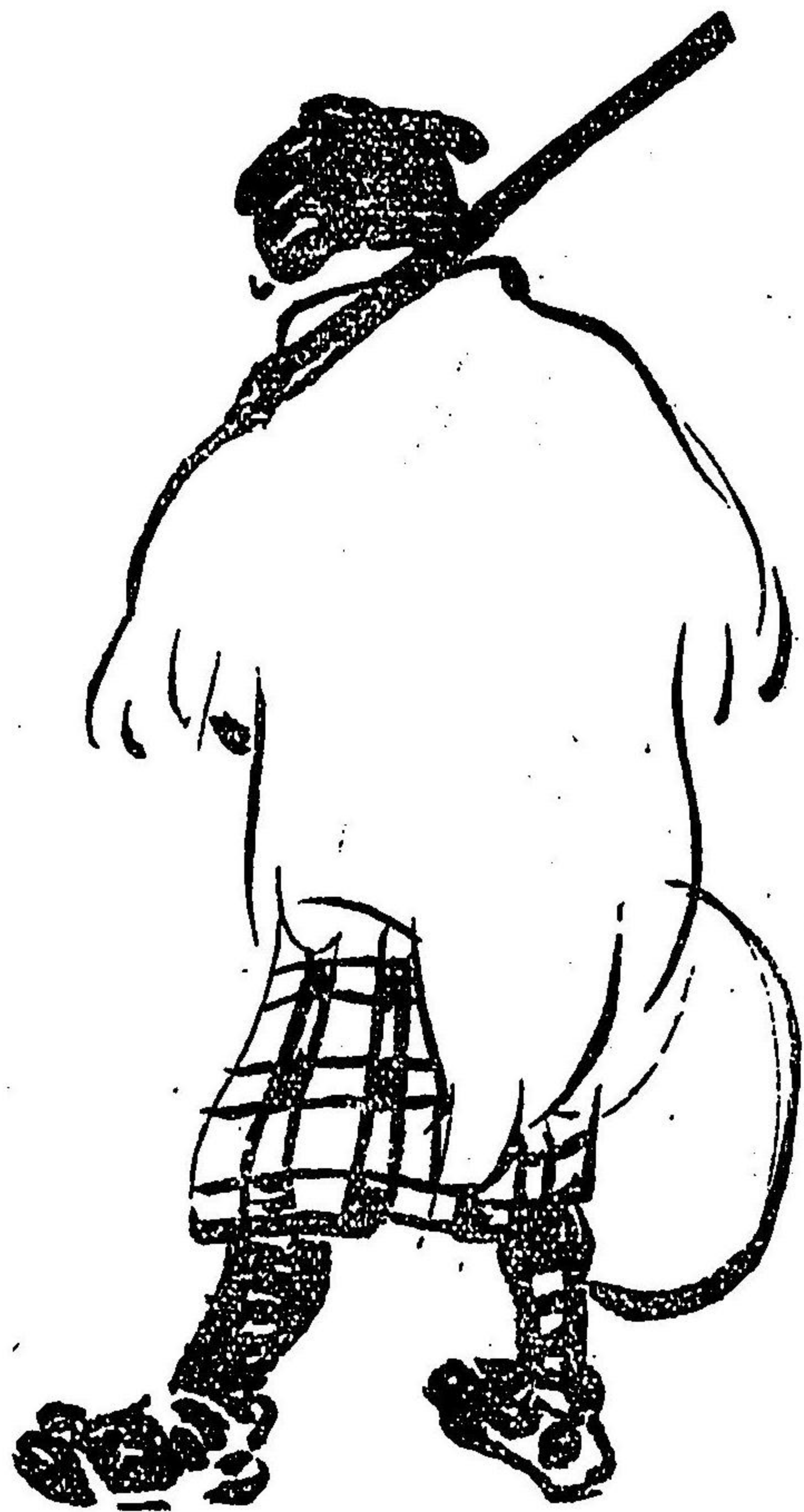


花丸印

目



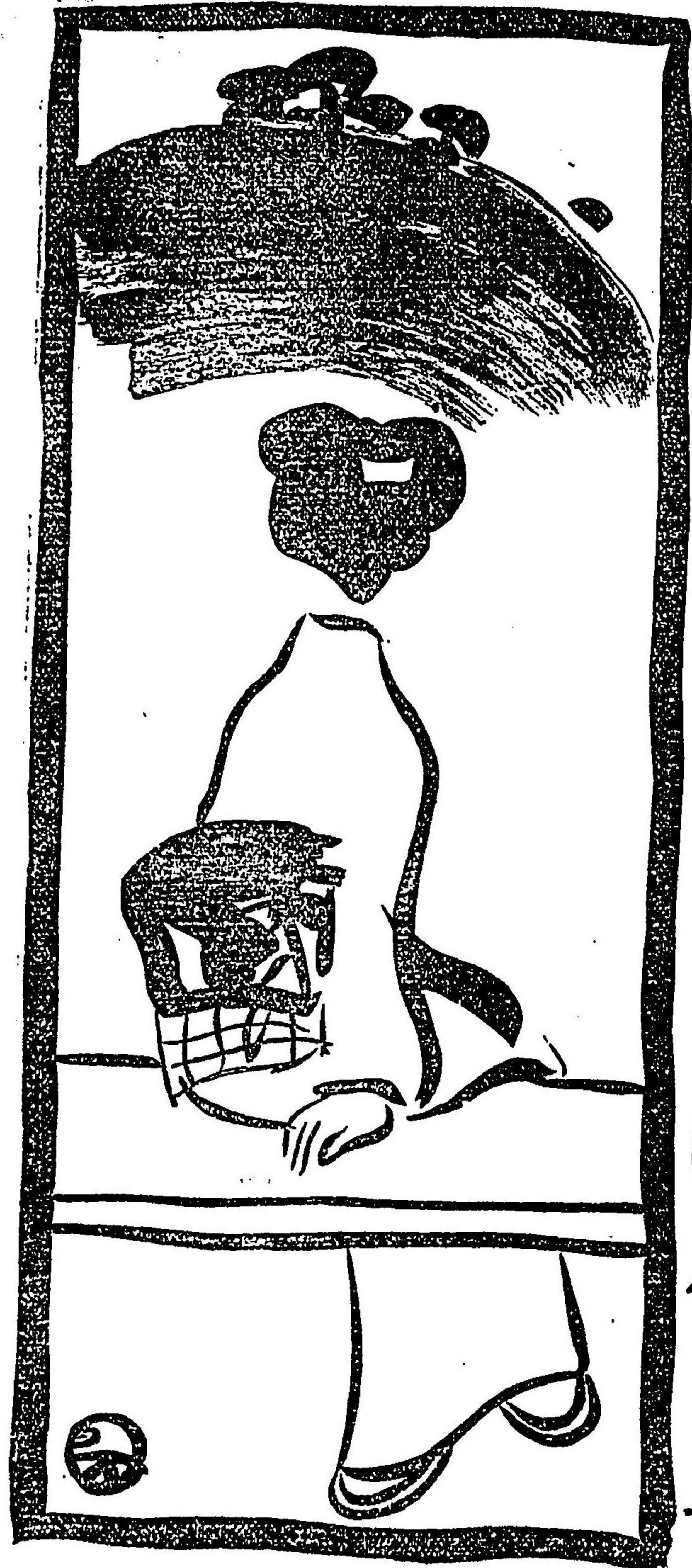
— イエ／＼金で江戸を歩かせ、娘が
してくれた用意の振袖、ドレ／＼お先
へ参りませう —



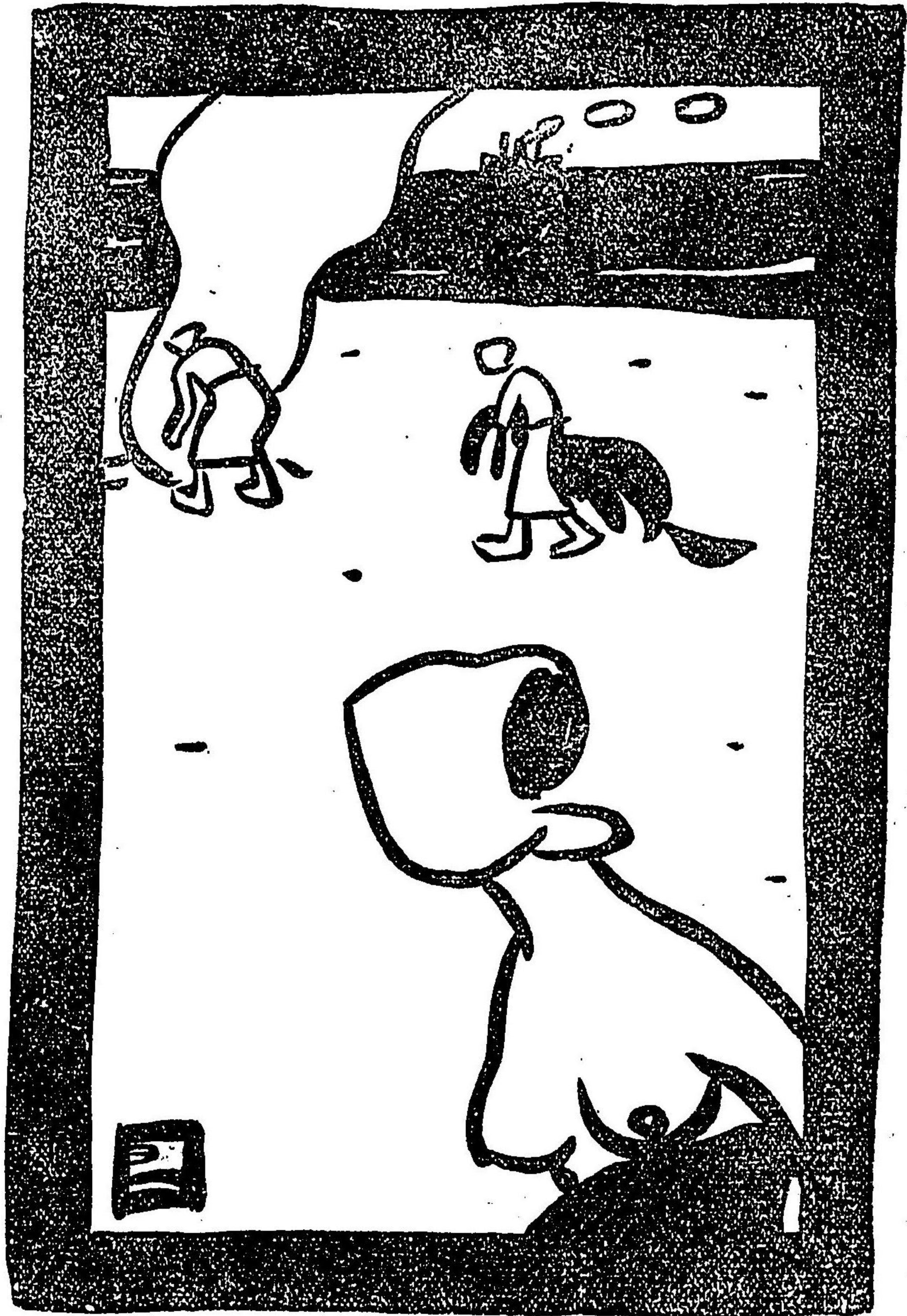
真力
平

あしびきのやまより出づる月まつと
人にはいひて君まつわれは

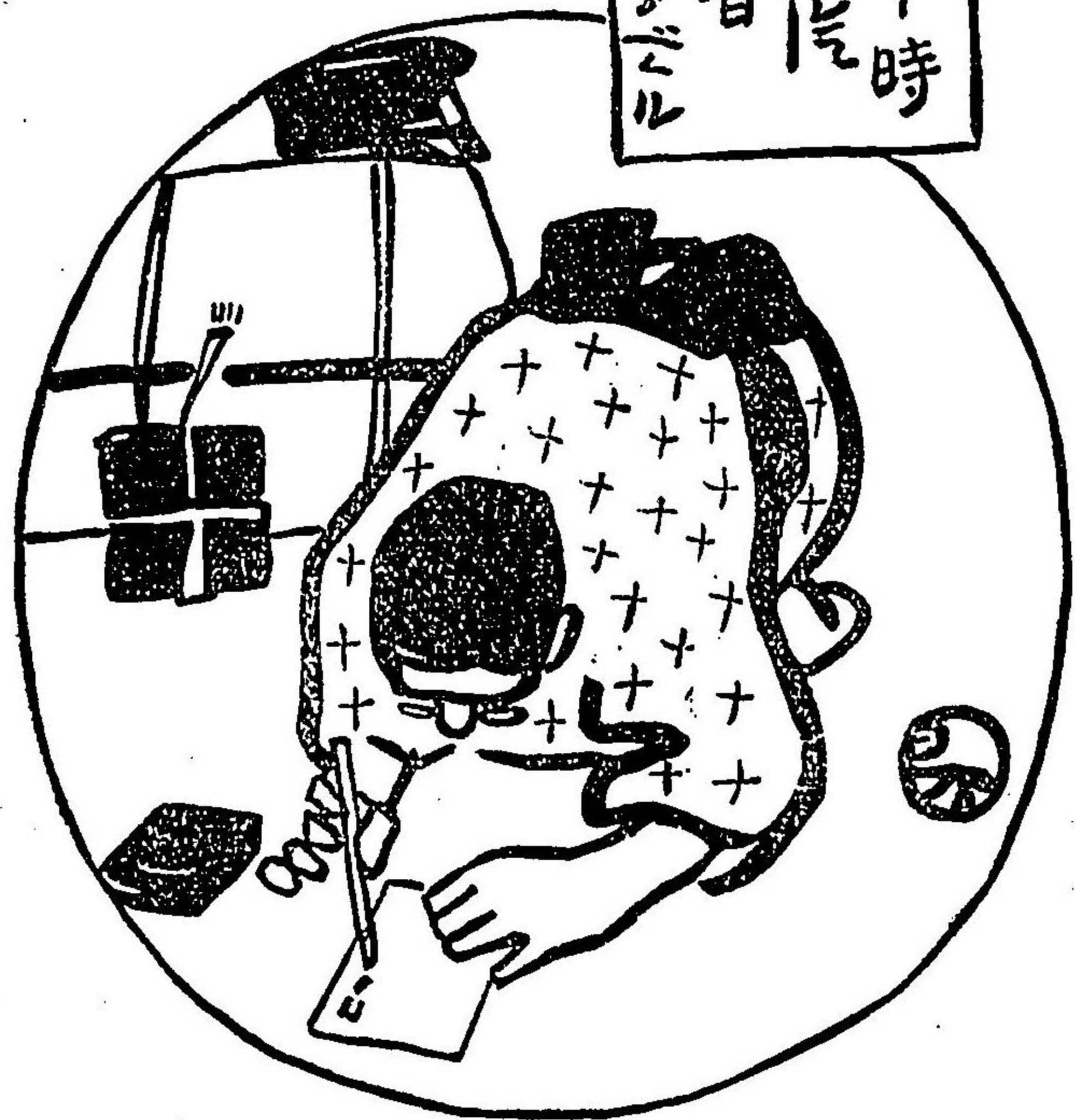
あしびきのやまより出づる月まつと
人にはいひて君まつわれは







明日午前十時
二十分及乳の片
車三帰省
仕るべし



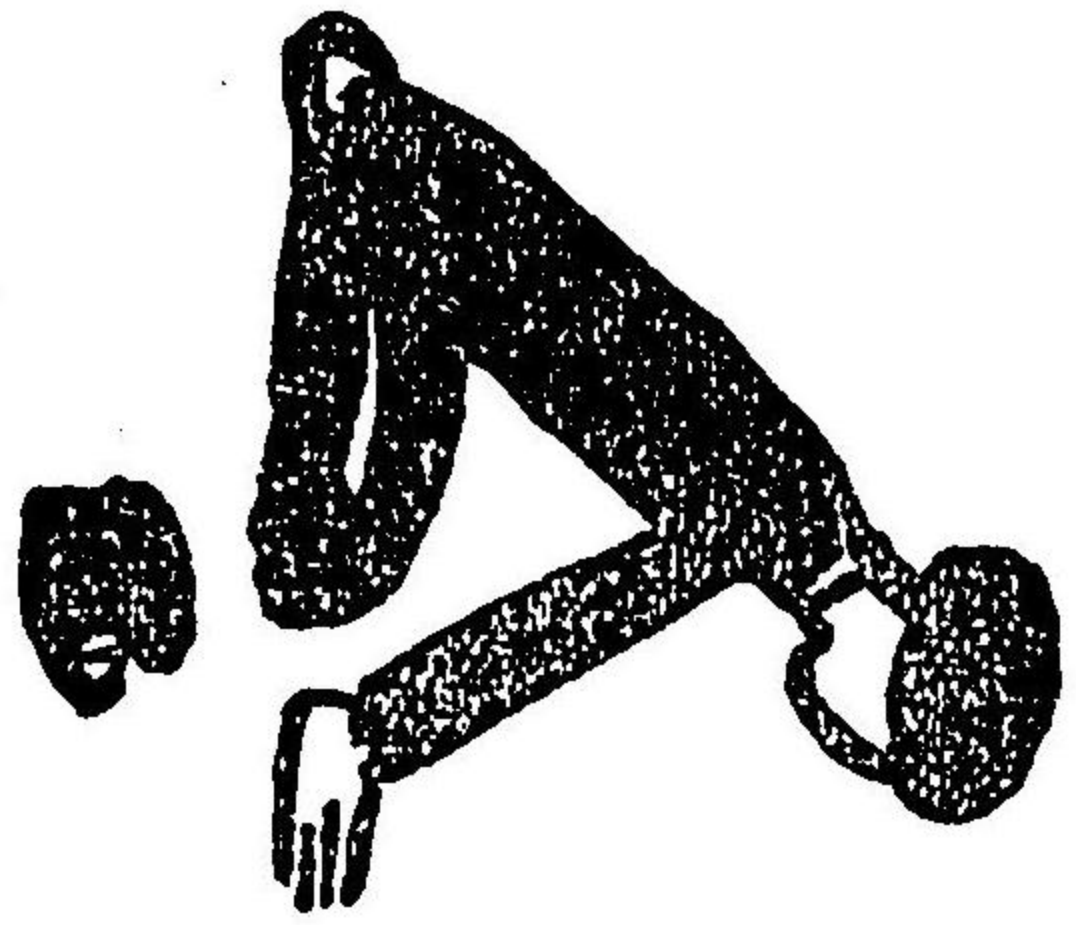


お化粧
①



侍れど
おとあれば

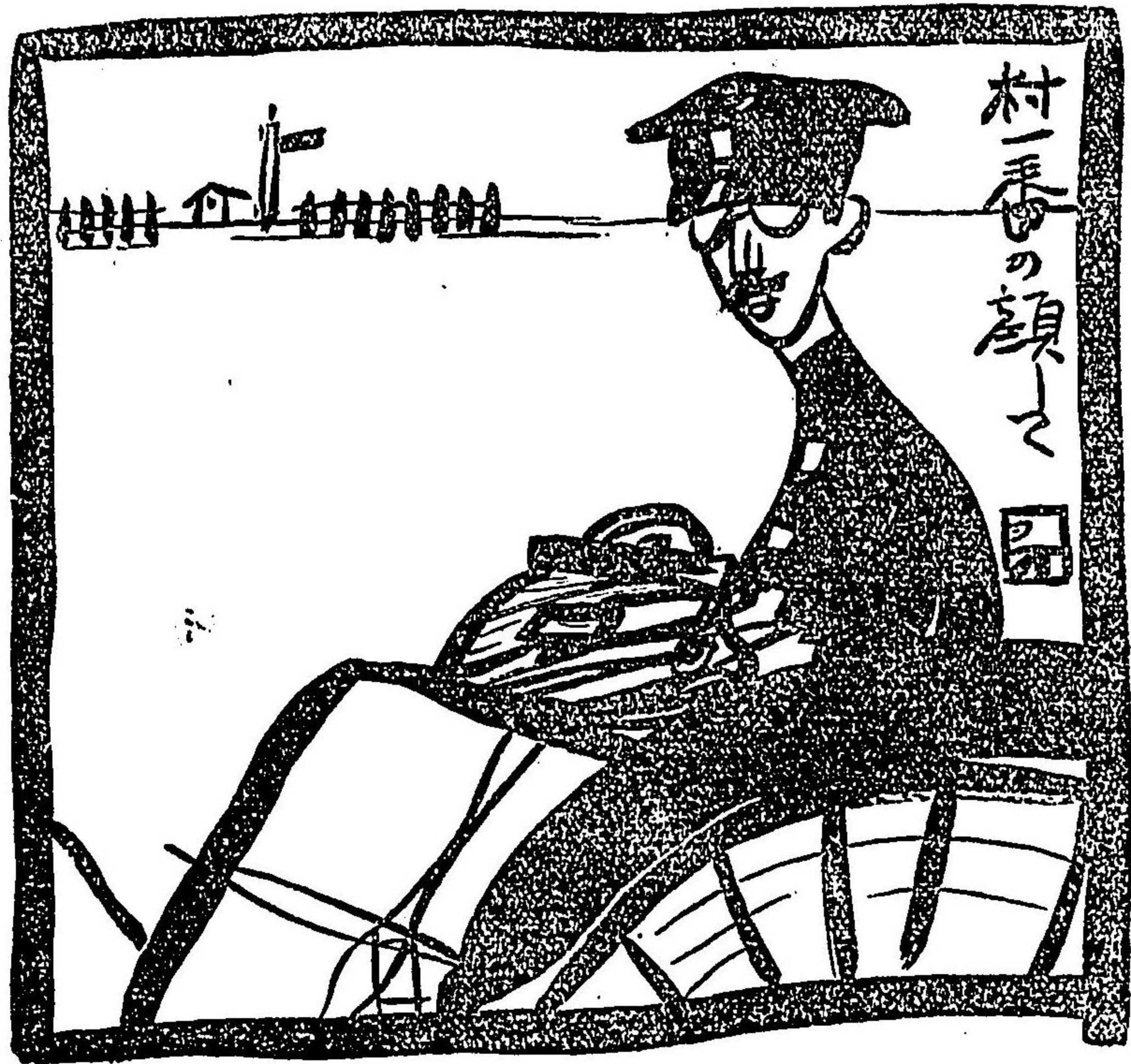
ハチカニ

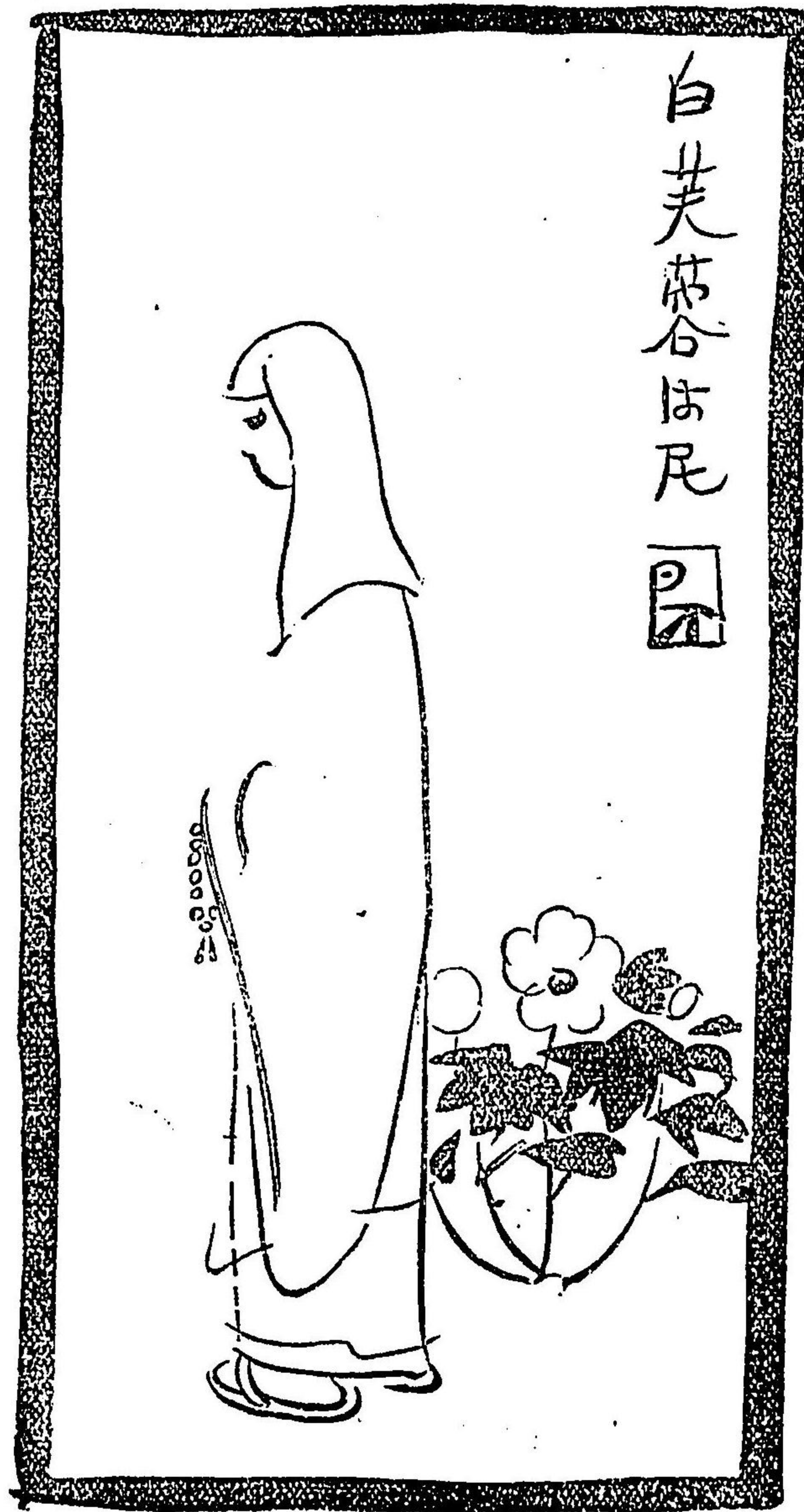




あまのこころ
まはるしの







コ
ス
モ
ス
は
現
代
の
女
を
聯
想
さ
せ
る



タ
チ
ハ
ナ
シ



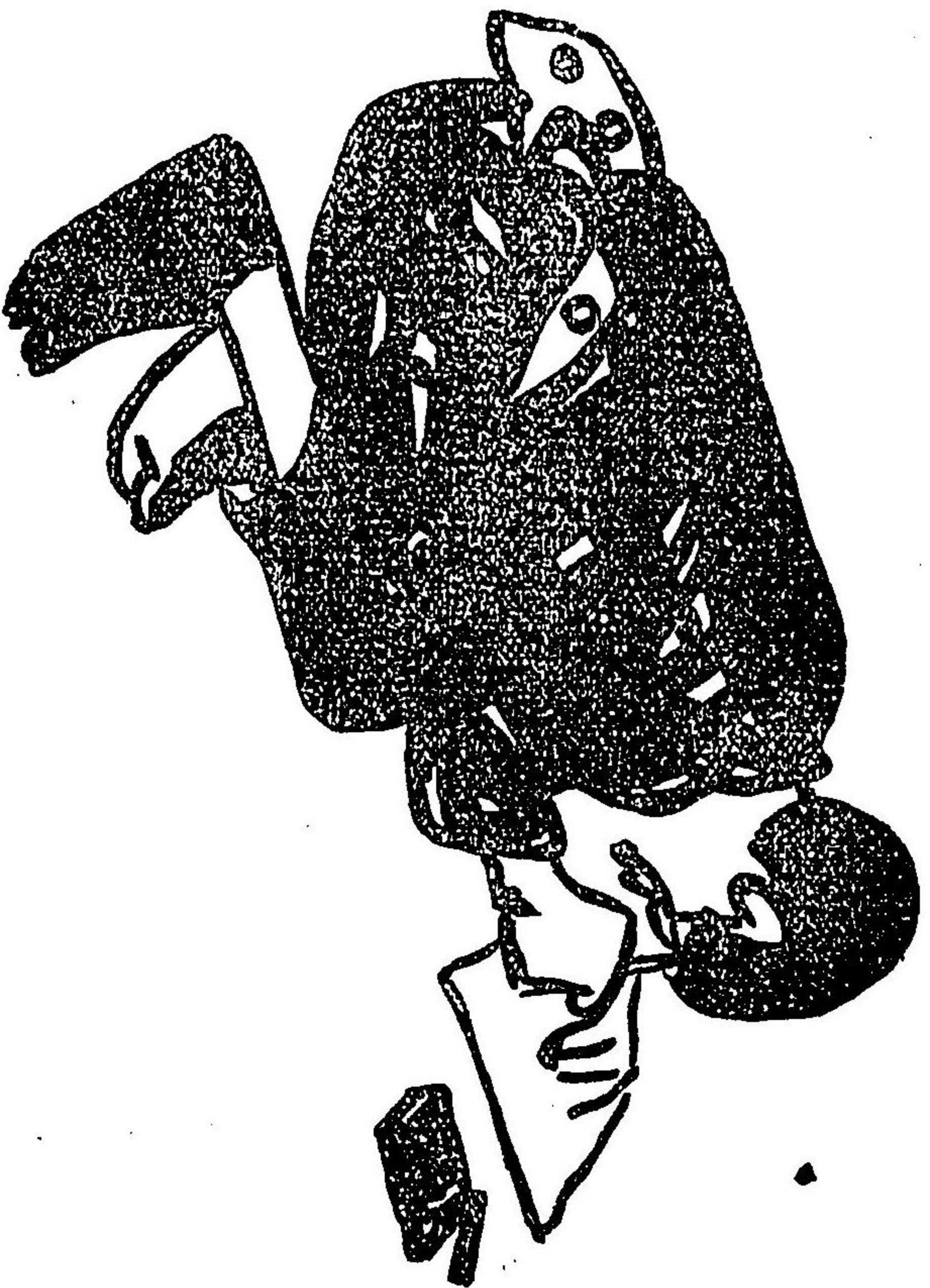
白
菊
の
女





1908.

眼鏡





白かぶと柿とま月堂



思身思
はもふ
るものな
しおそき

右貴下御出品鑑査の結果陳列せざること

に決定候に付毎日午前九時より午後四時

まで出品預り證引替に現品御引渡可申儀

條御引取相成度此段及御通知候也

追て本日より二十日を経るも搬出せられざると

は美術展覽會規則第十六條に依り本會に於て相當

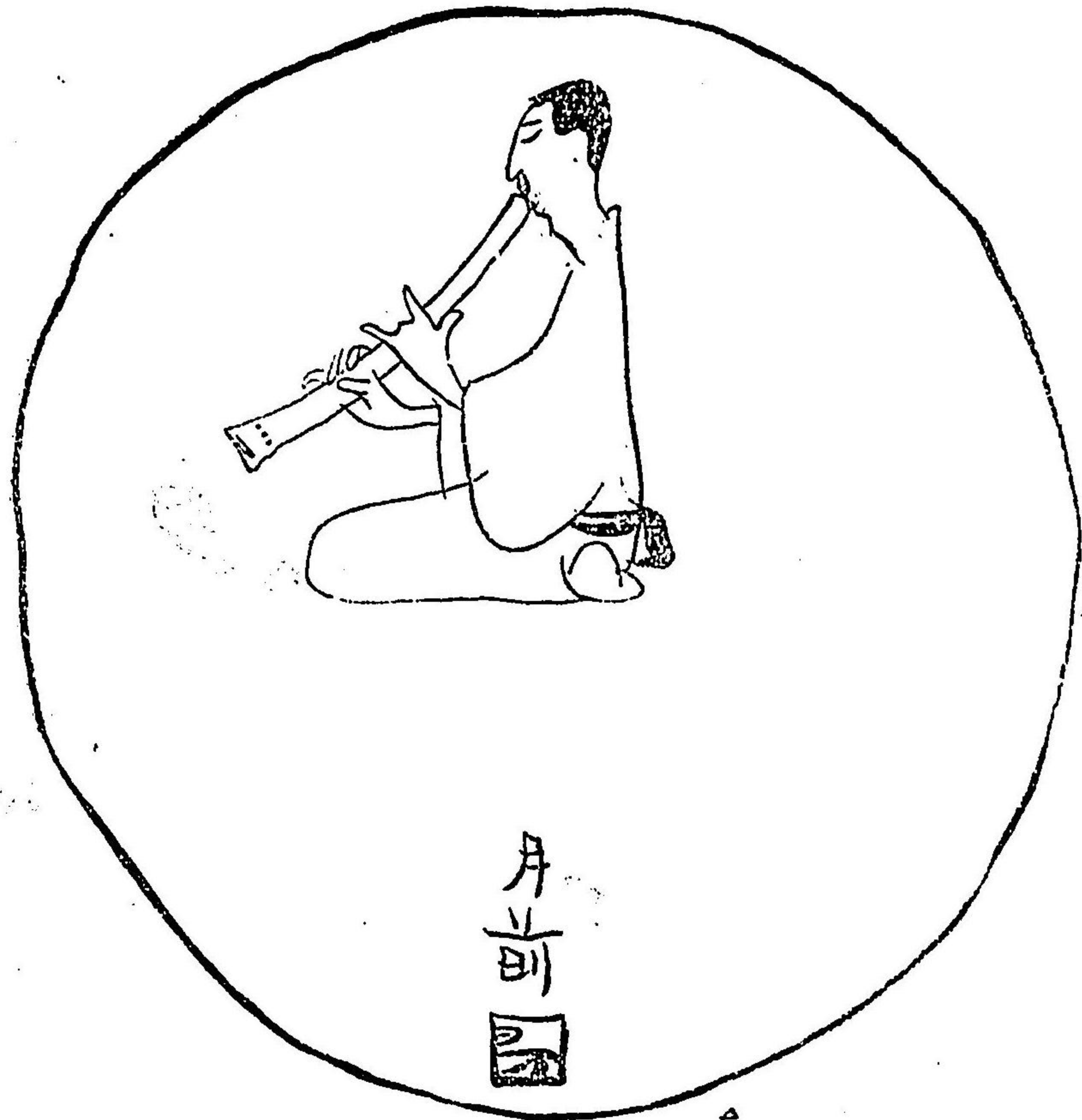
處分可致候也

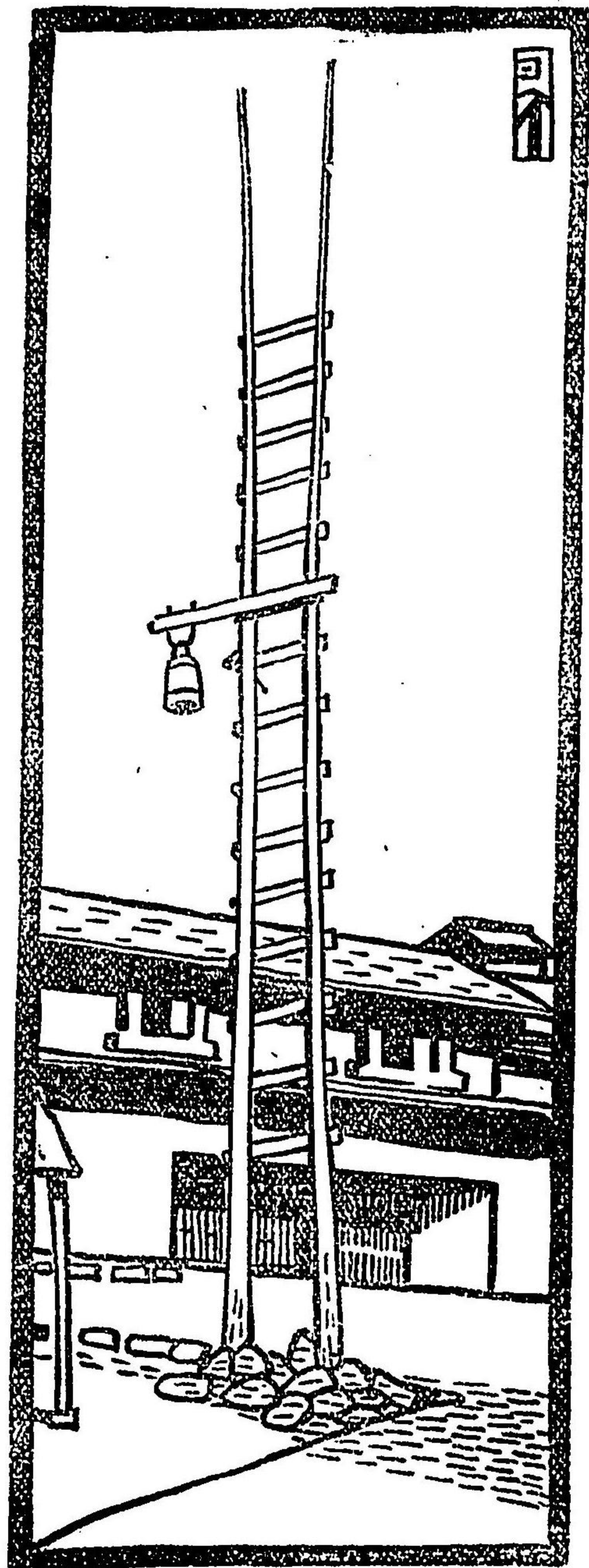
明治 年 月 日

文部省美術展覽會事務所

Comment







午後二時頃の日光を受けて、牛鐘のハシゴはクツキヤと白い。
群青の空は絶対に高い。西してミコキでも啼れて居る。此牛鐘
がサヤーンと鳴つたり、此村の平和は忽ちに破れる。
今は至つて静かである。遠くの家からなまの音につれて機織る
女の田舎びたラツン節が聞える。此場合、此牛鐘を、僕は平和
のメモホルと名付けたい。

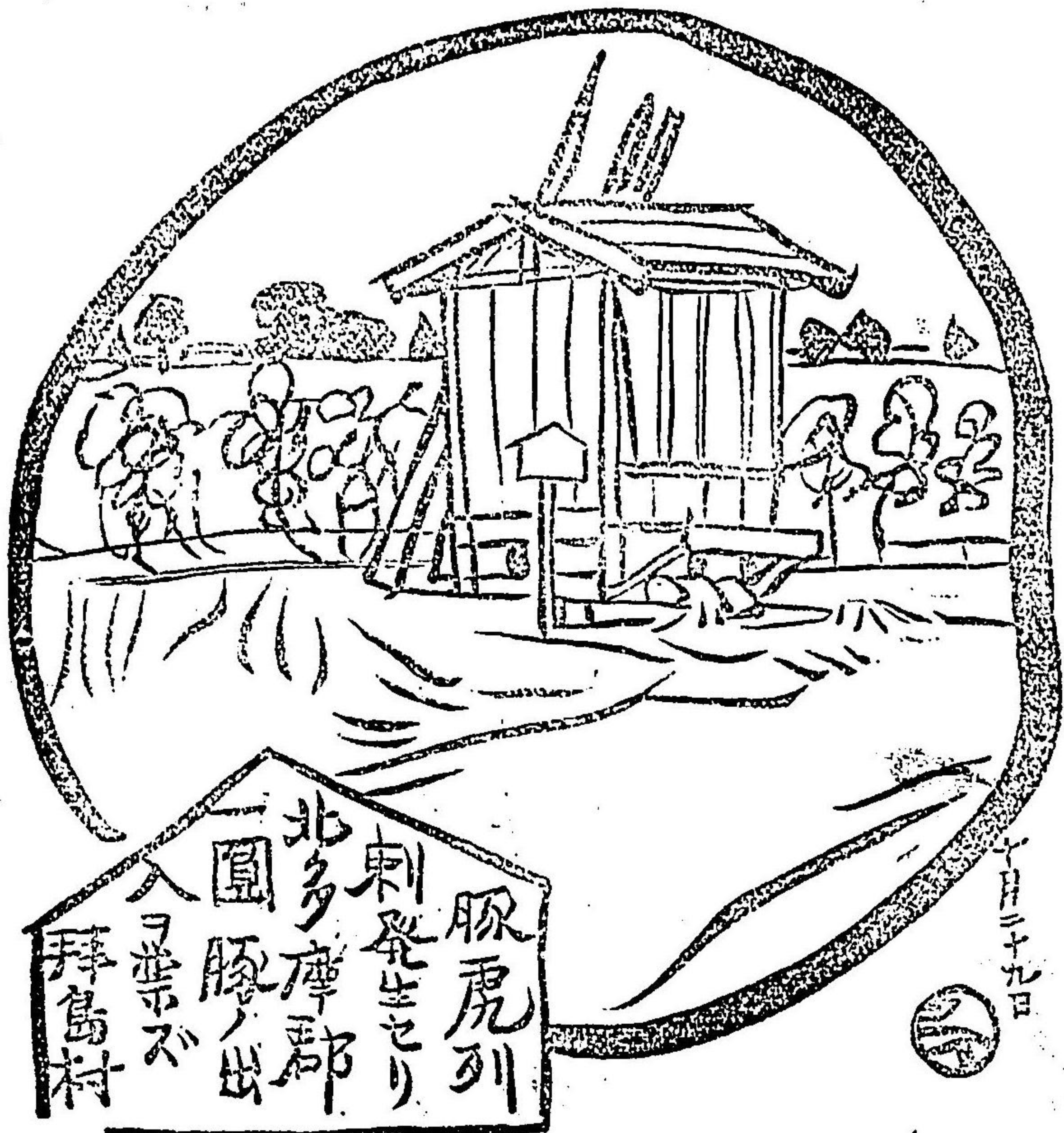
(十一月十八日五市にて)



十月二十八日。午後四時。魚屋の二階から木下君と二人で往來を見下す。道の中央に小さい流れがある。葱や大根の葉がういて流れる。處々に板の橋がかしつて居る。薄く曇つた夕方の空が映る。向うから赤んぼを負ふつた娘が来る。橋を渡る時二階を見上げた。立止つた。一心に見て居る。長髪の木下君を變に思つたらしい。鬱鬱不貞といふやうな顔だ。そしらぬ風してアツクに怒す。——それと知つた娘は赤い顔をして横町にそれて行つた。

十月三十日。昼。
 午前九時宿を立つ。
 多摩の河原に出る。
 肌寒い風が耳を吹く。
 北方の山々が天に接する。
 一直線に導。
 子供が二人。
 何だか拾つて居る。
 「何拾つてるの」
 と問うたら
 「たき」
 と女の子が答へた。
 僕等は土手を川上へ歩む。
 子供は川下へ行く。
 多摩川の流れの音が發い。





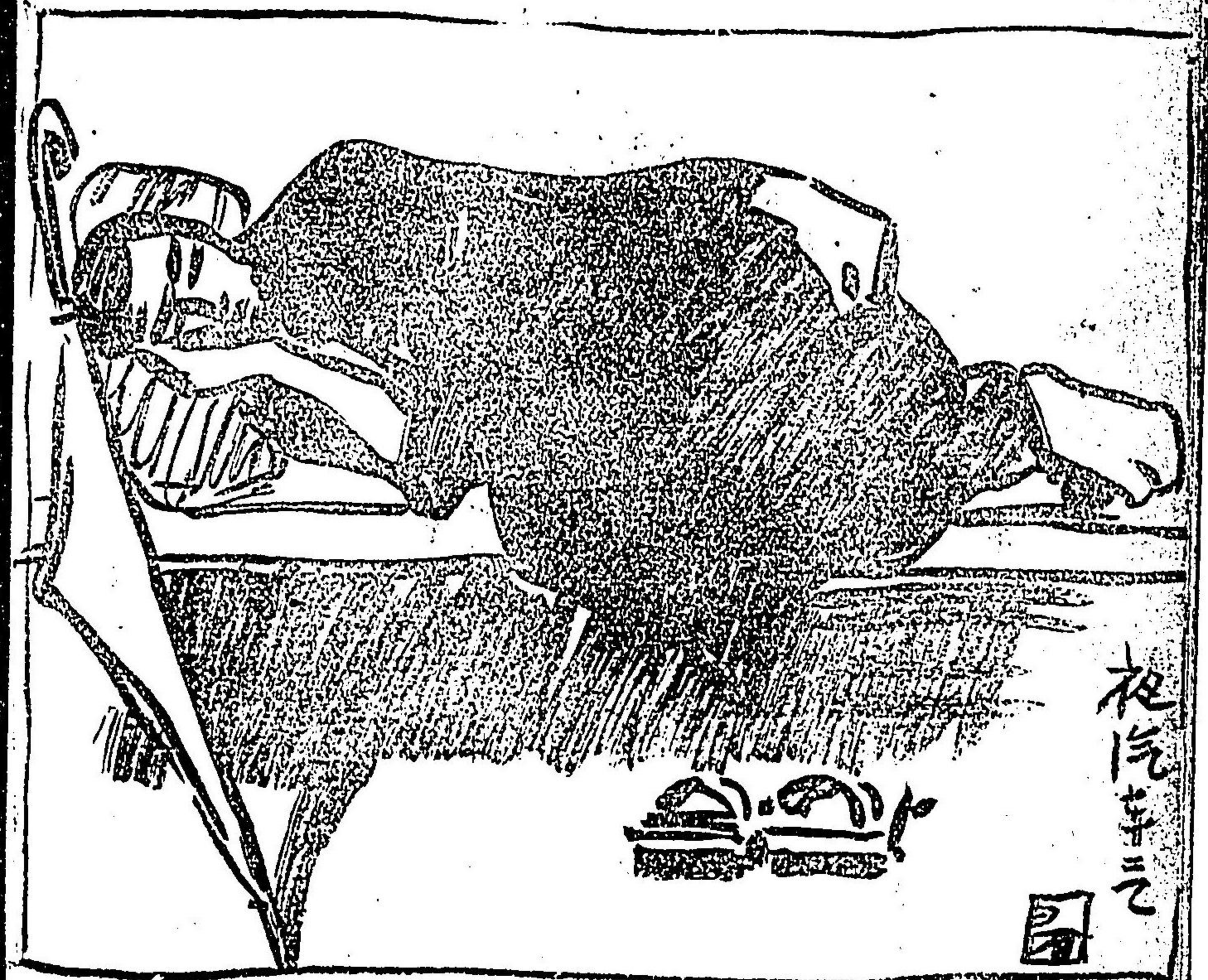
渡場のやうな小屋がある。前は多摩の河原、後ろは蒸畑に
ついで、森の間から家がちらほら見える。暫く人廻りが
無い。空は一筋に曇つて、流れの音がゆるやかに聞えるば
かり。かう見た所何もない。ふと建札の「豚虎列刺殺生セ
北多摩郡一圓豚ノ出入ヲ禁ズ」の書を認めた時、極めて
近代的な感じがした。

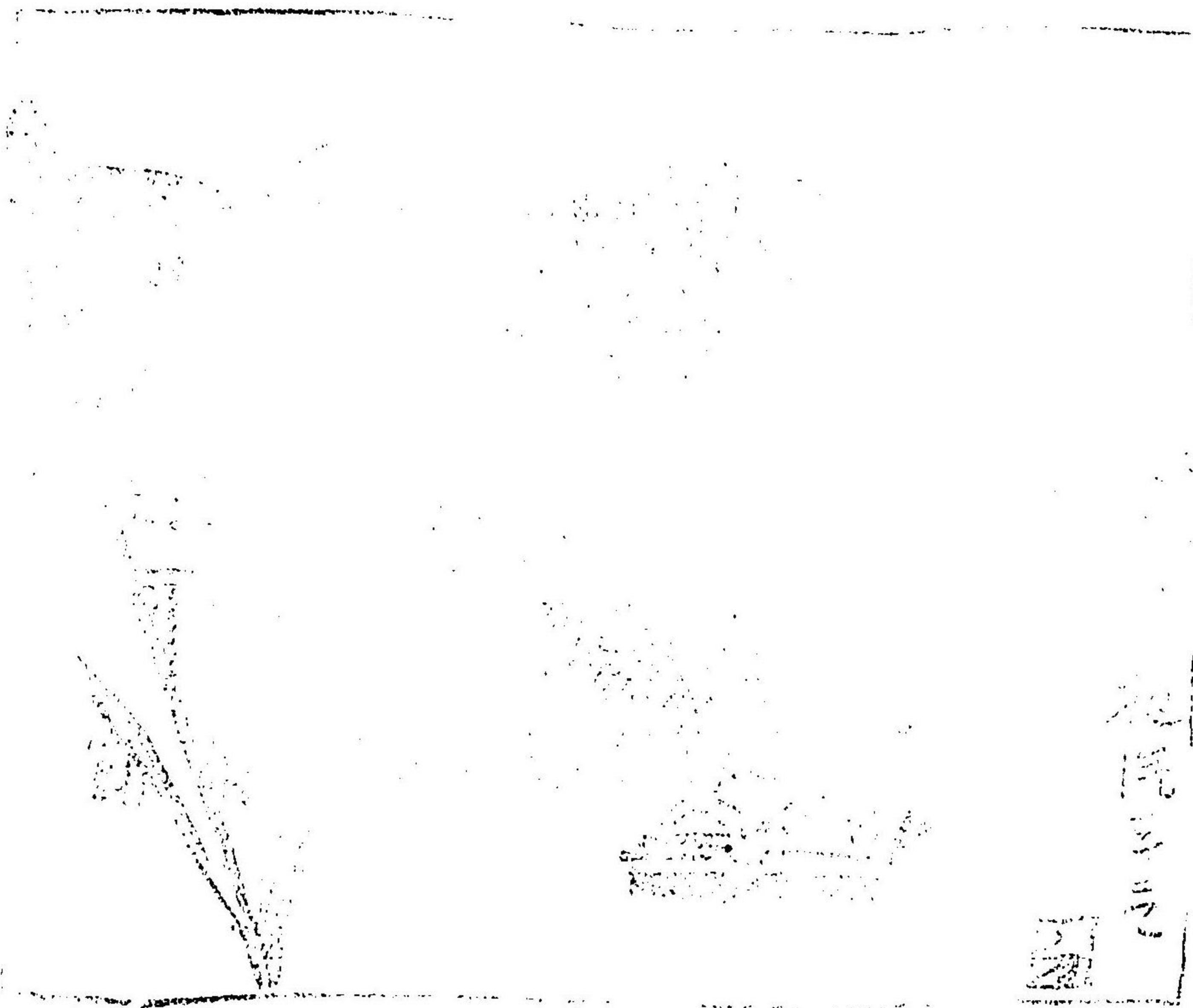


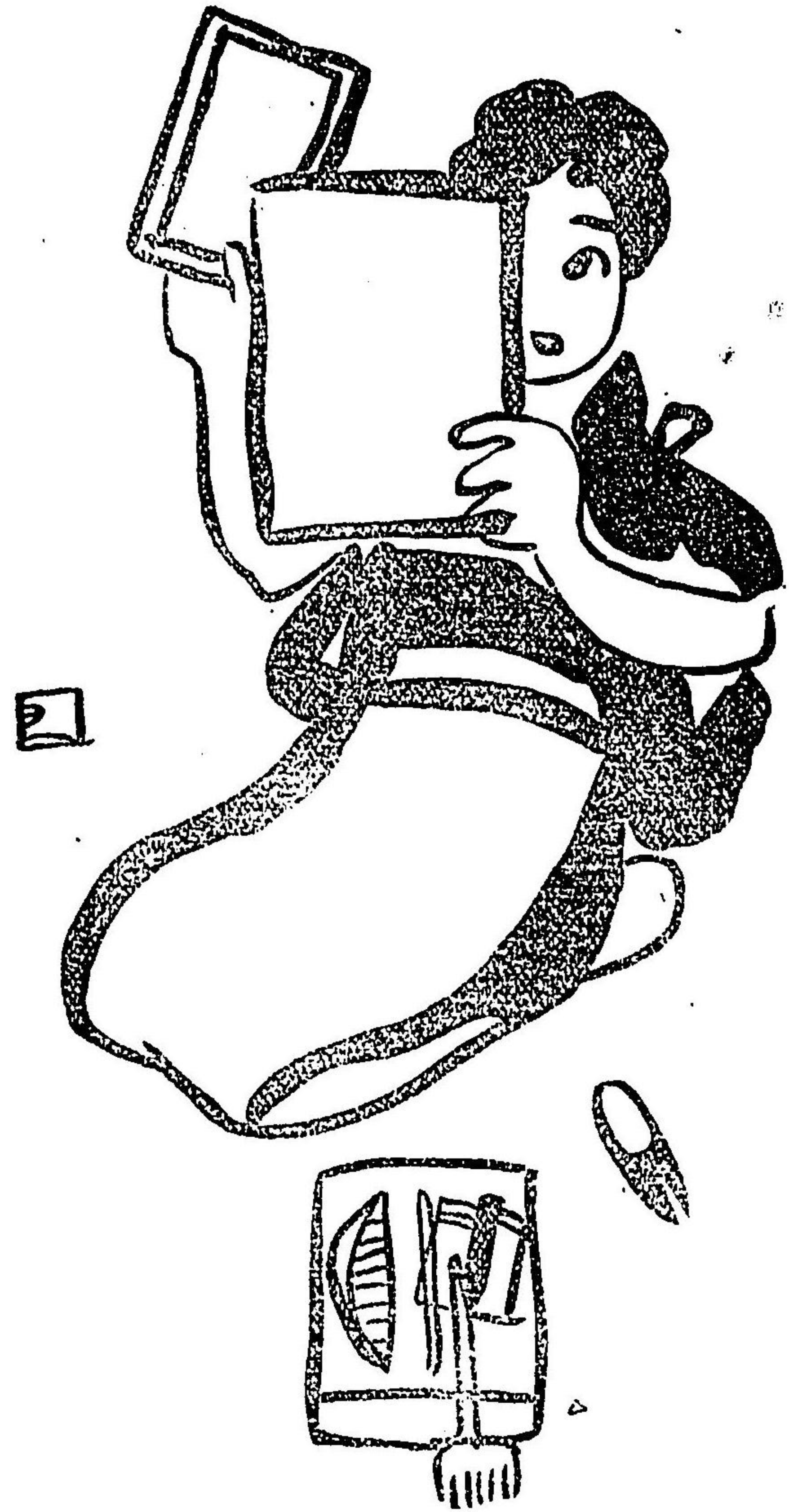
十月三十日 午後四時。

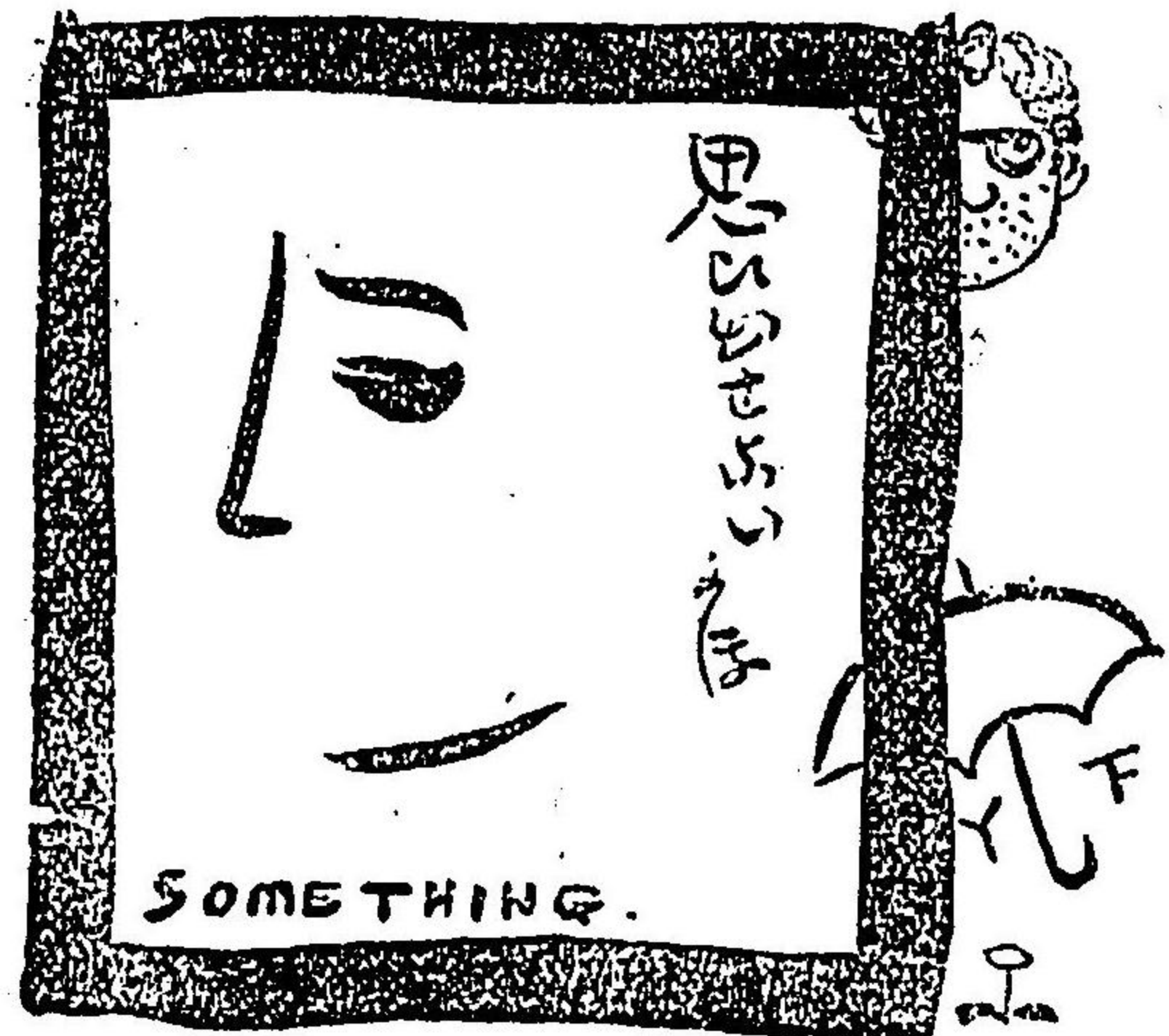
舞島の停車場で四時五十三分立川行の列車を待つ。前の茶
店にありやが舞だか長い節で太鼓をたたきながら唄って居
る。さびた聲だ。低く動く盤の間から、時々淡い秋の音が
もれる。よくきいて居ると、唄は固定思治だ。其長い節と
太鼓の音とが、静かに村の空気に傳はつて、純日本的な節
関をまみんと思はせる。柳の枝はながくたれて動かぬ。











SOMETHING.

田舎の風景

Y F

春の夜は遠慮なく近けた。

いたづら書きの紙のはしに

こんな顔が出来た。

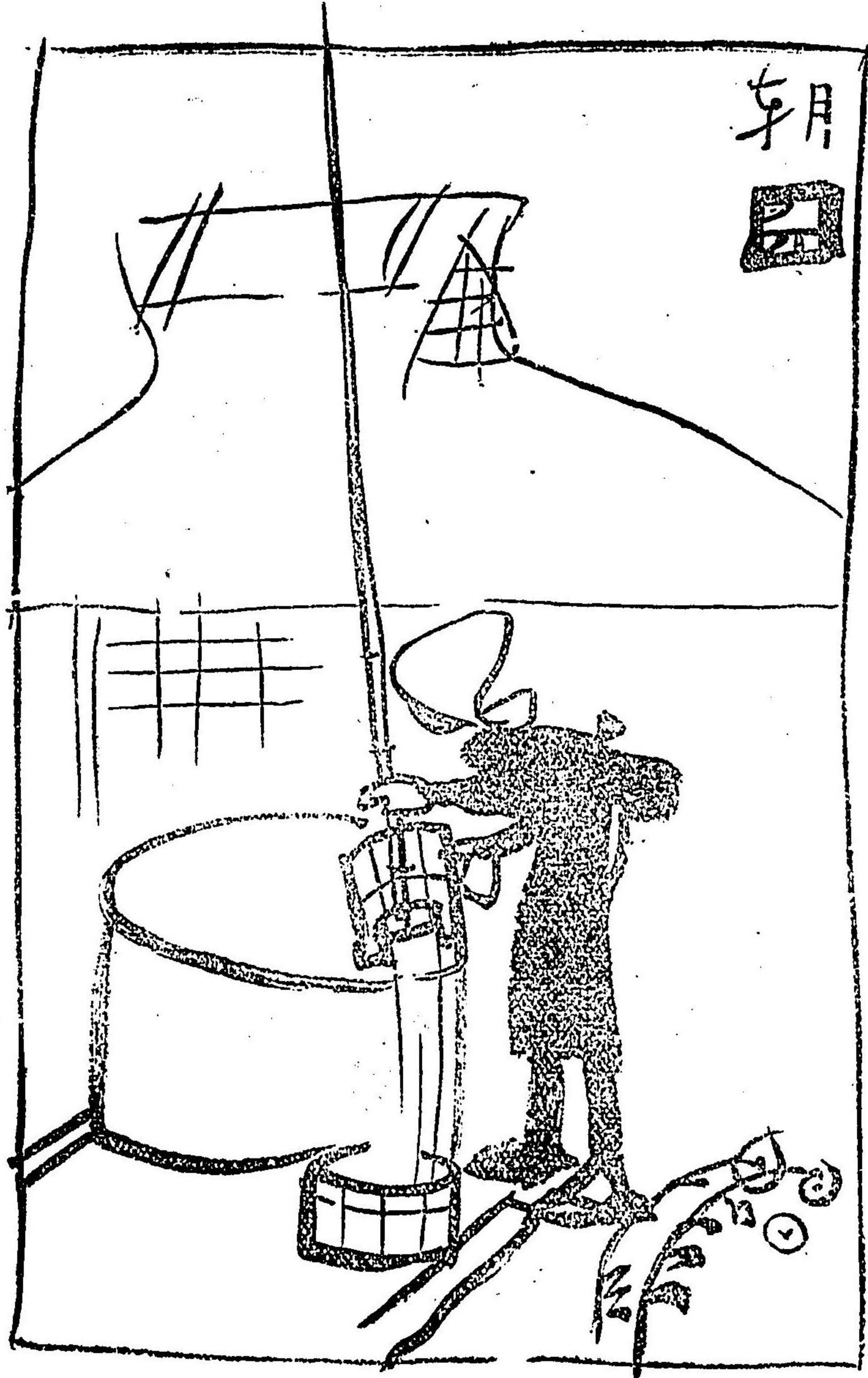
どこかで見たやうだ。――

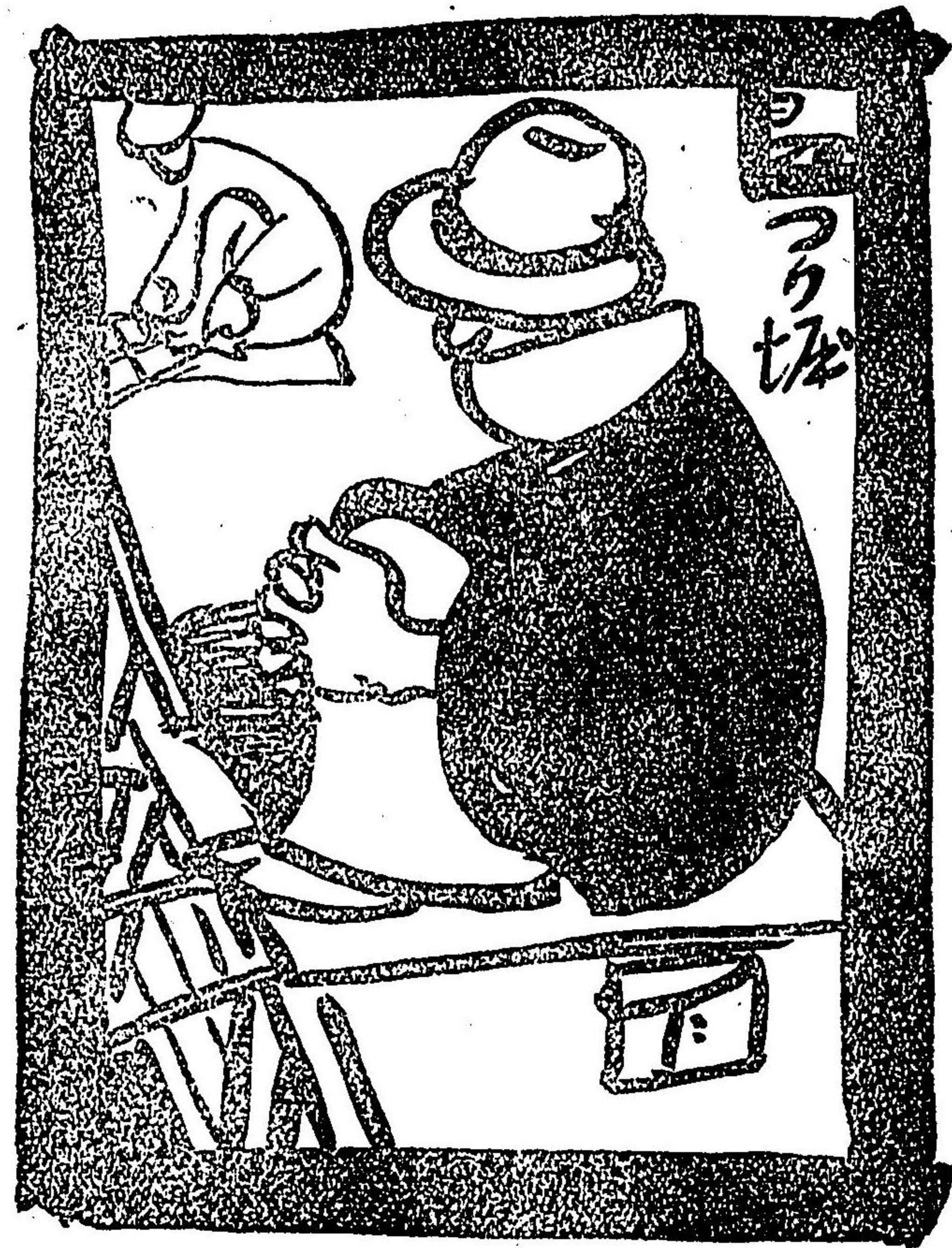
思ひ出せない、

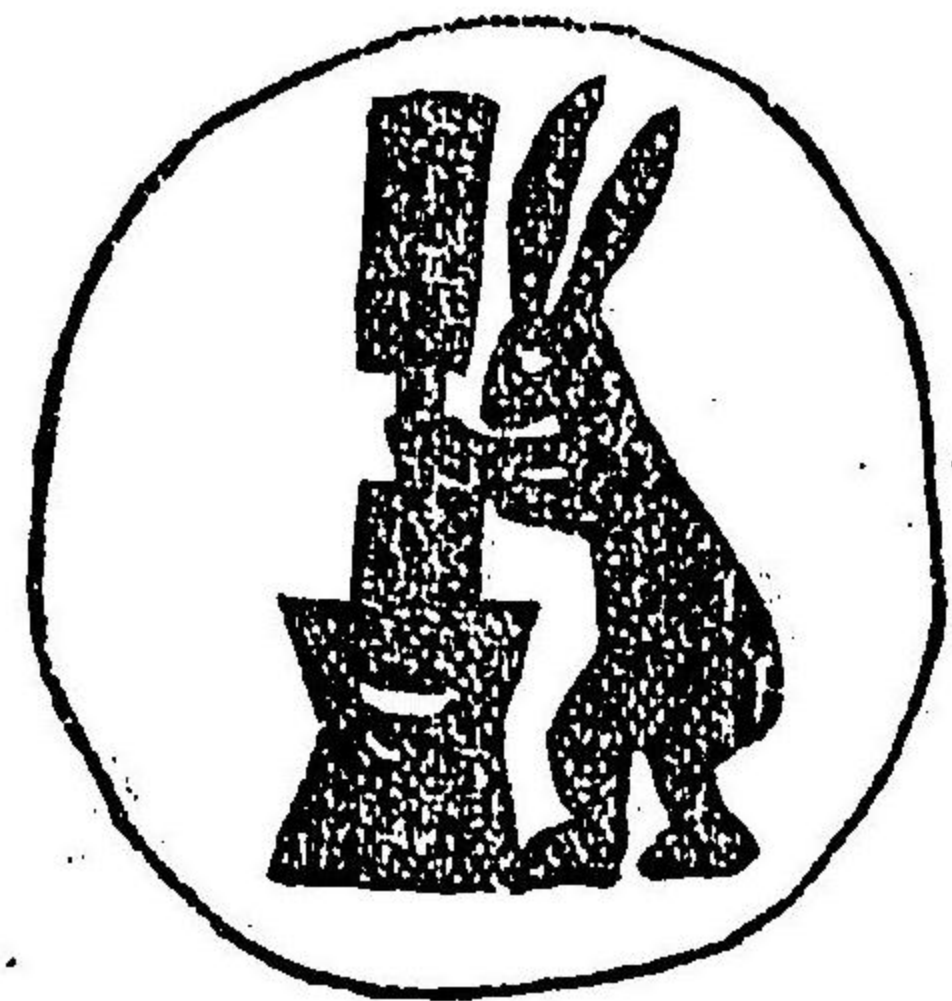
男か

女か

それもわからない。







十三七ツ



お月様いくッ、十三七ッ、まだ年や若いな、彼の子を産んで、此の子を産んで、お蔭に抱かしよ、お蔭でこ行つた、油買ひに茶買ひに、油屋の前で、滑つてころんで、油一升こぼした、その油ごうした、太郎さんの犬と、次郎さんの犬と、みんな舐めてしまった。



一
子
の
中
に
秋
を
か
ほ
さ
た



水
仙
の
花



過去を
語る人

目撃者



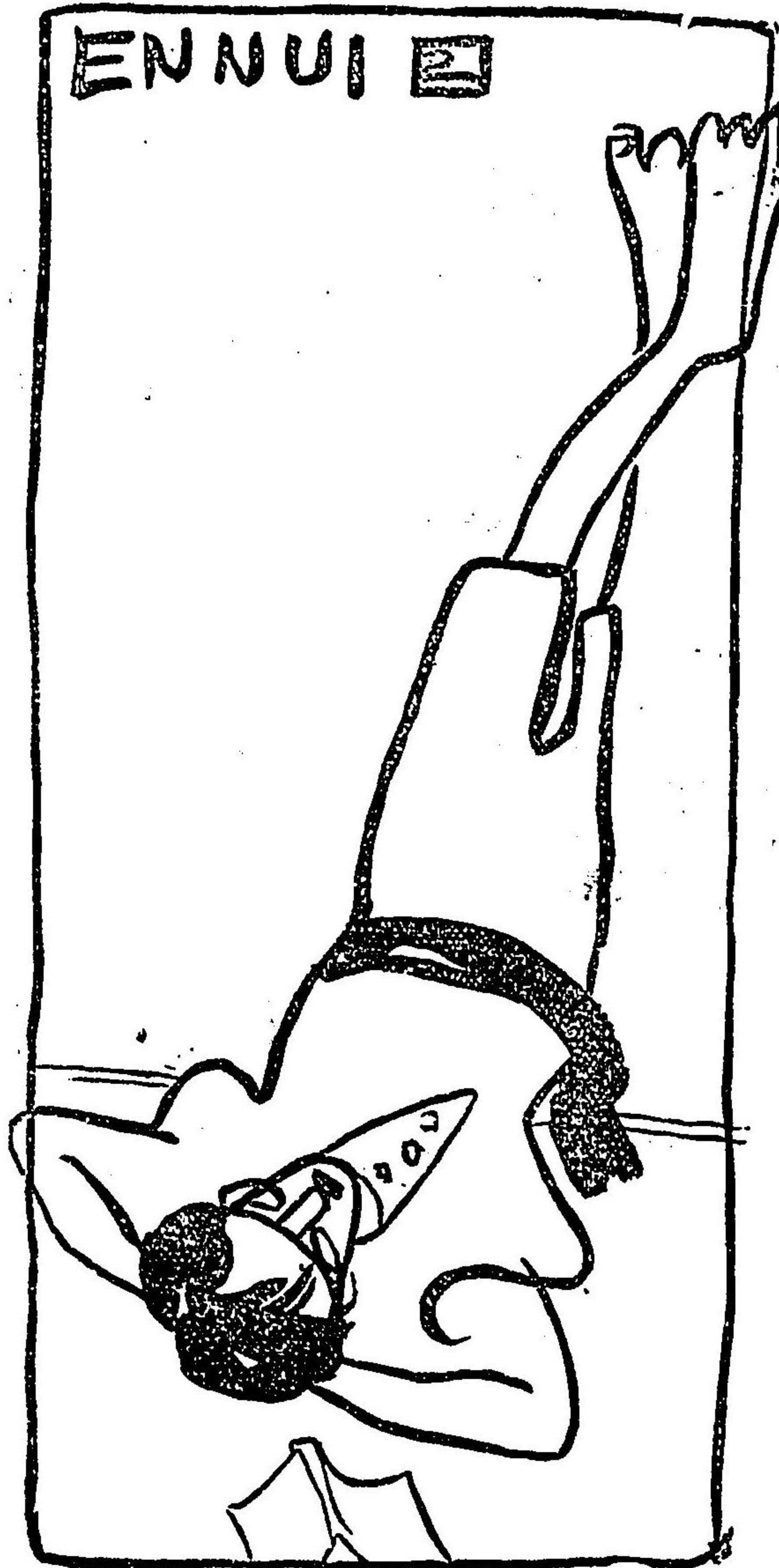
京都大佛にて

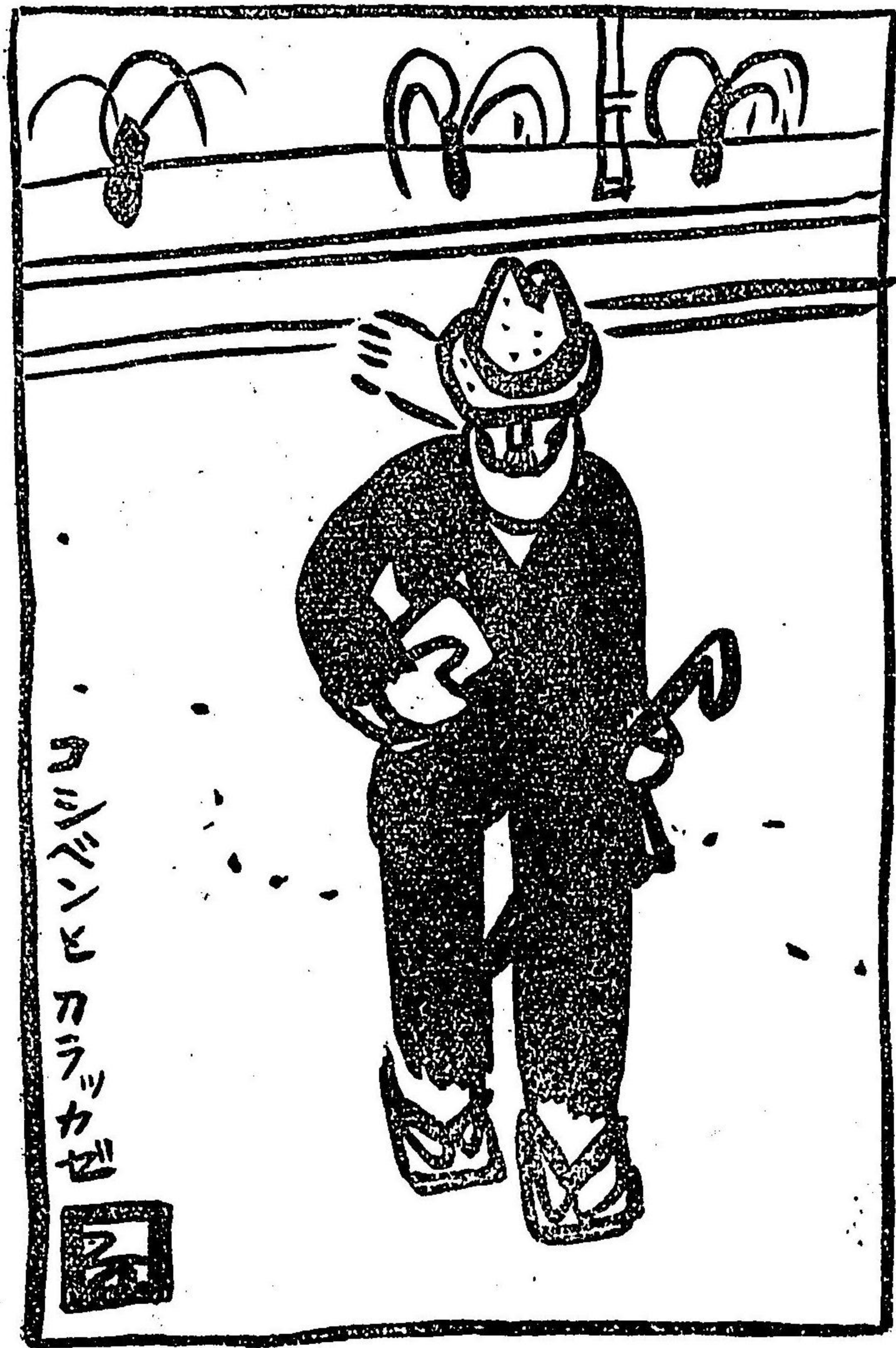
過去を語る案内者、誇り賃を以て生
 活する案内者、彼等はよごみなき西
 京辯をふるつて、はなやかなりし洛
 陽の昔を脱く、それが得意なる丈そ
 れだけ滑稽である、また哀れである。
 京都は寂しいとこふだと思つた。

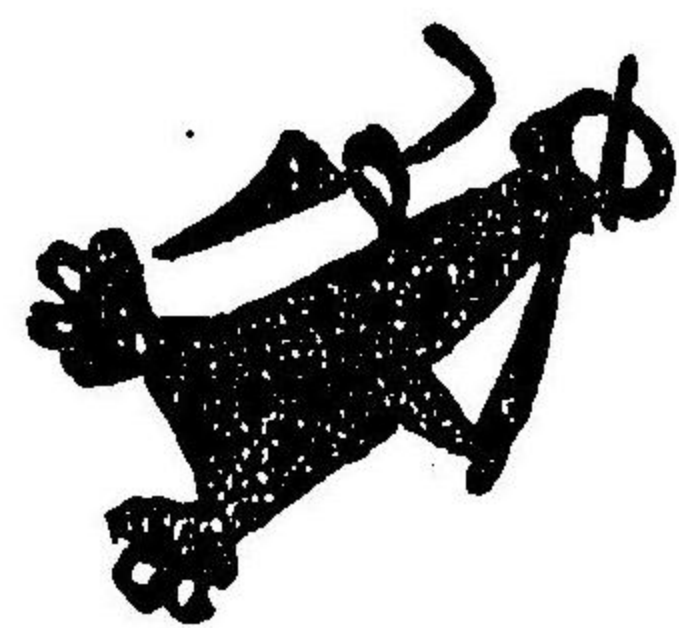
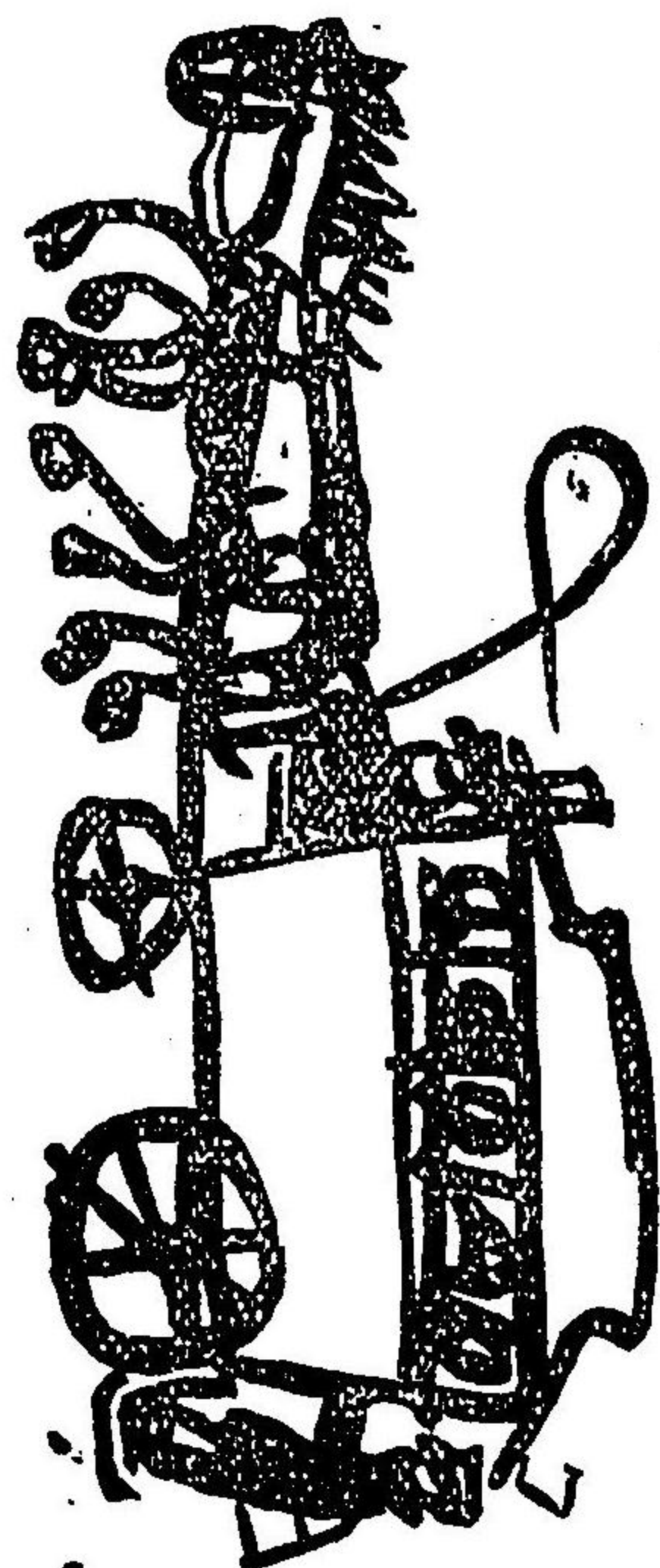


子供の繪にしては餘りに有邪氣である、無稽技巧を
 辨して描いたものでもない、誰かが云つた「無技巧
 とは、要するにレトリカルな技巧を斥けて、新しい
 技巧をとる——」とは、此繪に適當した言かも知れ
 る。

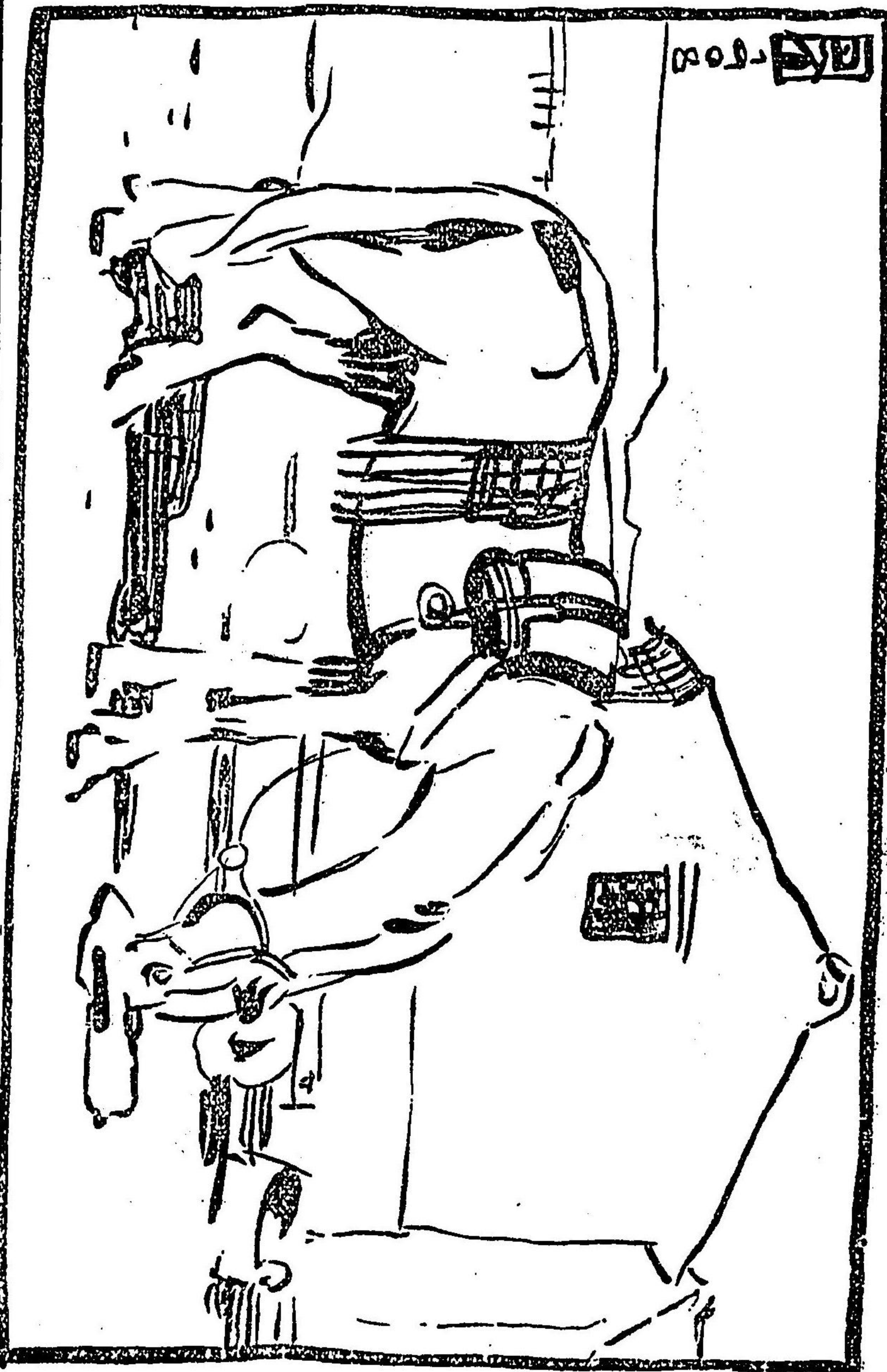
これでも一生——懸命に描いたものだ。



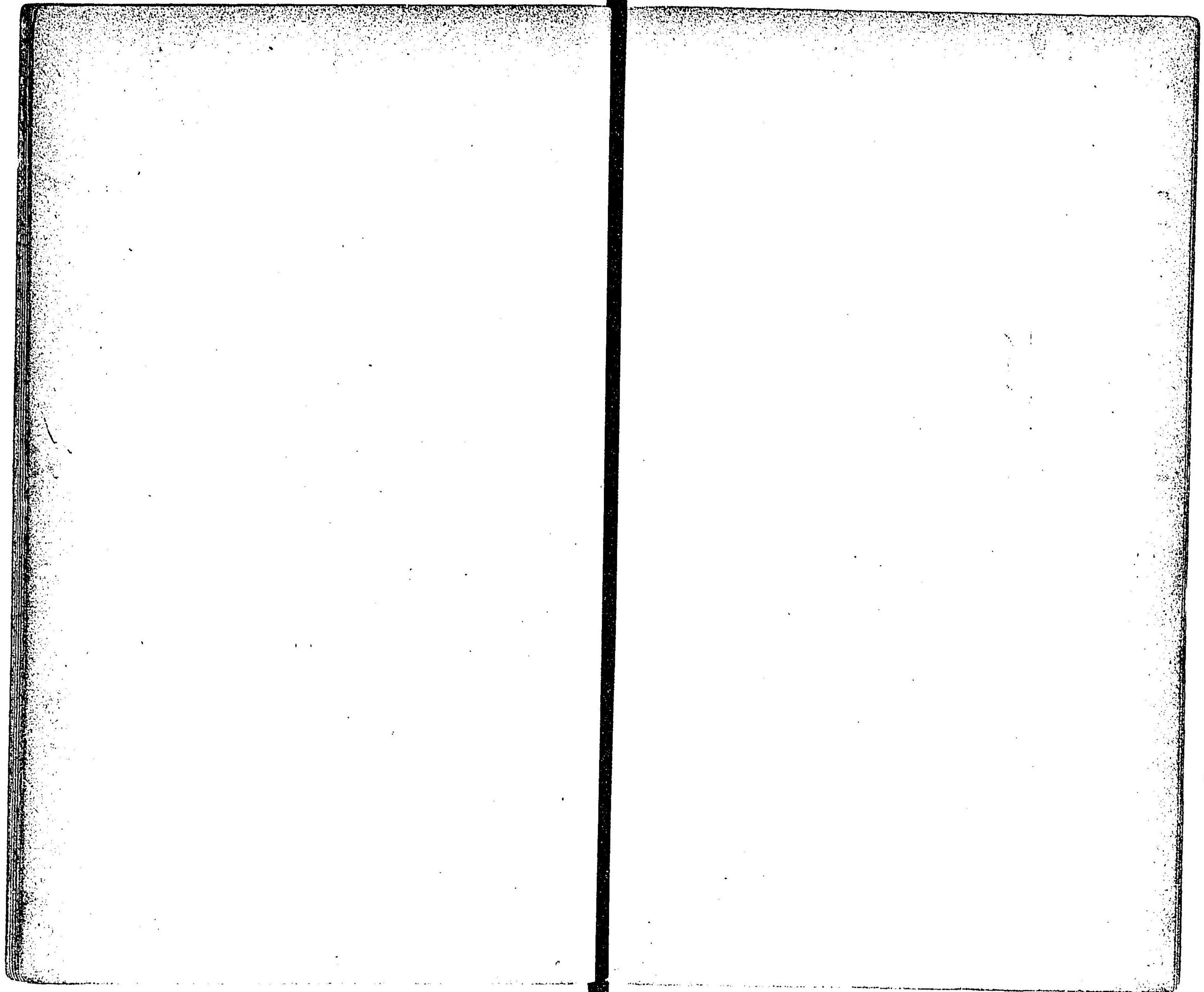


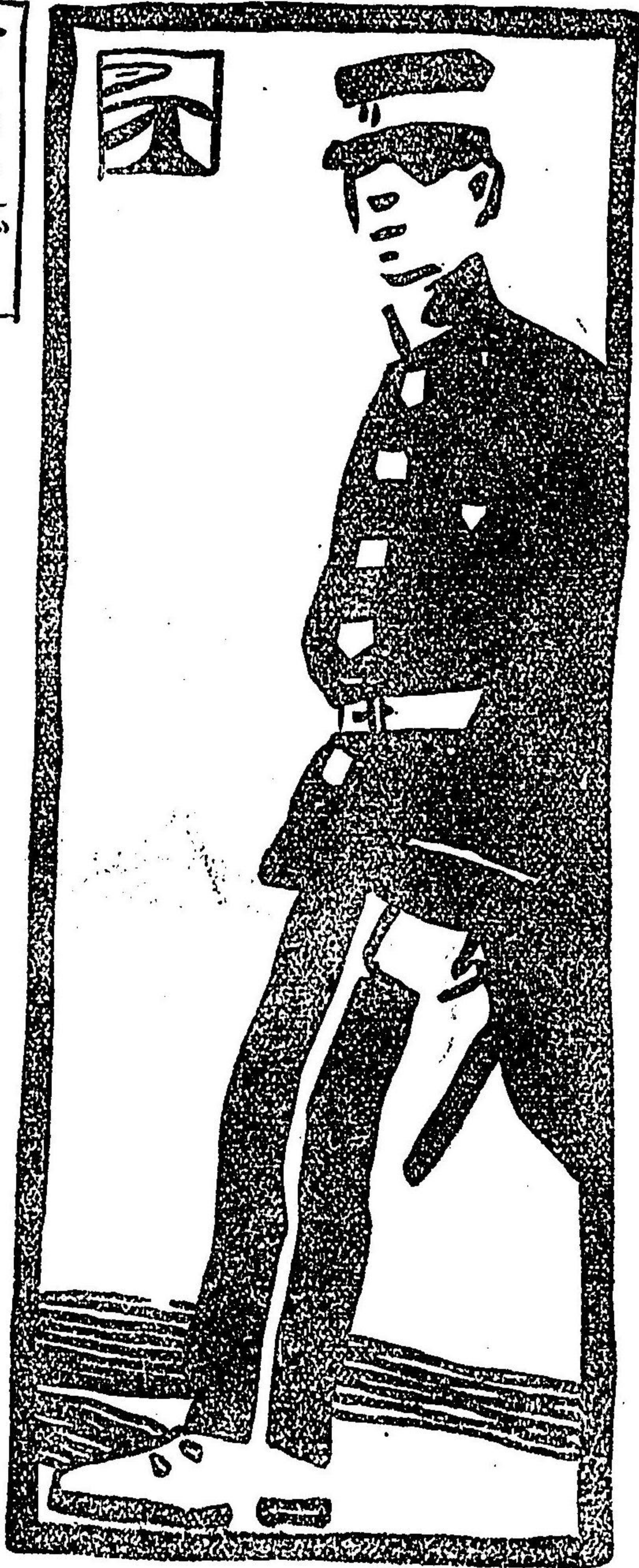


回 ぎゆしはたい



145-146



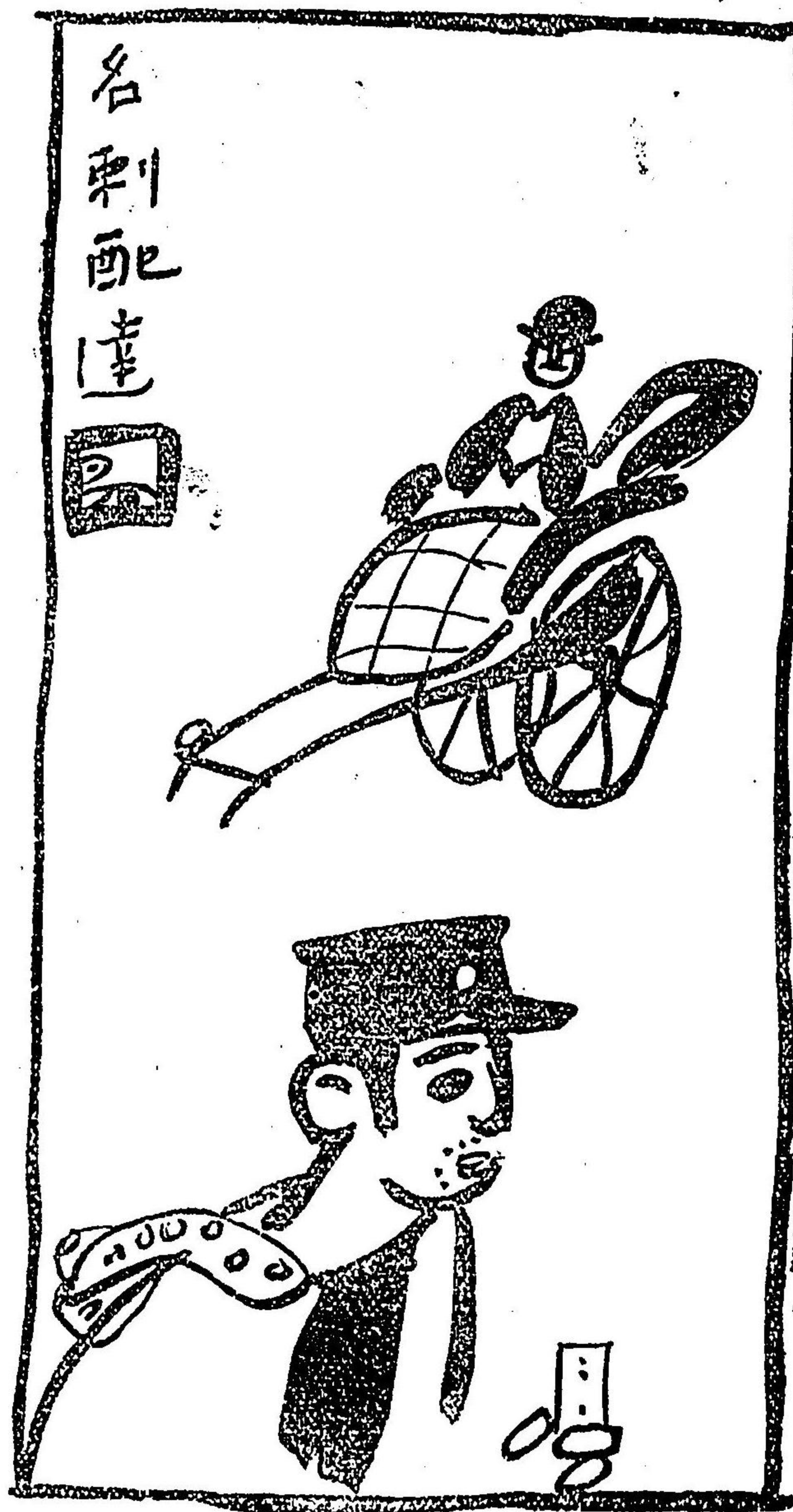
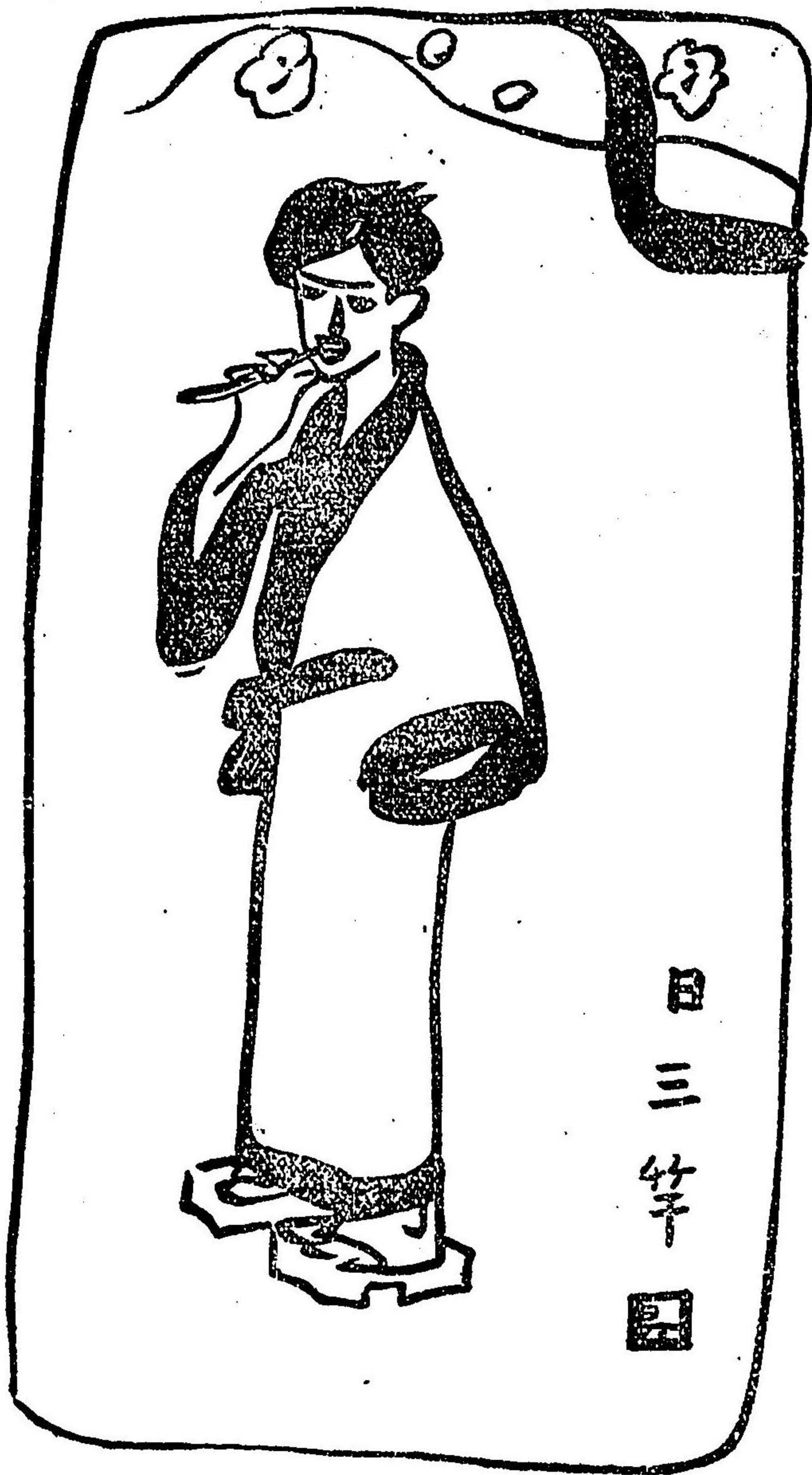


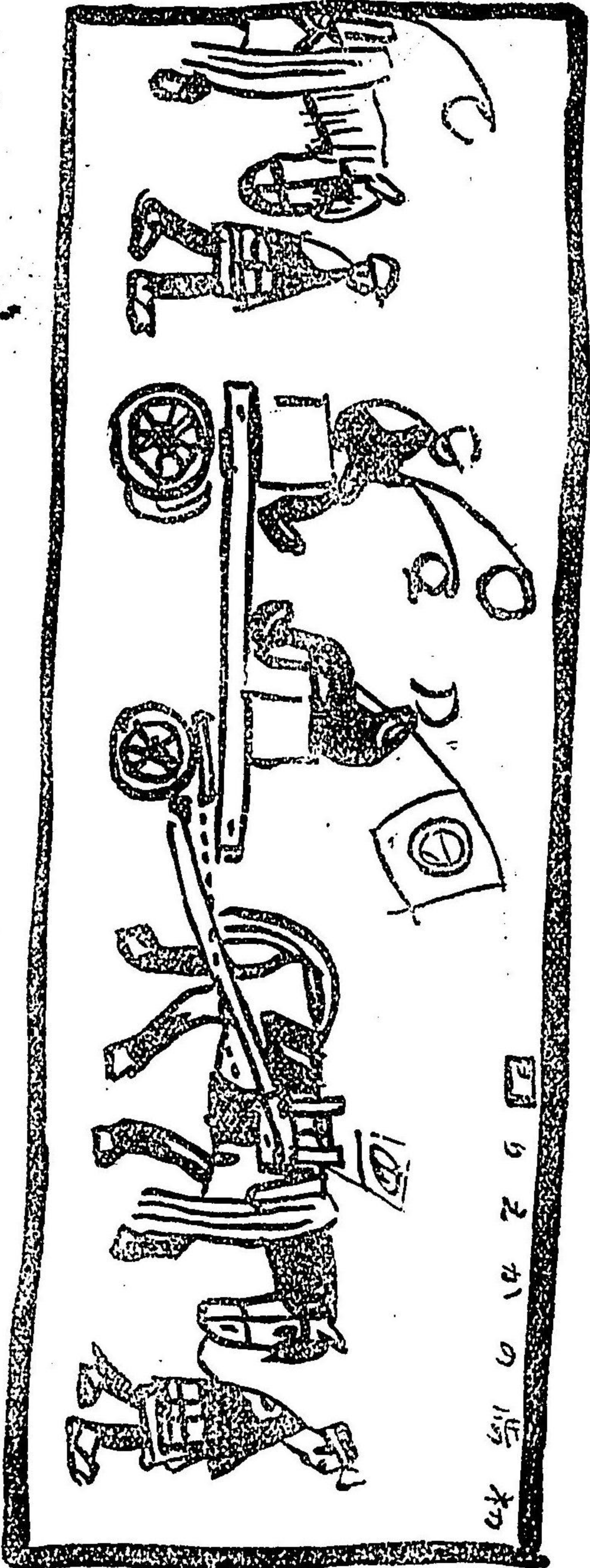
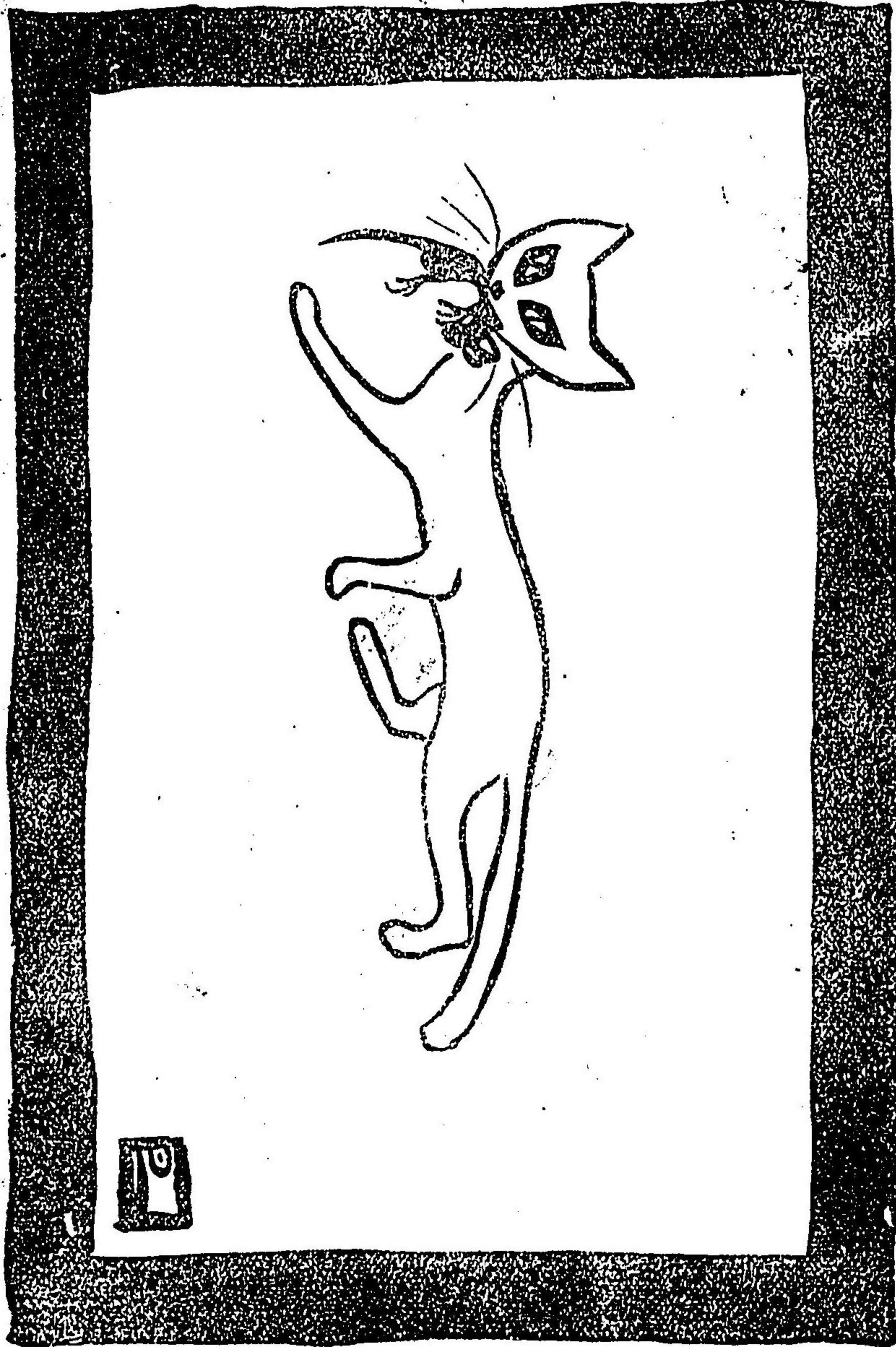
君

去年のお正月に、君から呉れた結ヘガキに、今年はこれだと書いてあった。其時は何とも思はなかつたが、今年になつて見ると、
 君も、今年はこれだ、遂に兵隊さんに會ふ毎に所々に之を思ふ

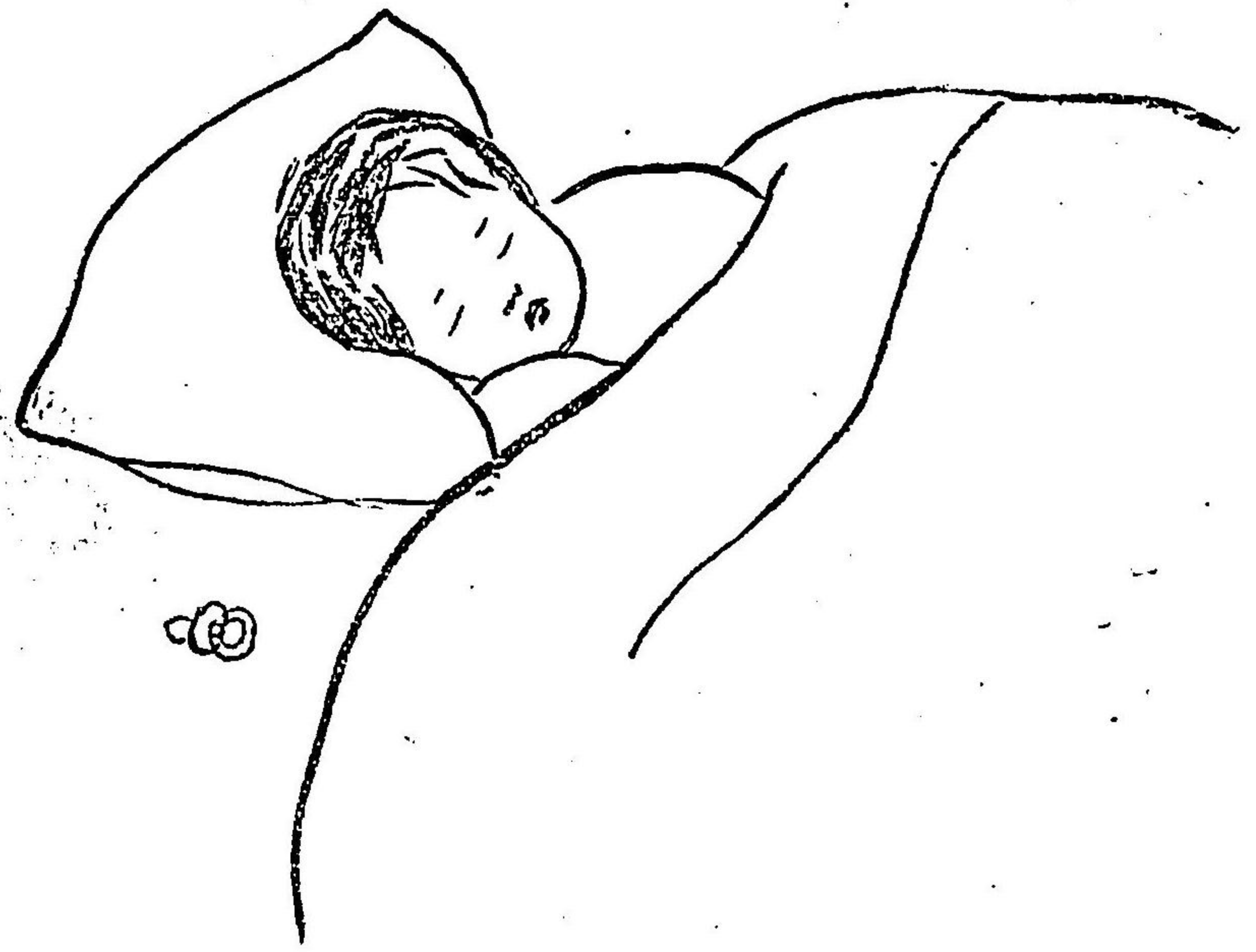
——そろ／＼寄留所でも出さずばなるまい。

(四十二年元旦)





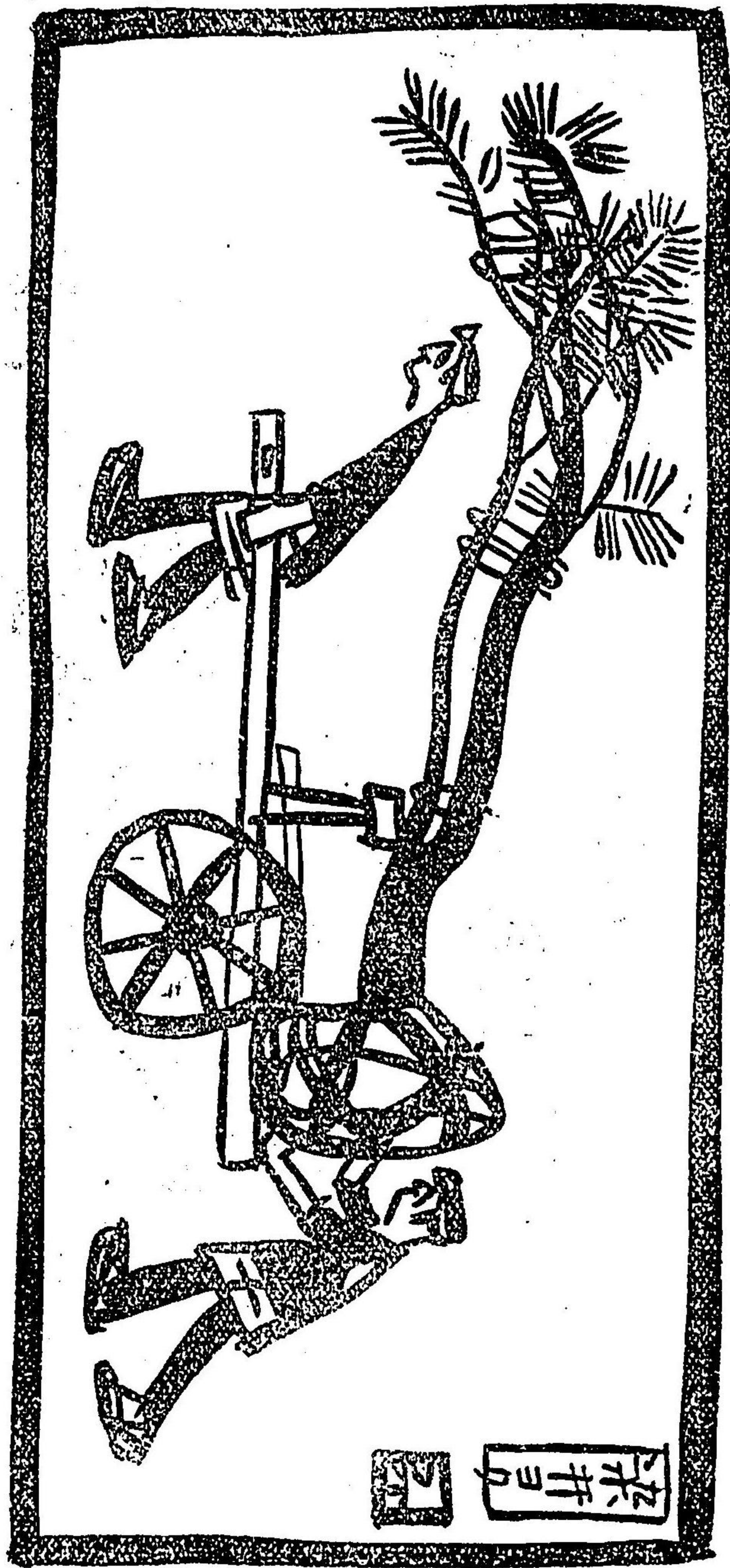
YOHEI



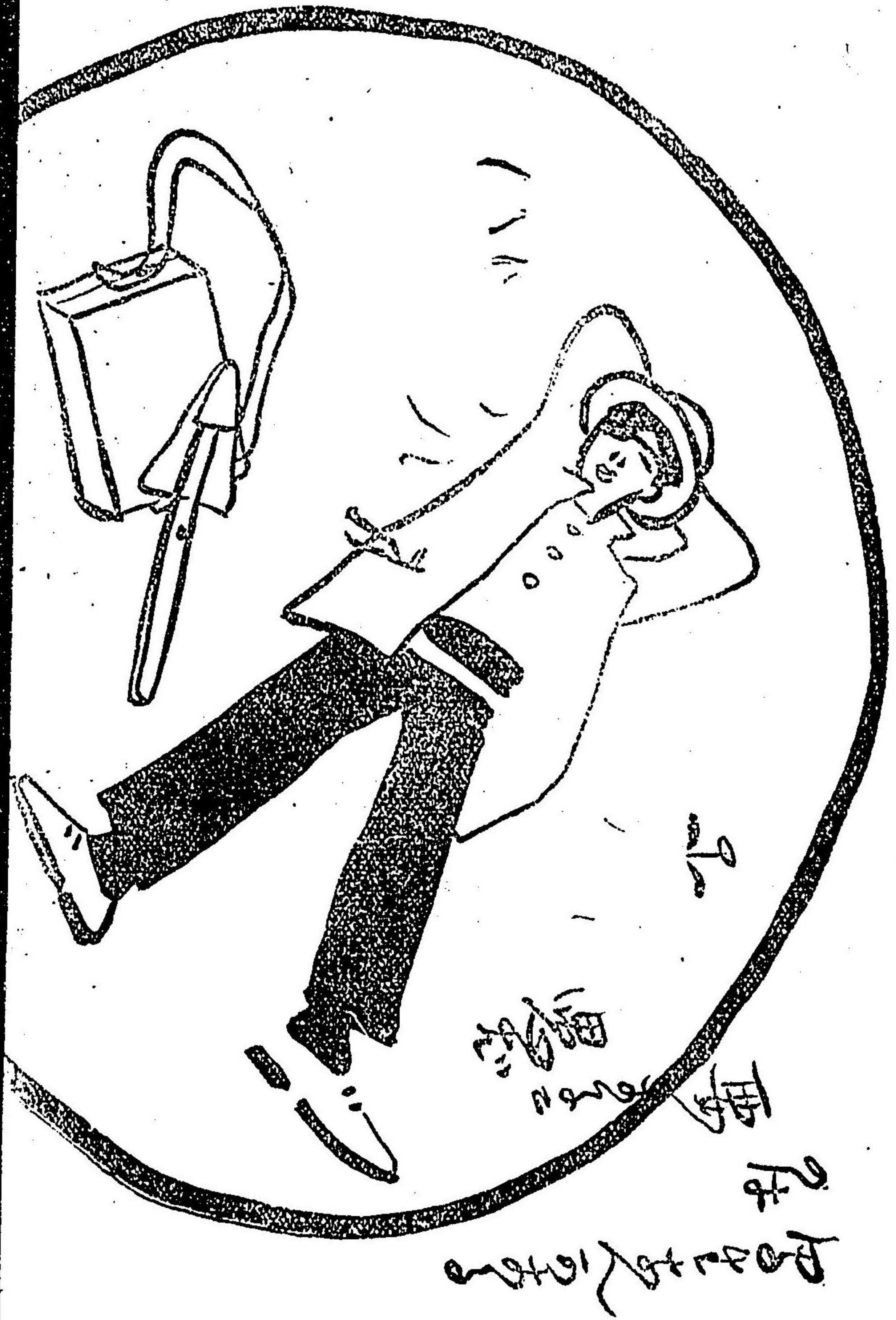
母
と
お
お
お
お









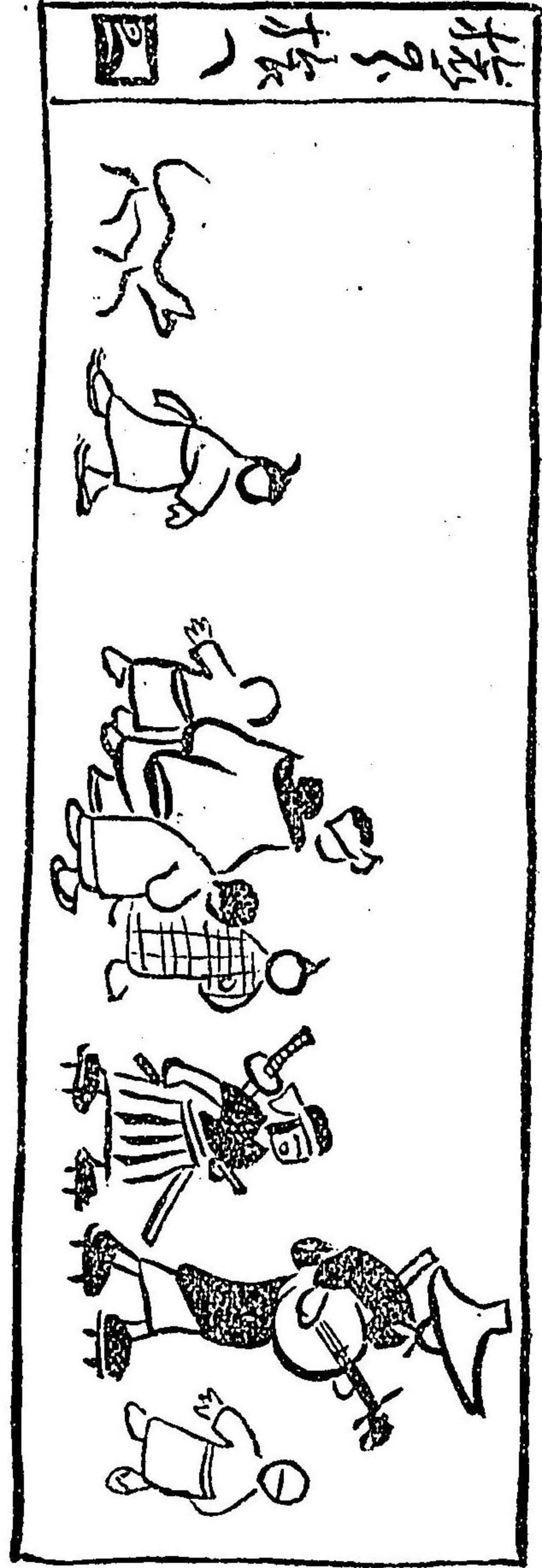
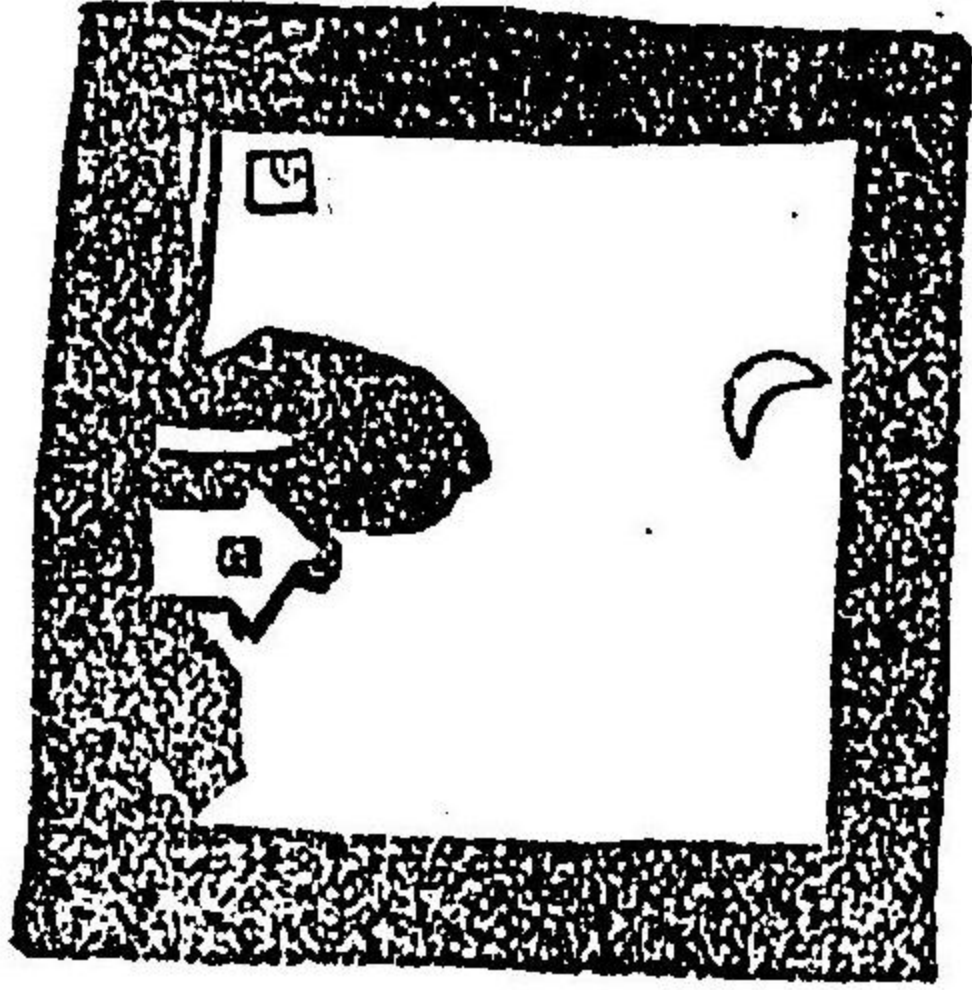


Poster/1010m

1/18

1/18

そんな群云ふのも、
 要するに愚だ。
 ヒバリがチーナク
 いてゐる。
 牛がモ〜〜ない
 てゐる。



4231
按手按

目次

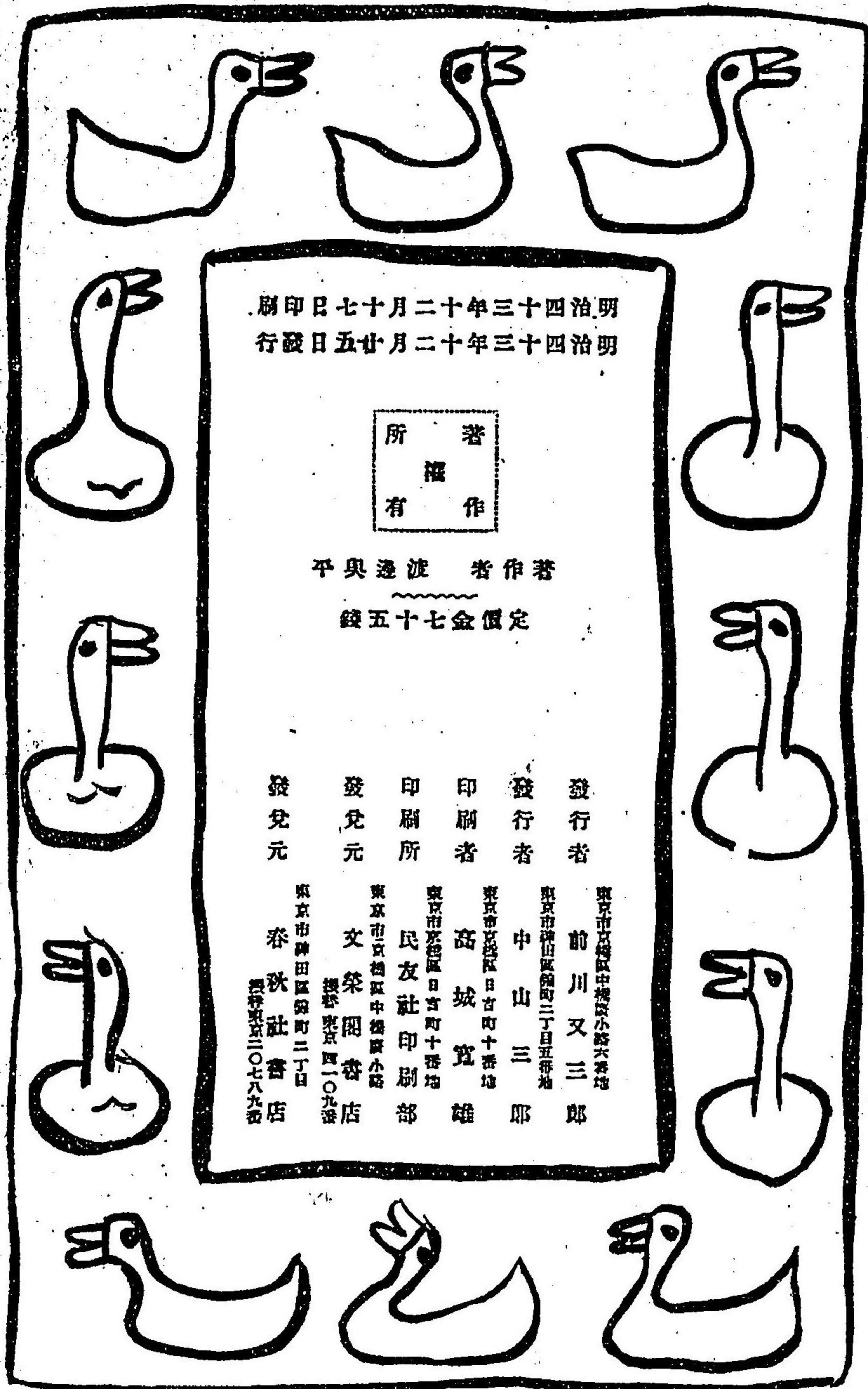
鳥	京師行のスケッチブックより	一	帯	帯
一	東山	二	わが庭	二
二	あつち向いた奉	三	太鼓の天才善松君	三
三	本能寺	四	全財産	四
四	高瀬のロキオ	五	エンソク	五
五	魂水	六	囚はれたる自然	六
六	大阪	七	お魚の塔	七
七	時計	八	三鏡の運命	八
八	終列車	九	山笑ふ	九
九	名古屋城	一〇	昔の兄貴	一〇
一〇	夜汽車	一一	天下尋平	一一
一一	上野の顔	一二	舞母	一二
一二	ひる寝	一三	股の下	一三
一三	くつした	一四	黄ろい顔	一四
一四	君はいま	一五	はな鏡	一五
		一六	あの兎の母	一六
		一七	人まつひと	一七

イグロニタヒカツチナイニハシメン	一八	はた摺	一八
あはせ鏡	一九	島原通ひ	一九
月並五郎	二〇	鼓さきにて	二〇
其一 月並の句と月並の傍園	二一	茂木のおちかさん	二一
其二 月並の看板	二二	かみそり	二二
其三 月並の俗曲	二三	賀勢不欺三尺子	二三
其四 月並のラブ、月並のサイン	二四	浪花深處説南朝	二四
其五 月並の自殺	二五	嵐駭	二五
鶴衛家	二六	西京水や町三條にて	二六
三味	二七	定九郎	二七
ながめめ	二八	勘平	二八
日和	二九	あめあがり	二九
霧消賢	三〇	月	三〇
ひるがほ	三一	梅あき	三一
霧生	三二	霞	三二
淡日	三三	カシメ	三三
君が今を	三四	嵐矢	三四

朝風	六	敗軍の將は兵を誦らす	107
露者	六	エーヤケコヤケアスハチキニナール	107
つれづれ	六	月前	107
お化粧	六	平和のシムホル	111
ハヤカワシ	六	龜の二階から	112
臂にちりりと	六	多摩河原にて	112
あるかなきかのまぼろしの	六	豚虎列刺	117
下宿の二階の窓から	六	鶴屋	117
村一帯の顔	六	郊外	119
コスモス	六	はな	121
白芙蓉	六	夜汽車にて	121
白菊	六	秋雨	123
メナムナシ	六	かみがたち	123
近眼	六	Something	123
荷馬車	六	都合の朝	126
懸あらばいかに	六	田舎の朝	126
白かすと柿と背空	六	つり堀	129

お館	12
十三七ツ	12
水仙	12
かがみの中に秋をおぼえた	12
過去を語る人	12
カクレンボウ	12
ENNUI	12
おかへり?	12
なが夜	12
コシメンとカラツカセ	12
白日	12
いたばしゆき	12
ツメチキル	12
今年はこれだ	12
名刺配送	12
日三竿	12
初荷のかへり	12

弱肉強食	125
母上様	125
寂がほ	125
大きな手	125
孫	125
乳	125
浪井ヨリ	125
寒き日	125
モー三分	125
寫生なんかするのは要するに思だ	125
旅から旅へ	125
目次	125
春と秋	125



明治三十四年十二月十七日印刷
 明治三十四年十二月廿五日發行

著作
 權有

著者 渡邊與平
 定價 七十五錢

發兌元	發兌元	印刷所	印刷者	發行者	發行者
東京市神田區錦町二丁目 春秋社書店 電話東京二〇七八九番	東京市京橋區中橋廣小路 文榮閣書店 電話東京一〇九番	東京市京橋區日吉町十番地 民友社印刷部	東京市京橋區日吉町十番地 高城寛雄	東京市神田區錦町三丁目五番地 中山三郎	東京市京橋區中橋廣小路 前川又三郎



大友御所
 東京市神田區 東京堂書店
 同 神田區 上田屋書店
 同 日本橋區 至誠堂書店
 同 京橋區 前川文榮閣
 同 京橋區 北隆館書店
 同 京橋區 東海堂書店
 名古屋市 小澤百架堂
 同 川崎書店
 京都市 東枝律書房
 大阪市東區 吉岡資文館
 同 東區 杉木書店
 同 北區 盛文館書店
 久留米市 菊竹金文堂
 清國大連、營口 大阪屋書店

大町桂月氏評
 ○新譯文章軌範(五版) 金七十五圓
 附料六圓

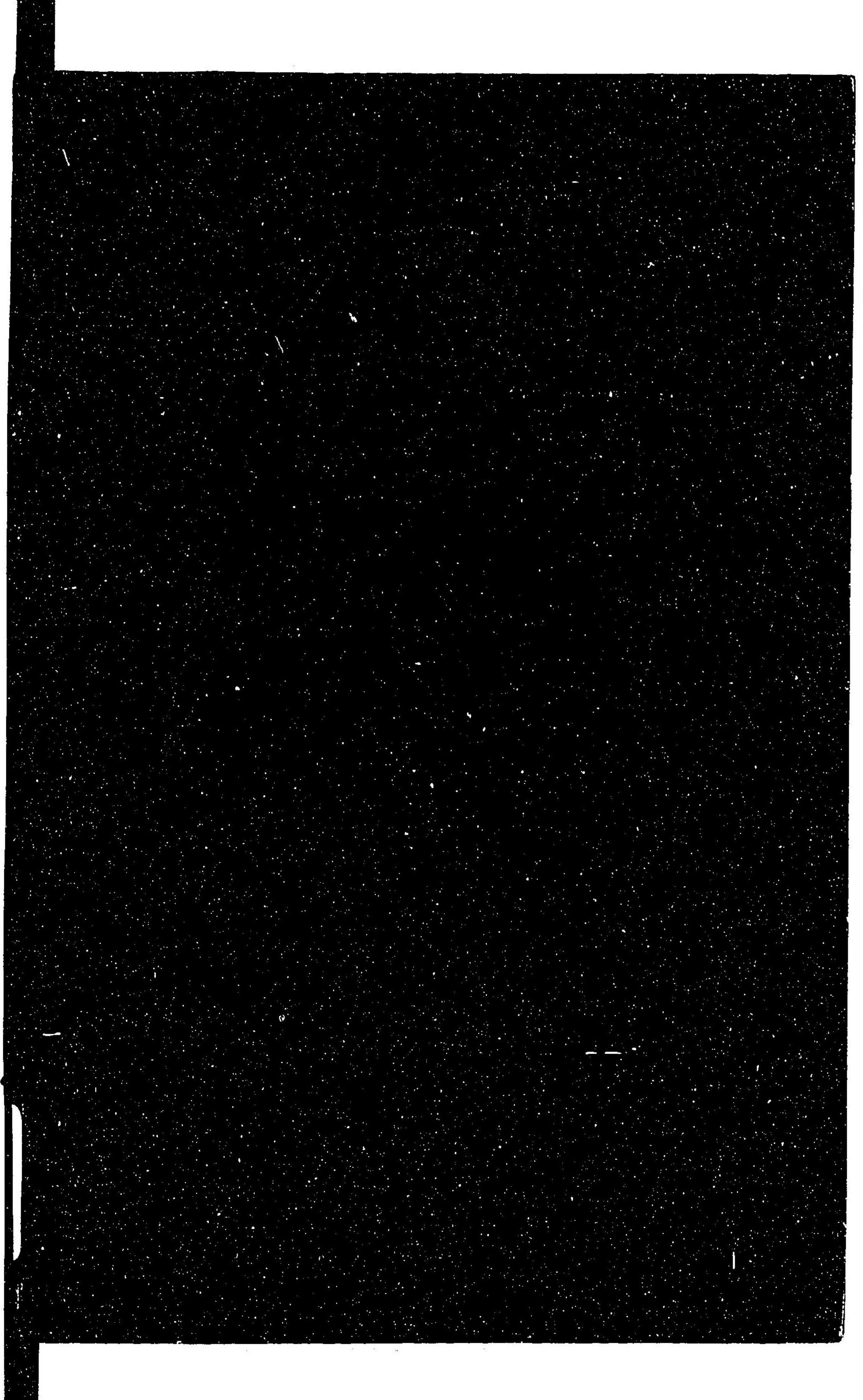
中村春雨氏著
 ○歐米印象記 金十三圓
 ○新譯牧師の家 金八圓
 ○ソノソノ 仰(再版) 附料八圓

水野葉舟氏著
 ○愛の書簡(三版) 附料八圓
 ○日記(再版) 附料八圓
 ○小品作法(近刊) 附料八圓

大町桂月氏著
 ○山上誤用便覽 (近刊)
 田山花袋氏著
 ○九州 (近刊)

大町桂月氏著
 ○關東の古城趾 (近刊)
 ○東京と武蔵野 (近刊)

335
89



335
89

070609-000-8

335-89

ヨヘイ画集

渡辺 与平/画

M43

CEC-2033



36.2. 6